

企業・事業者の地域貢献・地域との協働のあり方を考えるセミナー

日時：平成19年2月27日（火）13：30～16：00

場所：三重県総合文化センター棟2F セミナー室A

（司会）

それでは、定刻となりましたので、只今より「企業・事業者の地域貢献・地域との協働のあり方を考えるセミナー」を開会させていただきます。

皆様、本日はお忙しいところ、三重県環境森林部ごみゼロ推進室、環境活動室並びに企業環境ネットワーク・みえ主催の当セミナーにお越しいただきまして、ありがとうございます。

私は、本日の司会進行を務めさせていただきます、県環境森林部ごみゼロ推進室の清水と申します。どうぞよろしく願いいたします。

それでは、セミナーの開会にあたりまして、私ども環境森林部ごみゼロ推進室室長の垣野より一言ご挨拶申し上げます。

（垣野室長）

皆さん、こんにちは。本日はどうもご苦労様です。

ごみゼロ推進室長の垣野でございます。

本日はお忙しい中、このように多数お集まりいただきまして、ありがとうございます。

さて、環境行政、従来のリサイクルとか、あるいは公害という視点から、資源循環型社会形成というふうに変遷をしまいできております。

そういう中で、循環型社会の構築ということから、従来のごみをいかに処理するかという単純なことから、これからはいかにごみを出さないか、あるいは事業者にとってはいかに出さないように処理をしていくかというふうに変わってきております。

こういった中で、ちょうど2年まえになりますが、三重県では『ごみゼロ社会実現プラン』という計画を策定いたしました。ちょうど2年前の平成17年3月になりますが、このプランの作成にあたりまして、県民の皆さんとか、あるいはNPOの皆さん、あるいは市町の皆さん方の参画を得て策定したわけでございます。ちょうど20年先を目途にいろんな目標等を掲げております。

また、このプランにおきまして、県民の方々あるいは市町の方々、あるいはNPOの方々、あるいは事業者の方々を含めて、どういうふうに取り組んでいくかということ、具体的な事例とか、あるいはスケジュール等を定めておるところであります。

このプランの一環といたしまして、ちょうどこのプランの事業を始めて2年になるわけですが、昨年度から事業者の方々に対しまして、あるいは県民の方々に対しまして、いろんなセミナー等を開催してきておりまして、ちょうど今年で2年目になるということです。

今年の事業者セミナー、最初の事業者セミナーにはなるわけですが、事業者の方々、今回のテーマであります、地域においてどういうふうにCSRと申しますが、事業者の方々が社会貢献していくか、あるいは逆に地域の方々がどういうふうにそれを協働していくかというふうな視点で今日のセミナーを開催させていただいたところでございます。

特に事業者の方々におかれましては、それぞれの事業活動においていろいろなノウハウを持っておみえになります。そのノウハウをうまく地域の方々に還元していただく、あるいは学校教育、環境学習等でもうまく利用していただくというふうなことで、どういうふうにしていけばいいかということで、今日はNPOで事業活動と地域の方々との橋渡しをしておみえになりますNPO法人の小川様、それから実際に事業者として実践をしてみえます赤澤様、それからまたISO14001の観点から、地域の学校で実践をしてみえます富士ゼロックス三重の松井様のお三方からご講演、それから実例をお聞かせいただく予定にしております。

このような視点から、それぞれのお立場から、事業者の方、あるいは県民の方、あるいはNPOの方、市町の方、それぞれの視点から本日のこのセミナーがお役に立てればというふうに存じておりますので、よろしく願いいたします。これをもって挨拶に代えさせていただきます。

本日はよろしく願いいたします。

(司会)

垣野室長よりご挨拶申し上げます。

皆様のお手元に『ごみゼロ社会実現プラン(普及版)』というものが行っております。これが今ご挨拶の中で申し上げました、2年前に県が作りましたごみゼロ社会実現に向けましたプランでございます。中身は数値目標はじめ、各主体にどんなお取り組みをしていただきたいか、期待されるかということが書いてございます。

このプランに基づきまして、平成17年度、それからこの18年度で取り組みを進めておるわけですが、もう一冊『ごみゼロレポート』という冊子がいっておるかと思えます。こちらは昨年、「平成17年度に県が取り組んだこと」というふうに副題があります

が、県が主体でやったものもございますれば、市町の事業を県が支援させていただいた、あるいは地域住民の方ですとかNPOの方ですとか、いろんな方と協働してやらせていただいた取り組み、こういったものを実際にいただいた方の生の声を合わせた上で分かりやすくまとめておりますので、こちらの2冊もまたご参考に見ていただければ幸いです。

さて、本日のセミナーでございますが、ごみの減量化と、それから環境教育、この視点をピックアップいたしまして、講師の皆様よりお話をいただくことにいたしております。

本日のセミナーの流れでございますが、改めてお手元のご案内のプログラムにもございますとおり、このあと小川様より約1時間を目処にご講演いただき、その後、休憩を挟みまして、松井様、赤澤様よりお話を頂戴します。

なお、ご質問につきましては、お三方に一通りお話いただきましてから、質疑応答の時間を設定させていただいておりますので、質問につきましては最後のその時にまとめてさせていただくということでお願いいたします。

それでは、本日のお一方目の講師でいらっしゃいます小川雅由様より「多様な主体との協働による企業のCSR活動」と題しましてご講演を頂戴いたします。

小川様、よろしくお願いたします。

(小川)

皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきました、NPO法人こども環境活動支援協会の小川と言います。よろしくお願いたします。

1時間ということですので、それと今日は皆さん、事業者の方が結構来られていますから、私たちの協会がこれまで企業の方と連携して取り組んできた事例を交えてお話をしたいと思います。

先に私の経歴から言っておきますと、プロフィールのところにも書いていただいておりますが、去年の3月で西宮市役所を退職しまして今はフリーの形になっています。市役所には1972年に入所し34年間勤めました。高校を出てすぐ入りましたので、ちょっと長かったんですが、もうそろそろ官の仕事は辞めて、民の仕事に入ってみようかなと思って、今に至っています。

市役所に入った時、最初は電子計算課という、当時まだ「オンライン」という言葉もないような大型算盤機を扱うコンピューターの仕事をちょっとやりまして、それから固定資産税の家の評価をする仕事をやりまして、それから支所で外国人登録という住民登録系の

仕事をやりまして、そのあとに環境局に異動になりました。最初にやったのは「環境白書」づくりでした。そのあと風俗営業等の規制の仕事をやって、あと、環境啓発の仕事、水質汚濁に関する規制の仕事というようなことをやりながら、環境局の中で主事から係長になり、課長補佐を経て、そのまま課長になりました。課長を3年やらせていただいて、とりあえず自分のやるべきことはほぼ終わったかなと思って、去年退職しました。

その環境局、環境保全の課の中に行った仕事の一つに、このこども環境活動支援協会を立ち上げるということがありました。今日のテーマ、「多様な主体との協働」という言葉がありますが、その多様な主体というのが、市民、事業者、行政、それから市民の中でもそういうNPOとかそういった人たちも含めてという意味での「多様な主体との協働」を考えています。また、企業のCSR活動というのがあります。CSRというのは、企業の社会的責任ということですが、企業にとって、このCSR活動というのはどういう意味になっているのかなということちょっと考えてみたいと思います。

今言いましたように、平成10年に西宮市役所が呼びかけ人になって、市民と事業者と行政、それと専門家の方がまんべんなく理事を構成しながらこども環境活動支援協会を設立しました。平成14年にNPO法人として兵庫県から認証資格をもらいまして、ちょうど来年度、19年度で10年目を迎えます。

この略称で頭文字を取って「LEAF」と呼んでいますが、なぜ行政がこういうNPOを呼びかけ人になって作ったかということですが、皆さんの中に「こどもエコクラブ」という環境省の事業をご存知の方がいらっしゃると思うんですが、西宮を基本モデルとしてからスタートしました。その「こどもエコクラブ」の最初のシステムを環境省から言われて僕が作らせていただいたんですが、そういう西宮市でやってきたこども向けの環境教育のノウハウがそれなりに全国で通用するというある意味ちょっと先進的なことをやらせていただいたということがありました。しかし、「役所と役所」の関係も結構難しいところがあり、西宮市で実施されたものが全国のモデルになったらしいと言うと、隣の町は何か違うものを考えます。何が大事かということ抜きに自治体間ではそんな感覚があるということが分かりました。こうしたことからこういうノウハウは民間で開発してその成果を発揮できる仕組みのほうがいいんじゃないかというようなことも感じていました。

それともう一つは、「環境教育」というジャンルを行政主導でやるのがいいのかということもありました。そもそも環境問題の解決というのは、行政が解決するのではなくて、やっぱりそこに住んでいる人間に自分たちのより良い環境を求めて解決していく主体的な

活動でなければいけないということを考えたら、環境教育の分野も行政主導から、やっぱり市民が主体になって動いていくような活動に本来はなるべきなんだろうなというようなことを思いながら、西宮の環境教育も行政が呼びかけて作ったものだけでも、いずれかの段階で民のほうに移したいなと。そのためには、やっぱり民に何らかの受け皿が必要です。

そういうこと等々がありまして、市民のボランティア養成とか実際の活動への参画の方法を模索していたんですが、決定的なのは平成7年の阪神・淡路大震災です。今まで予算が2,000万近くあったのが、190万ぐらいにガタンと落ちて、金のないところから事業をしなければならなくなりました。庁舎ももうほぼ倒れかけていましたので、庁舎から追い出されてプレハブで仕事をしていたんですが、そこに集まってきてくれたのは、その当時の子どもの環境教育を支援するボランティアの方たちだったんですね。

その人たちと今後どうしようかと話をして、平成7年という年は、環境省の「こどもエコクラブ」が発足する年でした。西宮でその旗揚げ式をやろうということで、ホテルも押えて、全部準備もしていました。当日、僕は布団の中でワープロを叩きながら企画書を書いていたら地震があって、全部飛んでしまって、もうその事業もできなくなりました。市民の方々の中には、やっぱり何とかもう一度そのこどもの環境教育の事業を盛り返していきたいという気持ちもありました。

そんな中で、平成8年、キンビールの社員の方がボランティアをしたいとってきてくれました。山村さんと言いますが、今は本社の社会環境室長をやっています。地震の時に自分は会社に行ったきりで、地域に貢献できなかったというのが自分の中で悔しかったということがあり、何か地域に貢献することがしたいんだけどという話があったんです。

キンビールは、3年間のボランティア休業制度というのを持っているんです。3年間です。3年間会社を休んで、そういう社会貢献ができるんです。その代わり、給料は6割です。ボーナスはなし。退職金の年数は外れます。けれども、彼はそれをやりたいということで、2年間会社を休んで、西宮市の子どもの環境活動「地球ウォッチングクラブ」の市民スタッフとして働いてくれました。

その中で、この協会を一緒に作ろうということで、僕は行政の中で市長まで決裁を上げ、彼は一緒に企業を回り、営業しながら会員を獲得する動きをしてくれました。ですから、この協会自身は市が呼びかけて作ったというものの、生活協同組合コープこうべであったり、このキンビールの社員の方の貢献があったことによりできあがった団体です。

LEAFの活動の大きな柱は5本ありまして、地域に根ざした持続可能な社会に向けた

教育をやろうということと、自然体験活動を推進するための支援事業をやろうということ。それからあと、企業会員と連携した環境教育、世界の子どもの環境活動を紹介する事業、広報活動です。なぜここで企業が入っているかと言うと、LEAFの発足当初の会員は、企業会員が85社、それから個人会員が100人ぐらいで、もうほとんど企業会員と個人会員が同じぐらいのところからスタートしています。そういう意味で、企業さんからいろいろと応援してもらうことが多かった団体です。

当時、この団体を立ち上げる時に一番救いになったのは商工会議所なんですね。商工会議所のその当時の会頭がお酒の『大関』の社長さんです。そんな中で商工会議所の会員を集めた総会の中で、この協会の立ち上げをするという説明を私たちがした後に、21世紀は環境と教育と子どもの時代だと。このことをちゃんと理解しない企業はもたないぞというようなことをみんなに話をしてくださいました。こういうものが西宮から立ち上がることは非常に喜ばしいことだから、ぜひ会員になってみんなで応援してやってくれということをおっしゃっていただいたことが、今でも耳に残っています。

それで、このNPOは何をするのかということですが、社会の中では市民、行政、企業、学校、地域団体、いろいろな主体が環境教育を推進していますが、一番の弊害は何かと言うと、それぞれがバラバラで動いているということです。市民は市民でサークルを作ってやっているし、行政は仕事だと言いながらも、自分たちのスケジュールに合わせて仕事をやっている。たまに講師で企業の方を呼んだり、市民の方を呼んだりということはあっても、事業が一緒につながっているかと言うと、つながっていない。企業の方も何かしたいんだけど、何からしていいのか分からない。

学校は、当時、まだ環境教育がそれほど積極的にはできていなかった時代です。1992年ぐらいからようやく文部科学省のほうでも環境教育ということを実体化し始めましたけれども、学校も、環境教育と言われてもどういうところから手を付けようかということに迷っていた時代です。その後、1996年頃から総合的な学習の時間というのが学校で試行的に始まり、環境問題とか人権問題とか平和の問題とか地域の問題とかを、どういうふうにかこれから子どもたちに学んでもらったらいいのかということを考え始めるんです。

そんな時代の中で、一番大事なものは、それぞれの主体をつなぐ役割を担うことではないかということで、「子ども」「環境教育」「町づくり」、そういったことをキーワードで進めていく事業のつなぎ手として活躍できるようなNPOになろうということを目的にしました。

この団体を立ち上げた時に、役所の中ではいくつかの問題がありました。どんな問題があったかと言うと、一つはいわゆる既存の団体に対してよく行われている補助金の支出をどうするかということです。もう一つは、事務局に市職員を派遣して内部事務を行わせると言う問題です。やるという、外郭団体の場合はどうしてもこうした色合いが強くて、いろんなどころにお金と人が下りていました。だけど、これは一切やらないということを経済的に最初に確約しまして、経済的には自立していってもらおうと。市の力に頼らなくても運営できるようにしていってもらおうということで、ただ、行政が呼びかけながら、突き放すことはできないので、経済的自立ができるようになるまでは、市の環境学習施設の中に事務局は置いてもらい、光熱費等の事務所経費は市が負担して、そういうことも全部完全にクリアできるようになったら独立してもらおうという形で整理をしました。そして、2005年に完全に自立をして、市との間は委託契約、委託・受託の関係ではありますけれども、お金も出していませんし、事務所経費についても完全独立をするということで、約8年かかって切り離しが終わりました。

こういうことで、この協会があるという前提のもとに、ちょっとお話をします。今現在は、生活協同組合コープこうべの建物の1階にこの協会（LEAF）の事務所と、それから西宮市の環境学習サポートセンター、こういったものが併設であります。あと市の施設としてミニ水族館がありますが、これは以前コープのフードコーナーだったところなんです。長年閉めておられたので、そこをきれいにして、フードコーナーのカウンターだったところに水槽を乗せて蓋をして、上のメニュー板を魚の写真に入れ替えて水族館になったんですが、だいたい200平米ぐらいのところですが、200万足らずで水族館兼事務所に改造して、ビフォー&アフターで今ちょっと繁盛している場所です。

これまでの環境活動は、いろんな分野での事業展開がありました。例えば環境教育を進める人材育成の事業とか、ごみとか自然などをテーマにしたプログラムを開発するような仕事、副読本とかテキストとか、そういう教材を作るような仕事、あとインターネットとかで環境に関する情報を流すような仕事などです。環境教育を進める上ではそれぞれ大事な要素ではありますが、一番抜けていたことは何かと言うと、その町の中で子どもの環境活動をつないでいくためのシステムという考え方がほとんどなかったことです。地域と学校と家庭で子どもたちは生活しますけれども、それらをつなぐシステム、これをどうするかということで作ったのが、この「エコカードシステム」です。

エコカードは協会ができた98年からスタートしておりまして、今年10年目に入ります。

これは小学生だけなんです、現在は中学生以上の市民を対象に「エコアクションカード」という大人版のカードシステムも加えて、これからこれらを地域で展開するエココミュニティに発展させようということで、今その体制づくりをしています。

最終的には中学校区を基本単位とする「エココミュニティ会議」という、地域の住民団体の人や事業所、行政職員でその地域の町づくりをしたいという人で構成する地域単位の活動の場をつくることになります。

市役所のホームページには、各地域で市民が取り組んだエコアクションが全部数字で表せる仕組みになっています。例えばマイバッグをどれぐらいやったりとか、グリーン購入をどれだけやった、美化活動とか環境学習、自然体験、何件ぐらいの活動をやったかということが数字で出るようになっていきます。小学生は何人、それ以外の市民は何人、これが全部各中学校区ごとに数字を見ることもできるようなコンピューターのシステムを作っています、これから市民がいろんな活動をする、ここにどんどん報告さえしてくれれば数字が反映できて、地域の活動が数字で見ることができます。まだこれは完璧ではありません。

これが「エコカードの仕組み」ということで粋だけできたというところです。今日、三重県が作られているごみゼロの資料、レポートを見せていただいたら、いろんな活動がもうあります。きっとそれぞれの市町村の方でもいろんな活動をやっておられると思います。それはごみに関する活動だけではなくて、美化活動とか緑化活動とかいろんな活動があるんですね。ところが、その活動がどんなふうにつながって、その地域全体の底力になっているかと言うと、そこがちょっと弱いような気がします。

子どもたちにとっての環境教育の分野も、環境問題と出会っていないかと言うと、いっぱい出会っているんです。例えば学校教育の中なんか、環境に関する授業がいっぱいあります。理科でも社会でも国語でも図工でも道徳でも、いろんなところで環境問題は出てくるんです。

ところが、子どもは環境問題を学んだという意識になっていないケースが多いんです。何故かと言うと、学校の先生が例えば国語で出てきた『森林からの贈り物』という文章を読んで、最後にやることは何かと言えば漢字のテストなんです。やっぱり国語なんです。なぜ漢字の勉強をするかと言うと、この文章を読み込んで、作者のメッセージを理解するためにこの漢字が分からなければダメだからなんです。漢字を先に勉強して読み込んで、そのメッセージをちゃんと吸い上げたら、それは環境の授業になります。そこがちょっと



逆転すると、国語になってしまうんですね。理科も同じです。図工も同じです。

子どもは環境と出会っているのに、教師側がちょっと気づくチャンスを作っていないということだけで、子どもの学びが違う方向に行ってしまうというようなことが、学校教育の中では嫌と言うほどあります。先生たちに学校でいっぱい環境の授業があるでしょと言ったら、「ない」と言うんですね。「うちは、環境教育の指定校になってないから、環境はやってない」という縦割りの話です。福祉の研究指定校になっていたら福祉はやっているけれども、環境はやってないと。人権問題でも同じで人権問題の拠点校だけど、それ以外はやってないとなってしまいます。けれども、絶対そんなことはありえません。

教科の中にも環境は入っているし、人権問題だって環境問題とのつながりはあるし、だけれども、その先生たちの頭の中にもしそのつながりがなかったら、切れてしまうんです。子どもはせっかく学校で環境に関することをやっているのに、つながらない。

地域でも同じです。僕も昔、子ども会をやっていたんですね。子ども会をやっていたら資源回収をやるじゃないですか。リヤカーを引いてガーッと回ったら、もう20年ぐらい前ですが、3万円ぐらい集まったんですね。そうすると子ども会にとっては大きくて、活動費がいっぱいできるんです。子どもたちと話した時に、「3万円で次にどんな活動をしようか」という言葉が最初僕の口に出ていたんですね。その当時はまだリサイクルとか資源回収ということが環境問題という意識が僕の中にあいりませんでしたから、お金、イコール活動費であって、新聞回収をしたことが地球環境の問題とか森林保全につながってないんです。そうしたら、子どもも同じことを受け継いでいますから、地域での資源回収の活動は子ども会の資金集めのためにやった活動で、環境保全じゃなかった。というようなことは、美化活動にしても、いろんな面で地域の大人から子どもに関わりを求めて、接点はあるのだけれど、その接点が整理できていないとそういうことになってしまいます。

家庭でも、最近、マイバッグやリサイクル、グリーン購入などお店との間で環境問題と出会ってくるチャンスは色々あります。しかし、親が自分が忙しいからといって牛乳パックを子どもにスーパーに持って行くよう頼むだけだったら、結局子どもは親が嫌なことを押し付けたと思うかもしれません。それを一緒に行って、ちゃんと資源リサイクルしようと言えば、子どももそういう意識になってくる。このように親の一言で子どもも変わるチャンスがあるわけです。

また、例えば学校の先生が合成洗剤を使わずに石鹼で洗濯しようと言ったとして、家に帰ると親が「何言っているのよ。あんなので洗ったら後が大変なのよ」と合成洗剤を使う

と、子どもは両方の間でどっちを取ったらいいんだろうと迷ってしまいます。大人の価値観がそれぞれバラついていると、子どもはどこへ自分の価値観を持って行ったらいいか分からなくなります。ということは一番自分が迷わないで、とりあえず言うことを聞いておいたら無難なところで適当に価値観を作っていく。

そういう地域と学校と家庭の中で子どもたちがバラバラになることを防ぐために、何かつながらないかなというので作ったのが、この「エコカード」の仕組みです。カード自身はもう本当に簡単なものです。

1・2年生用と3・4年生用と5・6年生用と3段階に分かれていて、裏にスタンプが押せるようになっていきます。地域と学校とお店でスタンプがもらえるんですね。現在スタンプがもらえるところは1,700ぐらいになっていて、自治会も3分の1ぐらいが持っていてくれますし、市内のスーパーマーケット、文具店は全部置いてくれています。学校の先生全員にも預けて、それぞれ活動するとそこでスタンプがもらえる。スタンプが置いてあるところにはステッカーが貼ってあります。

カードとスタンプを大人と子どもが持っているという単純な仕組みです。地域の中で環境活動が地域の文化として根付いていくために何が大事か考えたら、環境問題に熱心な人が一生懸命頑張ることではなくて、普段環境問題に関心のない人が一歩前に歩んでくれるかどうかです。

このエコカードを導入するまでの活動では、「環境の活動をやりたい子、手を挙げよ」というやり方をやったんです。そうするとやりたい子が手を挙げてきます。けれども、やりたくない子、関心のない子は置いてけぼりになるんですね。今回、このカードは市内の小中学生全員(27,000人)に配りますから、やりたくなくても、やりたくても、まずは平等にチャンスはあります。それを後は、子どもたちの周囲にいる親や、先生、地域の大人の働きかけ、そして本人の意思があれば、やろうと思えばいつでもどこでもできるのです。

そして1年生から6年生までつねにチャンスがありますから、そういうチャンスの中で自分たちが活動したい時に行うことができます。

しかし、子どもたちが活動しようとした時に、大人がちゃんと応援する体制がないとできません。今、10年経ちましたが、スタンプを返してきた人はいません。どんどんスタンプを預らせてくれと言ってくれています。そういうことは、子どもの環境活動を支援するという大人のネットワークは根付いたということです。これが大事です。普段全然環境のことを言わないような文具屋のおじさんでも、子どもが来たら判子を押してくれると。

なぜかと言えば、環境にやさしい再生紙のノートを買ったから。これでいいんですね。

こういう時に、逆に子どもがカードを持ってきてくれたら、その時大人は判子を押すことを通じて、やっぱり環境問題に関わっているということを自覚するわけですね。ですから子どもが大人の自覚も促すし、地域と学校と家庭もつなぐ、企業の人と先生と親をつないでいく。地域の大人もつないでいく。そういうつなぎ手というのが、それほど意識しなくても地域の中で根付くというような、そんな仕組みを作っていこうというのが西宮市とLEAFで考えた「エコカード」のシステムです。

但し、これはあくまでも仕組みなので、この仕組みをもう一つバージョンアップさせるためには、日常的な学校の授業の中にどう関わるかということがあります。特に小学校をベースにこれまで学習支援を行ってきました。

西宮の場合、小学校では学級担任の先生というのは毎年変わります。だから、子どもが1年生に入ってから6年生で出るまでの間にどこかでまた同じ先生にみてもらうかも知れないけど、連続してみてもらうことはないんですね。そうすると、1年生、2年生、3年生、4年生、5年生、6年生とずうっと上がっていきませんが、子どもの成長を連続して見届けてくれている人がいないということに気が付きました。学校の先生は、自分の受け持った学年の子のことは一生懸命ですが、前年度のクラスの子どものことまでを継続して見ていくということは難しく、どうしても年度で途切れてしまわざるを得ないのです。

この途切れをなくすためにどうしたらいいかということで考えたのは、親がちゃんと入っていくということです。親たちしか子どもをこの6年間の成長を見届ける人がいないということに気が付いて、保護者・PTAの人たちに対して子どもの環境教育に支援するという流れを作りました。研修をやったりとか実際にプログラムをやる時には親に入ってもらったりとか、PTAが使える授業時間をもらって一緒に授業を行ってきました。そうすると、親も先生の大変さが理解できるようになってきます。

そして、1年生から6年生までを体系化してみると1・2年生は「家庭」・「身近な自然」、3・4年生は「地域」・「暮らし」、5・6年生は「社会」・「生き方」、を学んで、発達段階に応じたそれぞれの活動領域やテーマに応じた学習を行うよう心がけ、生活科や総合的な学習の時間で、先生や保護者たちと一緒に積み上げていくというやり方を進めています。

学習者としての子どもを支援する側には、先生も親も企業もNPOも行政など様々な主体がいます。これらの各主体がどのように連携するかということが大事になります。

また、私たちの場合、1995年に大震災を経験したことから、防災教育と環境教育も

つながないといけないという思いがありました。シニアの人たちが中心になって、地域の歴史・自然・文化を語り継ぐ活動というのを語り部活動として行っています。語り部の人たちがPTAの方を対象に研修でやったりとか、実際に先生と一緒に子どもと地域学習をしたりというようなことがあります。こういう地域全体の中で学びの仕組みを作っていく、これを子どもたちの授業の中で進めていくということも一つの活動としてあります。

また、LEAFの活動の大きな柱としては、自然体験活動を推進ということがあります。今、LEAFのほうでは、指定管理者として自然体験型の施設、キャンプ場の管理運営を行っています。

さらには、持続可能な社会を考えるためには、農業の勉強が重要だということで助成金をもらって実践セミナーを始めました。60歳を超えた人たちが初めて田んぼに入って、田植えをしたり稲刈りをしたりしながら、農業と地域の里山の自然と自分たちの生活を教育に結びつけるため、どのような活動の仕組みをつくれればいいのか検討を行っています。

今日は「企業・事業者」の方が多くおられますが、この農家の方はすごく、改めて「百姓」という意味を考えさせられた方でした。

単に作物を作るというんじゃなくて、作物を作るための大地を作ることから、それからこういう斜面地の壁を作ったり、ちょっとした道具だったら全部自分で修理して直してしまいますし、自然との対話も含めていろんなことを自分たちの力でやっていく。こういう技術や知恵というのは、本当に今、誰が伝承しているのかなと思ったら、後継者がいないんですね。企業さんは社員さんがたくさんいるから、まだその中に後継者がいますが、百姓さんというのは本当に自分の息子、娘が受けてくれないと消えていく、そういう世界で、ちょっとこのところも本当は大事にカバーしていかなければならないと感じました。

で、今日の本題の「企業会員、事業者と連携した環境学習」ということですが、ここで言う事業者というのは行政も入ると認識しておいていただいていいと思います。ですから、企業・事業者で、行政は別物じゃなくて、行政の方も事業者としてどういう社会的な責任があるかということを考えてもらわないといけません。

CSRとは企業の社会的責任のことですが、現在、国際的な規格づくりの中では企業だけでなく事業や行政など、あらゆる組織を対象に議論がなされており、あらゆる組織にとってSRとは何かということが問われています。

少し前に、NPOなどを対象とした組織マネジメントの会議と言うワークショップ

に講師として呼ばれて行ったんですが、そこには企業の方も行政の方もおられて、NPO、NGOの方がおられて、一緒に組織マネジメントを考えたんですが、一番弱いのはNPO、NGO、次に弱いのは行政、企業が一番進んでいると感じました。

なぜかと考えて見ますと企業にとって社会的責任というのを果たすということが会社の方針の中に入っていないければ、もう社会で通用しないんです。だから、ミッションと言うか、方針の中に考え方がちゃんと入っているんですよ。大手企業になればなるほど入っています。けど、大きくなればなるだけ末端社員との間に意識のズレが生じますから、徹底できているかどうかは難しいですが、CSRの考え方は入っています。

NPOの人たちがあなたたちの社会的責任は何ですかと聞かれたらどのように答えるでしょうか。行政の職員に対してあなたたちの社会的責任は何かと聞かれたら何と答えるかと言ったら、答えがなかなか出てこない。なぜかと言えば、当たり前すぎて、普段改めて考え直すといったトレーニングができていないんですね。これは不思議なことです。役所の職員の人に、皆さんの社会的責任は何ですか、何を目標にしてどういうことのために仕事をやっていますかと聞いていくと、ハタと止まってしまうことがあります。

今、このCSRの国際規格を作ろうということで検討が進められていますが、途中でCを取ってしまって、今は、国際規格の対象はSRということで動いているということです。

あらゆる組織が自分たちの社会的責任ということをもっと明確にして、社会の中でお互いが問われるようにしていこうと。問い合いながらお互いを育て合っていきましょうという構造に動いていますから、ここで今からの話も、企業の人だけの問題だと思わずに、むしろNPO、NGO、行政の人も、じゃ、自分たちの社会的責任とは何だったんだろうなということちょっと考えながら聞いていただけるといいのかなと思います。

LEAFが進める企業会員との連携事業として次の二つがあります。この内の企業会員との協働による環境学習のプログラム開発の紹介をします。

冒頭に言いましたけれども、LEAFができた98年にその会員さんが85社と言いました。僕とキリンビールの社員の人でその企業をだいたい150社ぐらい回ったんですが、ちょうど某証券会社さんが倒産した年で、もう企業を回れど回れど、みんな「経営が厳しい、厳しい」ばかりで、本当に会員になっていただくのが難しい中で、半数を超えるところがなっていたのはもうラッキーだったと思っています。その中で一番ありがたかったことは企業さんにはいろんな業態がありますから、いろんな話が聞けたことです。企業の人たちから会社の経営の問題やら、会社の業種の問題やら、環境問題の取り組みなどに

関することを 150 社から話を聞いたら、もういろんな情報が入ってきます。

その情報が入った時に、会員になってもらえる、なってもらえないは別にしても、話ができる情報が入ってくるということだけでも大きな意味がありました。が、それらいろんな企業のことを整理していると、企業と企業がいつながつながっていることが分かりました。

例えば、西宮は酒の町ですから、酒屋さんがいっぱいあります。酒屋があるということは、当時、一升瓶にお酒を入れますから、瓶を作る会社があります。瓶を作る、そうすると、割れた瓶をカレットにする会社がある。もういっぺん瓶を洗って使う、リユースする洗瓶会社がある。その瓶を箱に詰める箱の会社がある。また、瓶を作るための金型を作る会社もある。そういうふうに関することの企業があるんです。これってすごいんじゃないかと。これだけでも環境教育ができたみたいな思いでした。

企業さん同士は普段仕事で付き合っているけれども、自分たちのつながりが子どもの環境教育につながるなんていうことは考えていないわけですね。そういうチャンネルがもう本当に西宮市内だけでもいっぱいあって、この力を地域に還元しない手はないぞというので、企業さんとのつながりをどうしたらいいかということを考えて行きました。

この 1998 年から 2000 年までは、リサイクル関係の業者さんばかり集まってもらって、業界がどういう状態かということの情報交換会を行いました。後から事例報告してもらって、大栄サービスさんを含めて、瓶の関係、鉄の関係、紙の関係、布の関係、生ごみとか一般廃棄物の関係とか、そういういろんな業者さんでリサイクルの現状はどうなっているかという話をしていたら、みんな経営がしんどいと言うんですよ。集めても集めても単価が落ちていくばかりで、このままでは仕事がやっつけられないという話をしている、何でそうなるのかということをお話し合いました。

行政も資源を集めよと言っているじゃないかと。行政などが一生懸命集めれば集めるほど、結果的に単価が下がって行って、回収してもお金にならない、このままだったらもう止めたほうがましだということでした。行政から補助金をもらわなければやっつけられないという話になってしまいます。

どこに問題があるかと言えば、集めた資源を使ってメーカーがリサイクル商品を作らなければならぬ。当時では、メーカーも何かリサイクル商品を作っておかなければ格好がつかないというところもあって、何か作る。けれども、次に消費者がリサイクル商品を買わない。メーカーにしてみれば製造ラインは 2 本なんですよ。バーゲンで作るものとリサ

イクルで作る2ラインを作らなければいけないような、二重投資になっていたんです。だんだん経営はしんどくなるから、止めるか、もう1本に絞るかという話になる。それではなぜかと言えば、消費者が買わないから。ということは、リサイクルすることと、グリーン購入をちゃんと回す、この二つが両方くっついていなければダメなんだということが分かって、それで今度は文具をテーマにしながら、文具メーカーとその両方を考えるためのシステムを作るとか、というふうに順番にいろんな業態と環境との接点を模索しながら、2003年までやってきました。

最初の頃はもう本当に単発で量販店を使って、環境にやさしい商品にマークや、お店の環境の取り組みを学ぶようなお店探検プログラム、これはだいたい地震の前ぐらいからやっていました。あと、さっき言った瓶の一生を考えるバスツアーということで、公民館の講座なんかでそういう関係会社を回りながら、子どもたちに考えてもらう活動もありました。

瓶のカレットを作ったり洗瓶したりという現場は、どこも音はすごいし、破片は飛んで来るし、臭いはするし、すごいですね。働いている人は高齢の方が多かったりと、そんな現場を見たら、自分が分別の時に瓶を出す時にちょっとすすいで出すとか、キャップのところを外すとかいうことをしなかったら、おじさんやおばさんたちが大変だということが分かる。そういう現場から学ぶということがいかに大事かということが、こういうメニューで分かったりしました。他には文具貸し出しセットを文具メーカーの方に協力してもらってセットを環境学習用教材として貸し出したりとかの活動がありました。

あと工場、西宮にはアサヒビールの工場があり、工場内にビオトープがあったり、工場のごみゼロの活動があります。学校の授業でこの工場を使わせてもらって、環境学習を進めていました。さっきのお店探検プログラムの時も、当時、サティさんのお店を使ってジャスコの人とコープの人とサティの人が一緒になってプログラムを作って、プログラムは全部各社共通で使えるようにしました。そういう常に同業他社のエリアを越えて一緒にやりましょうという協働の精神で今までやってきました。さらに文科省の助成事業としても、地域の企業と子どもたちの学習をつなぐという活動を行い、そして2003年に一つの集大成として今回の企業プロジェクトへとたどりつきました。この時に、先ほど言いました子どもたちと企業さんの出会いを作る一番のポイントは、企業の社会的責任、ここまで言わなくてもいいですが、企業の持っている力を社会に還元して欲しい。これはものすごく分かっていただけで分かっていただけない問題でした。しかし、ISO14001を取って、企

業さんが一生懸命環境管理を内部的にやっています。環境マネジメントですね。

最初のうちは紙・ごみ・電気、これを落とせというのでガッツと動くんですよ。3年目の更新の時になったら何が弱いかと言うと、地域とのコミュニケーションができていないよ、環境コミュニケーションをどうしているのかと言われてたら、工場の周りを掃除しています、それではちょっとしんどいんじゃないですかと言われてたら、次どうしようか、社会との係わりをどうしようかというのが、企業さんの多くがぶちあたる問題だったんです。

社会との接点というのは何も奉仕活動じゃなくて、本来自分たちがやっている仕事の中身そのものが、社会に対して貢献できる技術や知恵やいっぱいあるんですよ。けど、それは全部会社の中にグッと閉じこもって入っていて、社会の教育力につながっていないんじゃないかということが気になっていました。企業さんの持っている力を社会の子どもたちの教育の中にもっと引きずり出そう、そのことで企業さんにとっても社会で認められて、企業の持っている力が社会に貢献できるとすれば、本業を通じた活動ができるんじゃないか。本業じゃないところの活動では、やっぱり無理に無理を重ねますから長続きしない。社会というのが産業で成り立っているとすれば、その産業自身がいかに循環型の産業として回っているかということをもどの業種においても、子どもにきっちり見せないといけない。

企業さんも、それぞれどんな業種の方も、原料があって、それを加工して生産して、流通、販売、最後は消費者に使ってもらったりして、最終処分するわけです。絶対その輪があるはずなんです。その循環の輪の中でそれぞれ業者さんは役割を持っている。作るのが悪い、最終処分が正しい、じゃないんですね。全部一つになって、これで正解だと。ただ、それぞれのプロセスで環境に配慮しないといけないのは当然なんですけど、けれども社会全体のことを考えると、循環型の産業としてきっちり回っているということが一番大事です。

その時に、消費者である市民・子どもはどうするのかということを考えてもらうようなことをしないと、空回りしていくんじゃないかなということで、この企業プロジェクトでは循環型産業構造ということを一支柱にしました。そして、子どもたちにとって身近なテーマである衣・食・住・エネルギー・文具・瓶という六つの部会を作って、30社の企業がそれぞれ分かれて、自分たちの持っている企業特性をいかしてプログラムを作り、子どもたちに提供するということをしました。プログラムづくりの段階では、企業の人だけじゃなくて、先生、保護者にも入ってもらって、一緒にミーティングしながら、どの学年のどの授業でやるかということを考えてもらいました。

「服の一生」という分科会ではグンゼさん、チクマさん、帝人さん、日光物産。日光物



産というのはボロボロを回収しているところです。「食」であればJAさん、アンリ・シャルパンティエ、コープ神戸、大栄サービスさん。大栄サービスさんには後で発表してもらいますが、このプロジェクトとの特徴は何かと言うと、複数企業がチームを作っているということです。西宮では、1社が学校に乗り込んでそのまま授業をするということではできるだけしないようにしています。なぜかと言うと、西宮は社宅が多いということもあって、いろんな企業の社宅がありますから、急にキンビールが来てバーッとやったら、アサヒビールの社員の子が家に帰って言うと、何でキンだけ来て授業をやっているんだということになりますし、そういう同業他社のそういうお互いの牽制が公の教育の中に持ち込まれるとよくないです。そういう意味では公の教育の中では企業のやっている中身の話は複数の企業が、NPOというところから社会的な観点でもって授業の中で展開していく、そのことでできるだけ摩擦を少なくしましょうということから、複数企業の連携で授業展開をやるというような方法を取っています。

プロジェクトの進め方はそれぞれチームによって違います。クイズラリーみたいなことをやったり、体育館でテナントを出すような形でやったり、実際に現場回りをしたり、それぞれありますが、いずれにしてもこの「循環」ということは絶対外れないようにしようということをやっています。結構子どもたちにしてみると、普段、先生から教科書を通して聞く話だけではなくて、実際に現場でそれぞれ担当している人たちの話ですから、結構熱心に聞いてくれますし、目が輝いて、おもしろい。「住」、「エネルギー」であれば「住まいに生命を」とか、「くらしとエネルギー」というタイトルです。エネルギーの分科会では大阪ガスと関西電力が一緒に入っているんですよ。今営業面ではけっこう、競合関係ですよ。けれども、子どもの教育の中には競合はなくて、電気とガスの特性をちゃんと説明していただき、エネルギーを考える土台をつくっていただきます。新明和さんとか大阪ガス、ダイキンさん、関西電力さん、そういったところも一緒になって、いろんな実験をするなど工夫してプログラムを考えてやってくれたりしています。

「住」のこれは分科会では、自然と共生した住まいのあり方を学ぶということで、ここは「住む」ということがテーマです。市のほうで作ったエコハウスというのがあるんですが、そのエコハウスの設計をしてくれた建築士さんも入れて、実際にそこまで行って、エコハウスを見ながら学習をすることもあります。大きな住宅関係の建設会社なんかは、世界の住宅にはどんなものがあるかというようなことを話をしてくれて、それぞれの土地に応じてその家があるというようなこととか、そんな話をしてくれます。

また、自分たちで家を作ってみるという活動も入っています。住まいというものを実際に作って、そのアドバイスを企業の方がしながら、子どもたちが自分でその住まいづくりというものを考えていくというプロセスをやったりします。

「エネルギー」についてはなかなか「循環」ということが見えにくいんですが、例えば町の中の電気屋さんは何をするかと言うと、学校に電気が届いた時にはまずどこに届いているのかというのを学校の入り口に行って、その配電盤のところからずっと校内の電線巡りをしながらスイッチのところに行く。そういうことをやって子どもたちの電気の取っ掛かりを説明する。関電さんは、電気というのはもう本当に100キロ向こうからでも、この10メートルからでも1秒でパッと電気が点くという電気の性質をこういう実験をして説明してくれます。自分の身の回りの電気、ガス、自然エネルギー、こういったことを学ぶようなことをやります。

最終的にはやはり省エネを自分たちで努力しなければいけないので、省エネはどんなふうにやっていくのかということをおアコンを使って説明してくれたりします。たまたまダイキンさんの社員の方が、西宮市の市民で、子どもたちが学校に行っているというので、自分の子どものことでもあるしというので、熱心にプログラムづくりをやってくれています。

この方なんかはパッカー車などの特殊車両を作る、新明和工業の方です。飛行機を作ったりもしますが、会社の中でどうやって省エネをやっているのかという、会社の中の省エネの努力を子どもたちにその効果を見せるようなことを実験でやってくれたりとか、そんなことをしながら、大人も一生懸命そういう努力をしているから、子どもたちもやっぱり自分の生活の中でこんなことができるんだったらということの提案ができるような働きかけを行っています。

大阪ガスの方がこうやって鍋の大きさとか底の面積と沸く効率とか、そんなこともやりながら、どういうふうにお湯を沸かせばガスが少なくて済むのかとか、そんな実験をやってくれたりとか、他にも日本気象という会社からは気象予報なんかをやっているような方々がでてきてくれており、自然エネルギーの問題とか水の問題など気象との関連から取り上げてくれています。この授業はこれで終わりじゃないんですね。これはあくまできっかけづくりなんです。あと、子どもたちが、じゃ、自分たちはどういうふうに住んでいったらいいのか、衣食住、それぞれの分野でどうやっていったらいいのかということをお次にお考えをもらうための素材出しですから、答えがあるわけじゃないんです。考えるきっかけ

けですね。そういうところを最初にちゃんと先生と話しておかないと、もうこれが正しい、地球を守るために何々しようという、こんな答えの出し方をしたら環境教育はぶち壊しです。今教育に問われている知識伝達型の教育だけではダメで、考えさせるための教育をしないといけないわけですから、そのためにも先生たちからも話を聞きながら、プログラムの中に反映するようにしています。

あと、「お酒と瓶の物語」というのは、子どもは酒が飲めませんが、西宮の地場産業ですので、どこかでお酒のことは習うんですね。それもあって、こういうテーマも入れています。このタイトルも全部企業の方が自分たちで考えて作ってくれます。

このチームは地場産業だけあって普段からの係わり合いもありますし、一番熱心なんです。この間なんか、内緒でユニフォームを作って、学校へ行ったら統一のユニフォームでやっておられて、なかなか元気な人たちです。もう仕掛けがすごくしっかりしていて、小道具も全部自分たちで作って、体験型でできるようなことをやってくれています。瓶の製造工程をみせるためにダンボールで炉をつくり、その中を通ってみて、ここは燃えているところ、ここはガラスが溶けているとか、そういうことが体験できるようにしています。小学生では結構喜んでくれます。高校生も同じ授業をやっているんですが、こんなのをやったらバカにされるから止めておこうと止めていたんですが、この間、やっぱり話だけではおもしろくないからとやってみたら、高校生もかなり喜んでいたりして、結局、小学生も高校生も初めての体験はやはりみんな興味を引き喜んでくれます。ことも入れながら、自分が瓶になったつもりでそのプログラムを受けてもらっています。

体育館でそれぞれがブースをつくり、酒造メーカーからは、何で西宮でお酒を作っているのかという地域の自然環境のこととか、そのラベルを貼ったりする作業ができます。また、壘の搬送用のケースづくりの会社からは何故こんな木のケースに入れて運ぶのかを学びます。瓶のカレットを作る時に、実際に割れた瓶を色分けしてずっとローラーで回ってベルトコンベアーを上がっていく装置も作ってくれており、そこで子どもたちが途中で不純物を取り除く作業ができるような、そういうことも入れながら、その瓶を最終的に選別するというのは大変な話であるということを知ってもらいます。

と言いながら、西宮市の分別回収の中では、瓶は他の燃えないごみの鉄とかアルミと一緒に回収するシステムを取っているんですね。これも長年の懸案課題になっているんですが、業者、関係者から我々が一生懸命ここで子どもに瓶の色分けをして出そうと言っているのに、西宮市は清掃工場の中で割れた瓶をわざわざ手選別して色分けしているけれども、

出す段階で色分けして出してくれたら、もっと効率的に色分けした瓶をちゃんと次に回せるじゃないか、何とかそれを変えろと言われていたんですが、OKがなかなか出なくて、教育の矛盾を今感じておられます。

そういうふうに行行政施策もつながると強いんですが、そんなにいっぺんにはうまく行かないのが現実ですね。

そして、修了証まで自分たちで作って、保護者用の修了証とか先生用とか生徒用まであり、瓶の王様、リサイクルの王様であるガラスというものをもっと準備しようと、もうとにかく瓶が大好きな人たちばかりですから、しっかりPRをされています。

文具は、一番子どもたちに分かりやすいという利点があります。以前筆箱から環境を考えようという授業を行いました、すごくおもしろかったです。筆箱の中にどれだけ文具が入っているか、すごいですよ。多い子なんで100本ぐらいの鉛筆やペンが入っている。筆箱がこんな束なんです。それでどれだけ使うかと言ったら、ほとんど使わないんですね。だけど、筆箱の中にギシギシにいろんなカラーのペンなどが入っていて、それをいっぺん数えさせるとか、どれを使っているとか、その持っている商品の中にエコマークとかグリーンマークが付いているものがあるとか、100本も要らないよとかさりげなく投げかけたり、エコマークの商品を使う、環境にやさしい商品を使うということをやったり、以前に、やっぱり物を大切にすることが大切だねということを考えてもらいました。物の価値をきちんと伝えていくためには、この文具ということを通じて授業に入るのはすごくおもしろいです。

コクヨさんなんかは、大きなこんなキャンパスノートを自分たちで作って授業されたり、あとサクラレパスさんなんかと一緒にあって実際に紙を作るプロセスをやったりかしています。

これはなかなか難しいんですね。同業他社ですから、自分たちの商品宣伝につながる、つながらないのギリギリのところがあるわけですね。痛し痒しでしょうがないんですが、ただ、コクヨさんです、サクラレパスさんです、どこどこさんですと言いますが、商品名は絶対言わないとかは大事なことです。ちょっと問題になりかけたのは、ハム会社とかケーキ屋さんが端材を子どもたちに試食させながらちょっと体験的に学ばせたりというのがあるんですが、食べさせるということも、これはお土産をあげるのと同じなので、これもカットしないといけないかなと思っています。そういうどこからどこまでが企業宣伝かというのは本当に難しいんですが、そのところはやっぱり現場現場で考えていかな

ければなりません。みんなに各社の取組を伝えたい気持ちは分かるんですが、一線を越えると雪崩をうって企業宣伝合戦になりかねません。そのところはNPOの目的である子どもの環境学習支援ということでお互いの考えていることを一致させ、そして伝えたい目的は何か、こういうことをはっきりさせて授業をしないと、失敗していきます。

このプロジェクトの効果ということなんですが、子どもたちにとってすごくいいのは、まず本物から学ぶということ。職人さんとか専門家というのがやっぱり子どもたちにとっては教科書の文字より重たい。それから、生活と学習をつなぐ。これは子どもたちが自分の実際の生活でやっていることを学校の授業の中で学んだことと一致させて、行動を変えてくれるというふうにつながらないといけないわけですから、この生活と学習をつなぐためのプログラムであるということが大事です。

それともう一つ、子どもにとって大事なのは、ここが今回プログラムを組んだ時の一番の狙いだったんですが、多様な価値観を持った大人との出会いを作ることです。子どもたちが幼稚園からずっと大学生になるまで出会う職業は、一番近い職種は教師なんです。地域の中に社会の仕組みを学べるような職業人と出会えるチャンスが減っているんです。もうほとんどの親はサラリーマンです。西宮は特にそうです。農村部へ行ったら他の職業と出会えるかと言ったら、自分とこの家が農家だったら農家であるにしても、それ以外に店舗とか製造業とかがあるかと言えば、なくなってきます。そうすると、社会を構成しているいろんな職業と子どもが体験を通じて学べる、出会えるチャンスというのは本当に少なくなっています。

教師という職業か、あとは何があるかと言えば、テレビから伝わってくるアイドルであったりとかスポーツ選手であったりとか、そういうところからのイメージ、実際の現実社会の中の社会を構成する、経済を担っている人たちの生き方と出会うチャンスは本当にない。これが一番寂しいことだと思うんですね。大人が評価されないし、社会が評価されないし、自分たちが将来どんな仕事をしたいか、どういう生き方をしたいかということも考える基盤がないということです。

企業の人と出会うということは、いろんな企業の価値観、活動内容があります。今までだったら作ることばかり優先されて、20世紀は環境破壊してきたわけです。やっと作ることばかりじゃなくて、次の再処理をどうするのか、リサイクルをどうするのかという根本のところの循環の産業もやっぱりこれから大事ですよというふうになってきて、環境ビジネスとか言われるようになってきた。

けど、子どもたちはどっちを選択することが、自分が21世紀、大人になった時に一番かっこいいのかと考えられるまでには、まだなっていないです。やっぱりお金を儲けられるところ、華々しく物を売っていると宣伝しているところに目が行きがちです。けれども、本来はそれを含めてちゃんと循環型で社会の環境を維持している職業が大事なんだよということに気づいてくれるような、そういう価値観もやっぱり子どもたちには見せておかないといけない。「多様な価値観を持った大人と出会う」ということは1行ですが、その背景にあるものというのは社会そのものなんですね。そこで子どもたちが自分の生き方を考えてくれる、そういうチャンスを小学校の時や中学校の時や高校の時やというふうに作り上げて行ったら、やっぱり大学に行ったら何をしようか、高校を出てどんな働き方がしたいかというような生き方論にもつながるかなというところがあります。

こういう言い方ですと、企業の方が子どもたちに提供したということだけに見えてしまいがちですが、企業の方は、4年目なんですけど、このプロジェクトを止めようとは言わないんですよ。もっと改善してくれ、もっと他の方法はないのか、もっと学校の数を多くしようという意見も出てきました。なぜかと言うと、やっていて楽しい。子どもに教えると言うか、子どもに伝えようと思ったら、自分の中で消化しないと喋れないんです。一生懸命また自分なりに会社のやっていることを考えていく。これは会社の中でやる自己啓発活動とは違って、対象者が子どもですし、もっと自分のピュアな気持ちで関われますから、一生懸命自分の会社でやっていること、他の企業の人たちとの話し合いを含めて子どもに関わってくれます。

ある企業なんかは、もう若手社員は常にそのプロジェクトに寄こすと。ここでもんでもらって、また会社へ返してもらうというようなことまで、社員研修にまで位置づけてくれているところもありますし、こういう形で教えることが最も深い学びにつながるということを企業の人たちは自分たちで体験します。で、併せて異業種間交流なんです。このことで新しいネットワークができる。

あともう一つは、やっぱり若い人たちに入ってもらうことで、自分の仕事は、金儲けのための仕事ですが、けれども、やっぱりそれが社会にとって意味のある仕事でありたいという気持ちをちゃんと育てていくというのも、こういうところまでできるかなと思っています。こういうのがこの企業プロジェクトの中で起こっていることです。

最終的に、これは2006年の2月に経団連会館で発表したんですが、これは西宮発だけど、経団連の本丸で発表してやれというのがあって、経団連会館で国連大学の副学長と

か前環境事務次官をお呼びして、パネラーになってもらって、この発表会をやりました。それで、去年、パートナーシップサポート大賞という賞をもらったりもしました。

最終的に「CSR」ということと絡んでくる言葉なんですけど、これからきっと皆さんのお耳にこういう言葉が入ってくると思います。「ESD」という言葉です。ESDというのは、ここに書いてあるタイトルの持続可能な開発のための教育「エデュケーション・フォー・サステイナブル・ディベロップメント」という言葉ですが、このESDというのは、今、国連が定めて、去年度から全世界的にこれの行動計画を作って動かしていこうという、この「ESD10年」という計画がスタートしています。

企業で言えば、CSR、学校で言えば「総合的な学習の時間」、根っこは一緒です。このESDは、環境問題だけではなくて、人権問題、平和の問題、福祉の問題、環境問題、あとジェンダーなどこういう個別の課題を各々に考えるだけではなくて、それらを統合化して考えられる、そういう教育のあり方というのを考えましょうという内容です。包括的に物を考えてチャンネルを作っていけるような手法のあり方、物事を批判的に創造的に作っていくことができる考え方、こういう「ESD」という考え方がどんどん地域で動いていきます。

CSRで言うと環境保全、経済発展、社会公正、特に社会公正の中には人権問題とか従業員の方の満足度とか顧客満足度とか、雇用上の障害者差別がないかとか、こういうことは全部ここに入ってきます。その上でかつ経済の発展をどうするか、地球環境の保全に役割を果たしているのかということが問われているのです。

このESDには、四つの柱、四つのEが必要だと考えています。この四つのEをこれからそれぞれの主体がどう果たしていくのかということが問われてくると思います。これは、ですから企業だけじゃないんです。行政もそうですし、市民団体もそうですし、学校とかもそうです。今まで縦割り、縦割りで、地域社会の中ではいろんな住民団体とか住民組織がありますが、福祉の団体は環境のことは知らない、環境の団体は福祉は知らない、それじゃダメで、やっぱり地域は一つです。子どもがゼロ歳から乳児として成長していくプロセスを考えたら分かるように、乳児の間は概念なんかありませんよね。今は僕は福祉のとか、今は僕は環境のじゃなくて、生きていくことすべてがすべてに出会っている。こういうことが大人になってもちゃんと全体として見えるような思考回路が要るし、それを見守る地域社会が要るだろうというのが、今、CSRでも問われていますし、ESDでも問われていますし、学校の総合的な学習の時間でも問われています。これは時代が求めているニー

ズです。時代の要求です。だから、その時代の要求に対して自分たちはどう関わりたいかということそれぞれの組織が具体化していく必要があるのかなと思います。

最後ですが、LEAFのような組織づくりというのは、全国であまりないんです。なぜLEAFはうまく行っているんですかと言われるんですが、一番のポイントはバランスを取ることが、今の世の中に求められているので、バランスを取れる組織を作ったからだと思っています。自分たちの主張をするための組織じゃなくて、社会のいろんな主体のバランスを取りながら、その力をつないでいくことが、次の時代のメリットになるだろうという考え方で組織を作っていますから、ミッションは崩れません。ただ、つないでいく力というのは今まであまりない力ですから、いろんな試行錯誤が要ります。

だけど、こういうことを行政がもっと手がけて、もっと力を入れて、基盤づくりをしてあげないと、市民活動からでは起こってこないんです。企業からだけでも起こせない。そういう意味で、行政と企業、市民が一緒になって地域の基盤を強めていくための新しいプラットフォームを具体化していくプロセスが、きっといろんな場面、場面で必要だろうと思います。これは環境だけではなくて、子育てでも福祉でも、いろんなところで同じことをみな言っていますから、きっと共通事項なんですね。

今日は皆さんは県内のいろんな地域から来られていますので、それぞれ自分の地域の中でそれがどういう形で具体化できるかということも考えていただくとおもしろいかなと思います。その時に企業さんの持っている社会力、社会教育力をうまく引き出してあげるステージを作ってあげることで、次のプロセスも見えてくるのではないかなと思います。

ちょっと時間がオーバーしましたが、これで最初のお話は終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(司会)

小川様、どうもありがとうございました。

地域の中でNPOさんが言わば触媒のような形となりまして、企業さんとかが、子どもさん、家庭をつないで地域づくりを行っておられる、あるいは企業さんの普段の事業活動の中での生きた環境学習の事例をいろいろ教えていただきました。大変興味深いお話でございました。ありがとうございました。

それでは、少し休憩を取らせていただきまして、後ろの時計で55分から再開させていただきますので、55分にはお席にお着きいただきますよう、よろしく願いいたします。





企業・事業者の地域貢献・地域との協働のあり方を考えるセミナー

# 多様な主体との協働による 企業のCSR活動



NPO法人こども環境活動支援協会  
企業プロジェクト担当:小川雅由

# NPO法人こども環境活動支援協会

## Learning and Ecological Activities Foundation for children

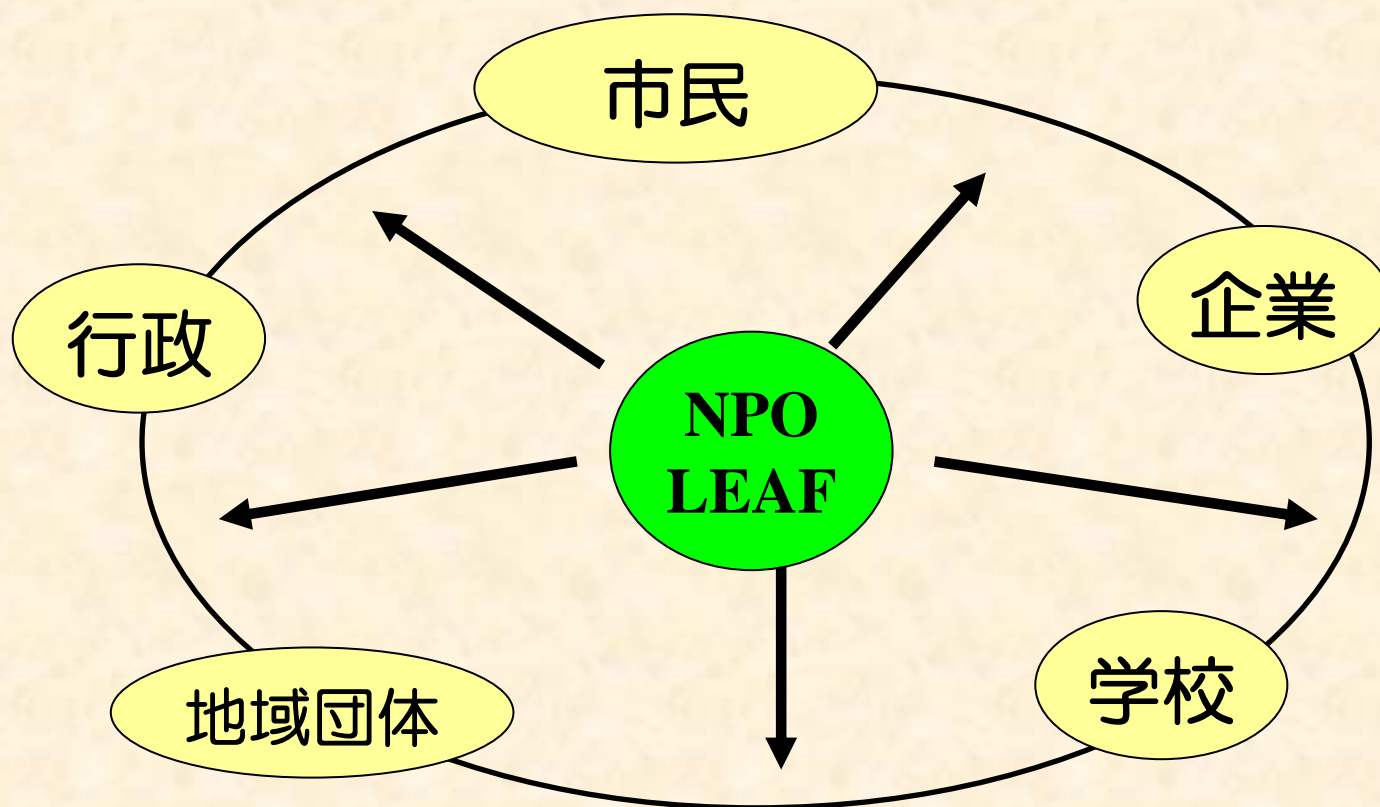
こども環境活動支援協会は、市民・行政・事業者の連携を深めながら次代をになう子どもたちの環境活動を応援するために、平成10年4月に設立され、平成14年4月特定非営利活動法人（NPO法人）として認証取得

### <事業内容>

- 地域に根ざした持続可能な社会に向けた教育の調査研究事業
- 自然体験活動を推進するための支援事業
- 企業会員と連携した環境教育事業
- 世界の子どもたちの環境活動交流事業
- 広報・出版事業

# 持続可能な社会に向けたLEAFの役割

地域の中でネットワークづくり、つなぎ役



# 西宮市環境学習サポートセンター



市の学習施設と

LEAF事務局が併設



ミニ水族館と  
図書コーナー

学習相談コーナー

# ① 地域に根ざした持続可能な社会に向けた 教育の調査研究事業

- ・ 環境学習事業（EWC）の企画・運営及び  
「市民版エコアクションカード」の提案
- ・ 「エココミュニティ情報掲示板」の作成



エコカード



エコアクションカード

環境学習都市・にのみや **エココミュニティ情報掲示板**

環境活動予定

地域 ▶ この項目の全一覧

- 6月 5日(日) クリーン大作戦 市内全域
- 6月 11日(土) ホタル観覧会 市内全域
- 7月 28日(木) 環境学習会 市内全域

学校・公民館など ▶ この項目の全一覧

- 6月 15日(水) 神原小学校3年生PTA 野生児トレーニング 大社
- 7月 12日(火) 名塩幼稚園 名塩川ウォッチング 塩瀬
- 7月 30日(土) 中央公民館 環境学習講座 市内全域

事業所 ▶ この項目の全一覧

- 6月 3日(金) 高京市 環境講演会 市内全域
- 6月 4日(土) ネリンビール 環境講演会 市内全域

環境活動報告

地域 ▶ この項目の全一覧

- 5月 2日(月) 地域清掃活動 今津
- 5月 7日(土) 自然観覧会 山崎
- 5月 9日(月) 花を挿える会 山崎
- 5月 14日(土) 渡り鳥観覧会 浜甲子園

学校・公民館など ▶ この項目の全一覧

- 5月 2日(月) 平木小学校2年PTA 広田の森春みつけ 平木
- 5月 7日(土) 武蔵川女子大学付属高校2年 企業と環境学習 浜甲子園
- 5月 14日(土) EWCアースレンジャーファミリー表彰式 市内全域

事業所 ▶ この項目の全一覧

- 5月 22日(日) 伊藤ハム わくわく探検隊 市内全域

市民が取り組んだエコアクション

活動種別	現在	前月
学習活動	300	200
美化活動	400	350
資源リサイクル活動	450	350
グリーン購入活動	300	280
緑化活動	550	480
自然体験活動	200	170
アクションポイント合計	2,200	1,830

活動の手引 環境まちづくり アクションガイド

EWC活動(地球ウォッチングクラブ)  
小学生が取り組む環境活動

- アースレンジャー数 2,048 人
- アースレンジャーファミリー数 146 人
- 20個スタンプを集めた数 674 人

コミュニティ会議情報

浜脇 西宮浜 大社 安井 苦楽園 上ヶ原 甲陵 平木 甲武 瓦木 深津  
上甲子園 今津 真砂 鳴尾 浜甲子園 高須 真砂 山口 塩瀬

環境情報

環境まちづくり  
環境学習都市宣言 | 環境基本条例 | 環境計画 | 環境計画推進状況

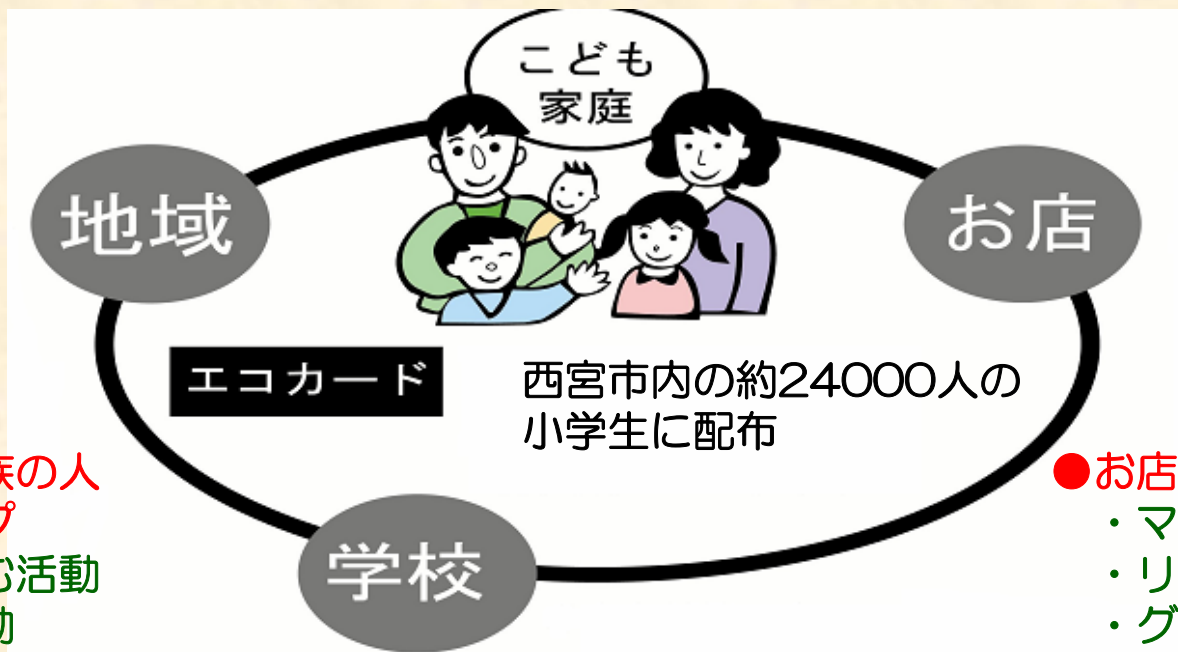
活動支援情報  
施設 | フィールド | 学習プログラム | 事業者・団体 | 学校・園(保育所) | 事例紹介(リンク集) | 支援制度

環境の現況  
人口・世帯数 | 緑地 | 水辺 | 保護樹木・景観樹林保護地区 | 鳥獣保護区・生物保護地区 | 自然公園 | 上水道 | 下水道 | 大気 | 騒音 | 水質 | ゴミ | 電気使用量 | ガス使用量 | 水道使用量 | 歴史・文化

Copyright (c) 2005 西宮市

# 家庭・地域・学校を結ぶ活動

## エコカードシステムのしくみ



### ●地域団体や家族の人からエコスタンプ

- ・自然に親しむ活動
- ・町の美化活動
- ・ごみ減量
- ・リサイクル活動
- ・環境関連施設の見学
- ・環境イベントの参加
- ・エコクイズ

### ●学校の先生やPTAからエコスタンプ

- ・教科学習
- ・総合的な学習
- ・海外、国内グループとの交流や支援活動
- ・施設見学
- ・クラブ活動

### ●お店からエコスタンプ

- ・マイバッグ活動
- ・リサイクル活動
- ・グリーン購入
- ・お店での環境学習

# エコスタンプ

約1600個を市内各所に配布（学校、地域、店舗の大人）

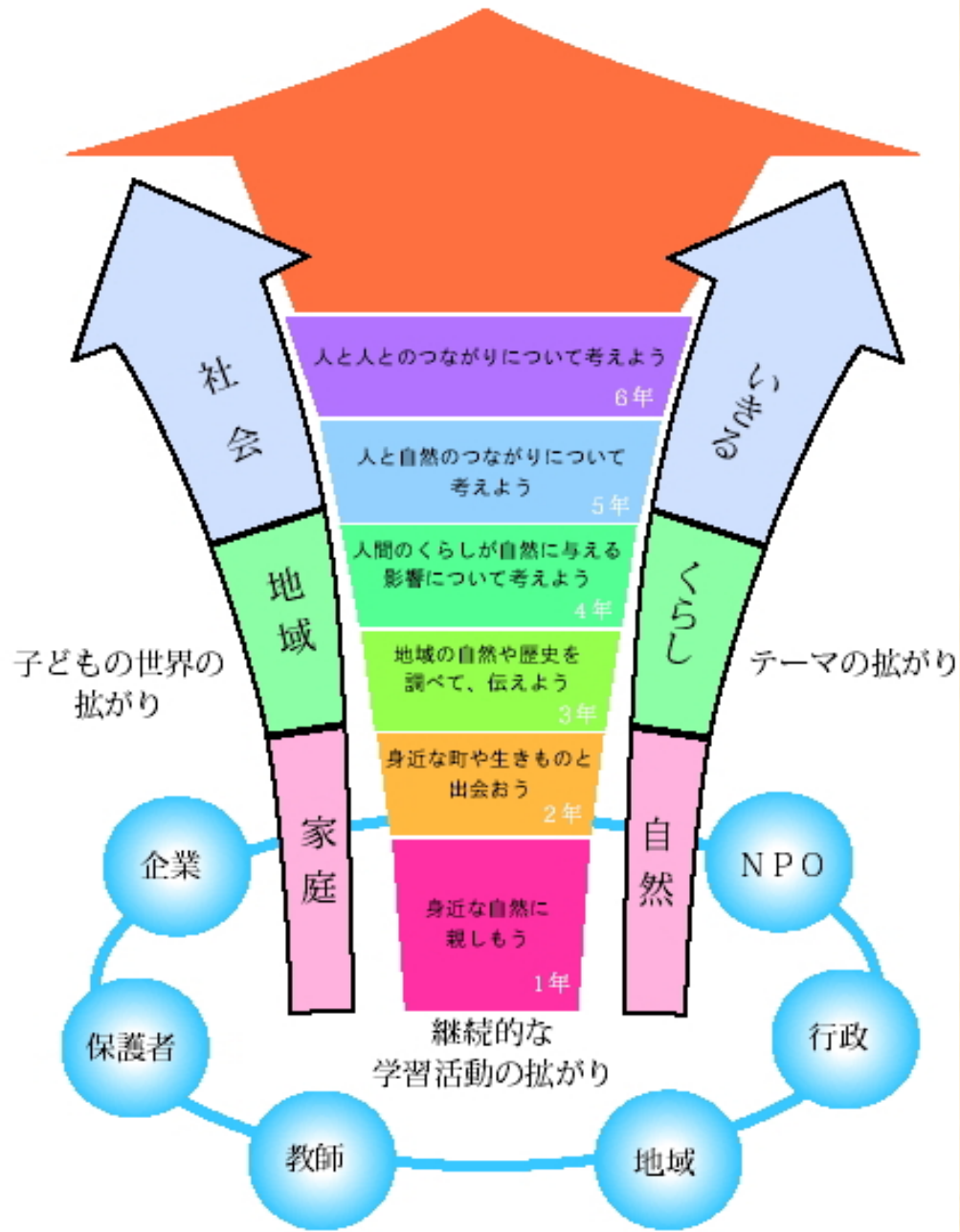
- ・ 小学校・・・1021
- ・ 地域団体・・・子ども会（200）環境衛生協議会（38）  
青少年愛護協議会（38）自治会など（150）
- ・ 地域施設・・・公民館（24）児童館（8）その他施設（12）
- ・ 店舗・・・文具店（35）スーパー（51）その他（3）

**このステッカーが  
目印！**





環境や社会に対する 子どもの興味関心の高まり



小学校6年間で単位とした

学習カリキュラムづくり

# 環境省「こどもエコクラブ」



いつでも、どこでも、だれとでも！  
全国を対象とした小・中学生ならだれでも参加できる  
環境活動のクラブです。



LEAFの関わり

- ◆こどもエコクラブの登録者が1年間使用する「会員手帳」の編集協力。
- ◆こどもエコクラブニュースレター（年5回発行）に掲載する活動プログラムの作成。



# 震災体験から生まれた「語り部倶楽部」による 子どもたちなどへの環境学習支援



防災教育としての一環として地域の  
歴史・自然・文化を語り継ぐ活動



小学校のPTA活動と連携させ  
地域学習を進める「語り部倶楽部」

## ② 自然体験活動を推進するための支援事業

### 西宮市立甲山自然環境センターの4施設の 指定管理者として管理運営

甲山自然の家・甲山キャンプ場・社家郷山キャンプ場・甲山自然学習館



社家郷山キャンプ場



甲山自然学習館と自然の家

# 農から学ぶ自然対話力育成セミナー



## <趣旨>

- ・都市近郊の農地保全
- ・農から自然のしくみを学ぶ

## <活動内容・・・年間26回>

### ・実習

- ①米づくり
- ②野菜づくり
- ③土づくり

### ・講義

- ④周辺の自然観察
- ⑤環境学習



## <活動場所>

西宮市甲山西側の農地250坪

### ③ 会員企業・事業者と連携した環境学習プログラムの実施

●企業会員との協働による環境学習プログラムの開発実施

●キリンビール(株) 双方向環境コミュニケーション試行事業



# ④ 世界の子どもたちの環境活動交流事業

## ● 米国バーモント州バーリントン市

「持続可能な地域社会のための国際会議」事例発表



バーリントン市議会表敬訪問



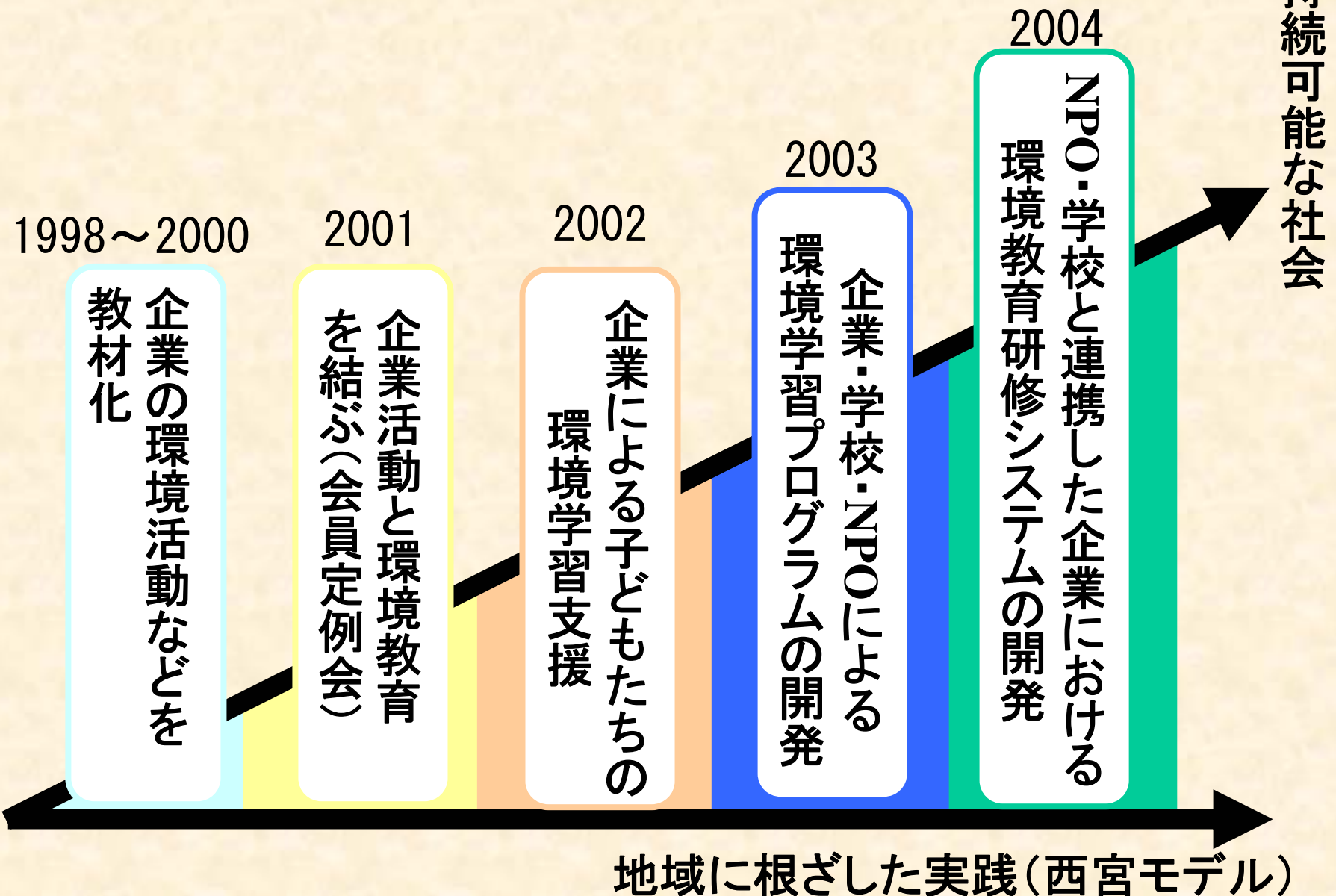
国際会議での事例発表



# 企業会員と連携した環境学習事業 企業プロジェクト



# 企業会員と協働プロジェクトの歩み



## 量販店でのおみせたんけん

環境にやさしい商品やマークの学習  
量販店のリサイクル活動のしくみ  
食料品から環境を考える



## ビンの一生考えるバスツアー

容器としてのビンのあり方を考  
える

ビンの製造、利用、再利用、再  
資源の流れを見ながら消費者の  
役割を考える



## エコ文具の貸出セットで環境学習

環境保全型文具について学習する

3R（リデュース、リユース、リサイクル）の考え方とグリーン購入つながりを学習



## ビール工場で生命の循環を学ぶ

工場のごみゼロに向けた廃棄物再資源活動

工場内のビオトープで自然観察活動



# こどもエコ体験ゼミナール

- ・地域の企業や商店街と連携
- ・地域に根ざした体系的な体験型環境学習を全9回の実施

①開会式 & 作戦会議

②西宮の商業歴史ウォッチング

③環境にやさしい家づくり  
緑化でやさしい町づくり



④資源回収の現場ウォッチング



⑤自然エネルギーを使って温暖化防止

⑥エコファームでエコクッキング



⑦⑧発表の準備 ⑨発表会

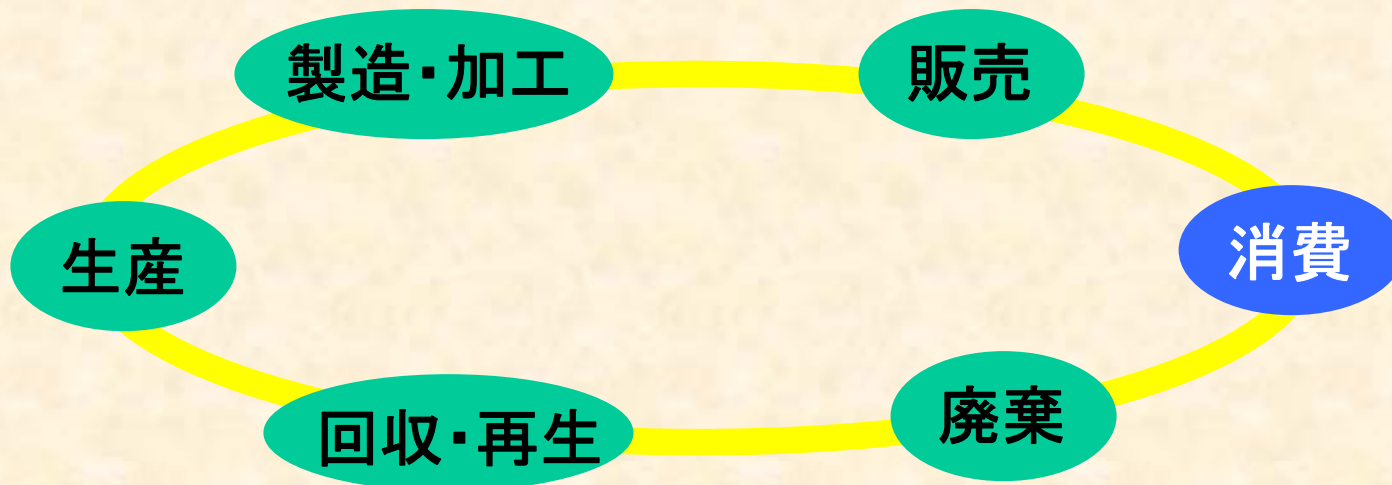
# 2003（平成15年度）企業・学校・NPOによる 環境学習プログラムの開発

平成15年度独立行政法人地球環境保全再生機構地球環境基金助成事業

## POINT

- ① 循環型産業構造
- ② 衣・食・住・エネルギー・エコ文具・びんの6分科会
- ③ 企業人・教員・保護者・NPOの協働

\* 環境教育推進法(略称)10月より施行



# 衣「服の一生」

## <メンバー>

グンゼ株式会社  
株式会社チクマ  
帝人株式会社  
日光物産株式会社

## <実施校>

西宮市立浜甲子園中学校1年



# 食「食は生命の輝き」

## <メンバー>

JA兵庫六甲  
株式会社アンリ・シャルパンティエ  
生活協同組合コープこうべ  
大栄サービス株式会社

## <実施校>

西宮市立浜甲子園中学校1年



# 服の旅

環境学習支援プログラム開発プロジェクト

「衣」分科会



## プログラムの目的

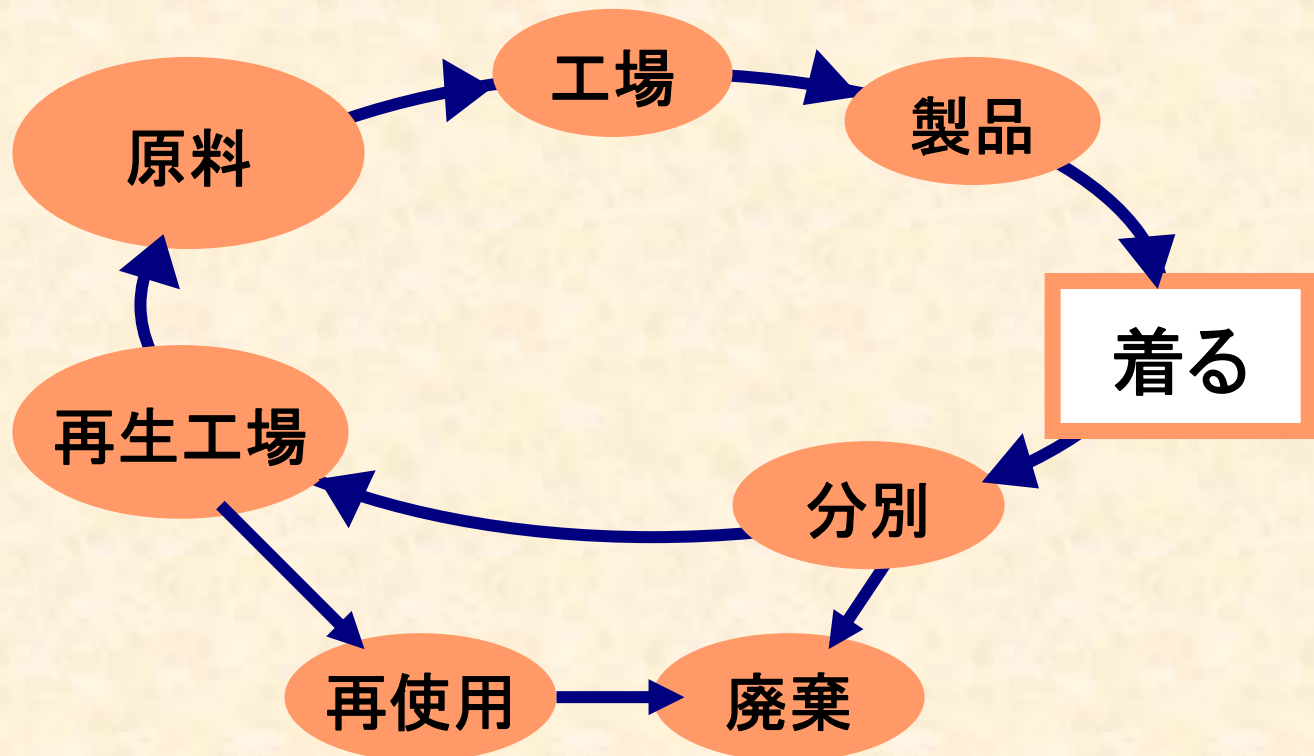
---

- 身近な衣類は様々な繊維から出来ており、使用後も様々な循環をたどることを伝える。
- 衣類と自然環境のつながりを学び、企業の環境負荷を減らすための取り組みを伝える。
- 衣類を大切にするために、自分たちでできること考える。

# プログラム内容

## 「服の旅」 ～衣の循環を考える～

不要となった服は、廃棄される以外に、私たちの工夫次第で再使用や再利用など様々な旅をたどることをクイズラリー形式で伝え、限られた資源を大切にするために、自分にできることを考えてもらいます。



# 服の旅

## ①服の再生 (服→服)

回収後の服を、再び糸に戻すことでリサイクルする技術があります。



繊維メーカーでは、不要になった服を回収し、再び糸に戻して服を作る、リサイクルの取り組みを行っています。

# 服の旅

## ④服のゆくえ (服→廃棄)

みんなが出す古着は、このように回収されています。

①服のゆくえ  
(服→廃)

古着回収の状況や、生産される衣類の9割以上が、廃棄処分されている現実などを伝えます。

# 服の旅

## 最後のメッセージ

今日はお忙しい中、  
ありがとうございました。



授業のおわりに、各企業からメッセージを伝えたあと、  
生徒代表よりお礼の挨拶がありました。

# 食は生命の輝き

環境学習支援プログラム開発プロジェクト

「食」分科会より

## プログラムの目的

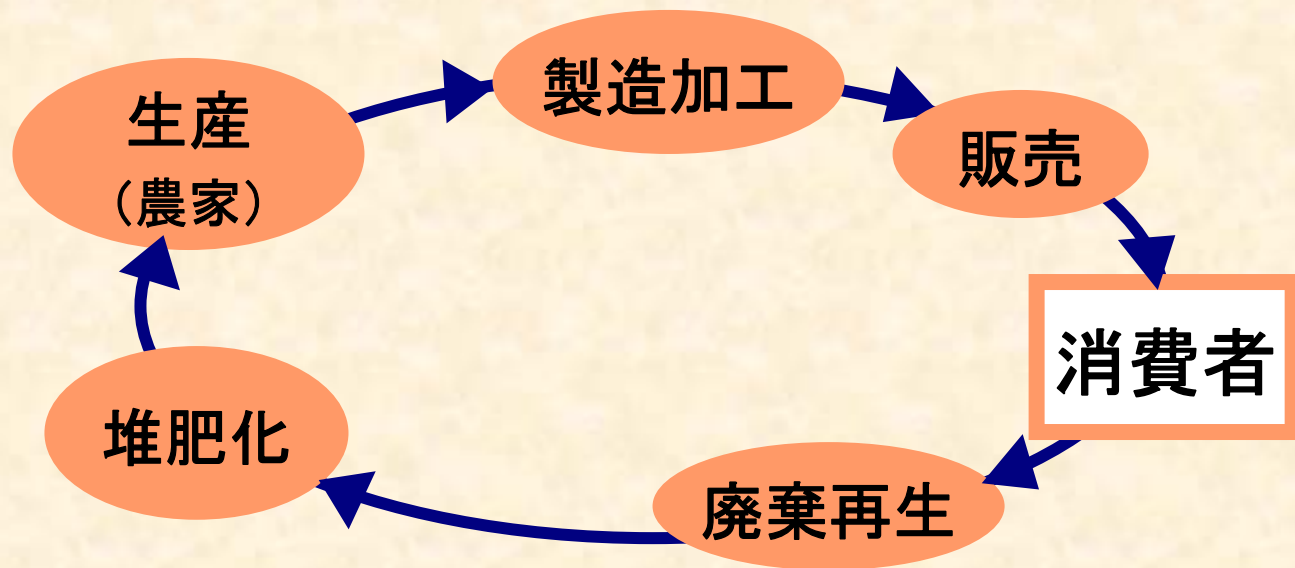
～食べものをムダにしない工夫を知ろう～

- 自然の恵みと食べものができるまで
- 食べものがみんなの食卓に届けられるまで
- みんなが食べるごはんのゆくえ
- 自分にできるムダをなくす工夫を考えよう！

# プログラム内容

## 「食べものは生命の輝き～ムダにしない工夫を知ろう～」

自然のめぐみからできた作物は、様々な人々の仕事を通して、わたしたちの食卓に届けられます。企業の人たちの食べものをムダにしない努力を知ることで、自分達にできる工夫を考えます。

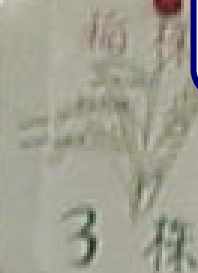
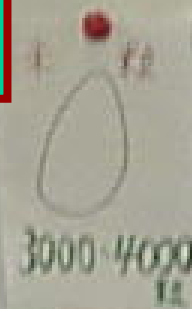




# 第1回

## 生産

食べものは、自然のめぐみで作られています。



自然のめぐみや、食べものを生産する農家のお仕事を紹介しました。

## 第2回

## 食品製造

よぶんな油脂は、  
石けんなどにリサ  
イクルしてます。

ハムが作られるまでの製造工程や、その中でムダを  
しない企業の努力を伝えました。

## 第3回

# 廃棄再生

みんなの家庭から、  
どれだけのゴミが  
出ているのかな？

と食べものの行方を考



24h



加工食品

肉にあぶら



家庭から出るゴミの量が多いことを伝え、ムダを出さない  
ためにどうすればいいのか考えてもらいます。

## 第4回

# エコクッキング



工夫次第で、ゴミを出さなくても料理ができるんですよ！

ムダなゴミを出さないエコクッキングのポイントを伝えたり、子どもたち自身でレシピを考えてもらいました。

# 住「住まいに生命を」

## <メンバー>

株式会社 新井組  
中北幸 環境・建築研究所  
日本リビング株式会社  
有恒薬品工業株式会社

## <実施校>

西宮市立浜甲子園中学校1年



# エネルギー くらしとエネルギー

## <メンバー>

(株)アボック、(株)今井電気商会  
大阪ガス(株)、新明和工業(株)、  
大栄サービス(株)、ダイキン工業(株)  
東邦レオ(株)、難波電話電気工業(株)  
西宮市、日本気象(株)、松下電器産業(株)

## <実施校>

西宮市立平木小学校4年・保護者



# 住まいに生命を 自然を感じる住まいを学ぼう！

環境学習支援プログラム開発プロジェクト  
「住」分科会より

## プログラムの目的

---

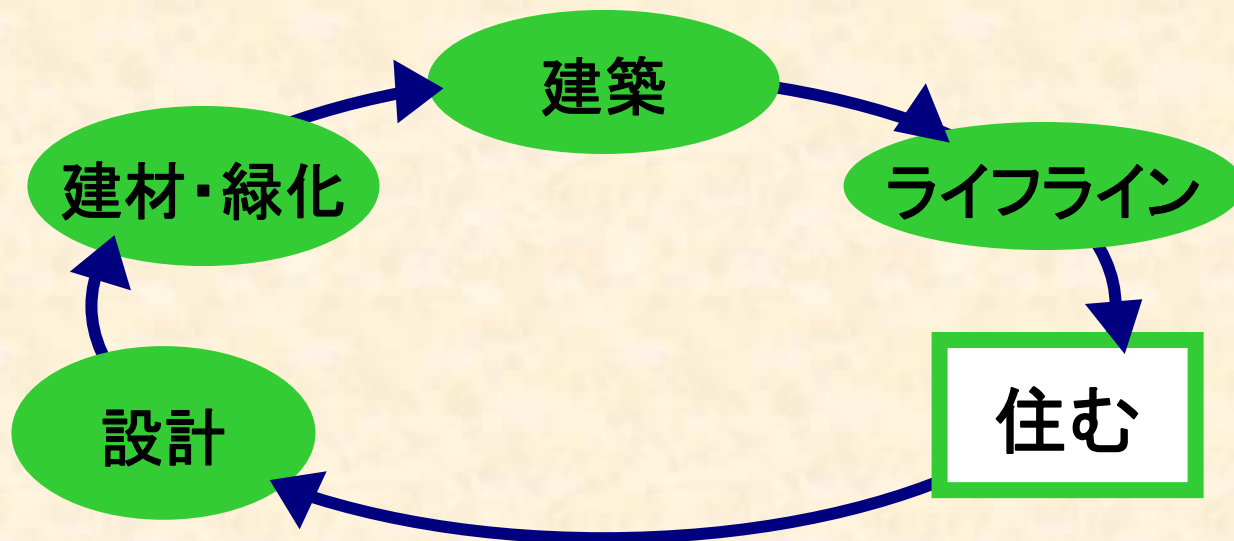
# 住まいに生命を ～自然を感じる住まいを学ぼう！～

- 1) 限りある生命をいつくしむ感性を育てる
- 2) 住まいの仕事について学ぶ
- 3) 自然と共生した住まいのあり方について学ぶ

# プログラム内容

## 「住まいに生命を～自然を感じる住まいってなんだろう?～」

住まいの専門家より、住まいの仕組みや自然を感じる住まいの事例を学んだあと、実際に自然フィールドにて住まいの素材探しを行います。そして、自然をとりいれた住まいを作品で表現します。





# 第1回

## オリエンテーション

これから、甲山に行って一緒に勉強しましょう！



学校でオリエンテーションを行った後、子どもたちと一緒にバスに乗って甲山まで移動しました。

# 第1回

## 自然の住まい

世界には、いろんな  
住まいがあります。



自然の力を利用した住まいを、パネルで紹介します。

# 第1回

## エコハウス紹介



太陽熱や雨水など、自然の力を  
さまざまに利用しています。



甲山自然学習館にて、設計者の中北さんより、  
自然エネルギーを利用した住まいの工夫を紹介します。

## 第2回

### 作品制作



こうするといいかも・・・。

子どもたちの作品づくりに、住まいの専門家がアドバイスしてまわります。

# くらしとエネルギー

環境学習支援プログラム開発プロジェクト  
「エネルギー」分科会

## プログラムの目的

- エネルギーが家庭に届くまでを知り、また実際にエネルギーを作る体験をすることで、身の回りのエネルギーを知る。
- エネルギーを大切にするために、企業の省エネのための努力を知り、自分にできることを考える。
- くらしの中のエネルギーのムダ使いをチェックし、自分にできる省エネ方法を知る。

# 第1回

## 授業の様子



ガスが家に届くまで



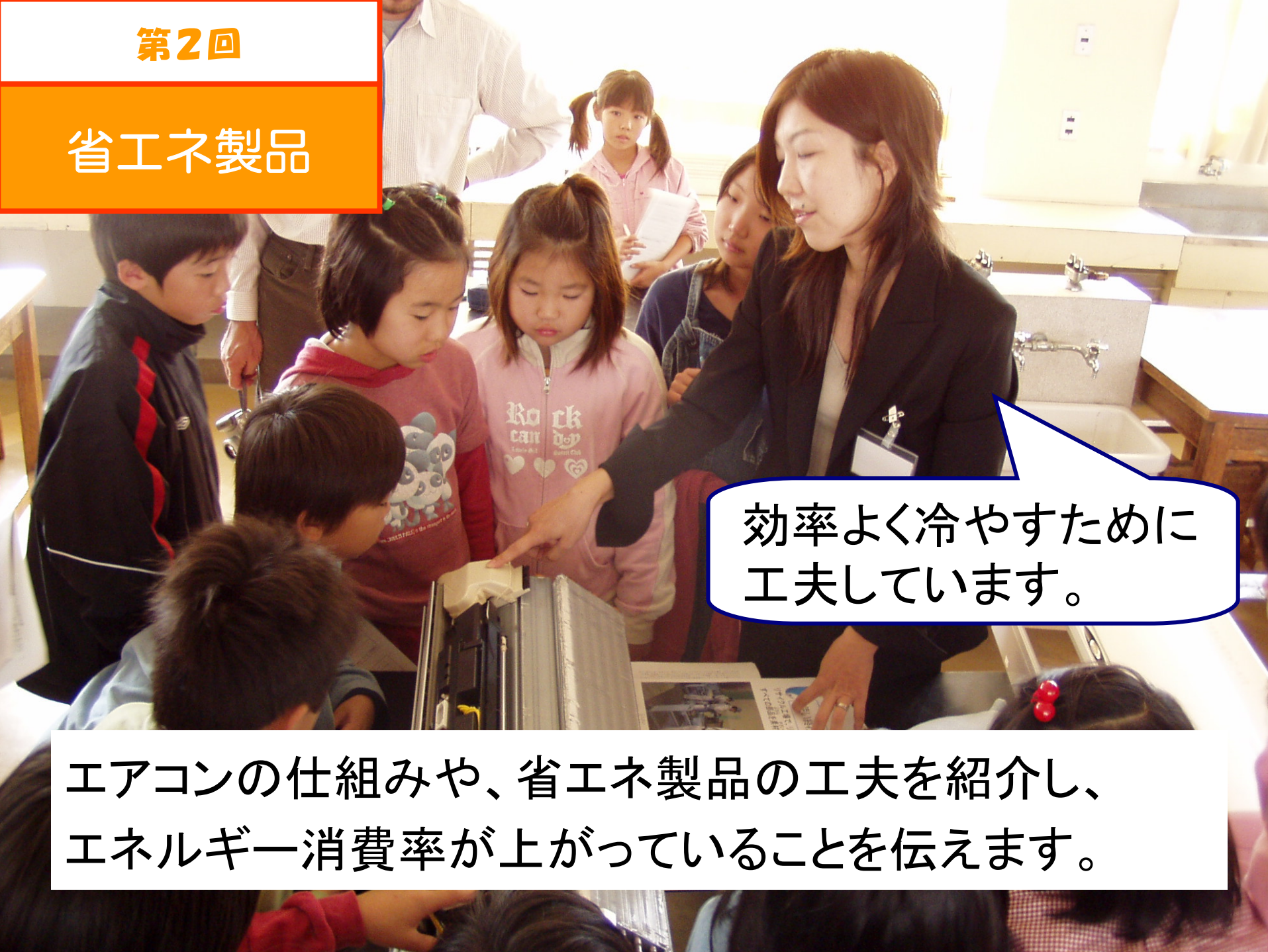
風力発電の実験



電気が家に届くまで

## 第2回

# 省エネ製品



効率よく冷やすために工夫しています。

エアコンの仕組みや、省エネ製品の工夫を紹介し、エネルギー消費率が上がっていることを伝えます。



## 第2回

# 企業の省エネ

省エネのヒントは  
どこにあるでしょ  
う？



自家発電機により身近なエネルギーを体験したあと、  
照明器具を通して省エネのためのヒントを考えます。

### 第3回

## 電気の実験

省エネ度の高い電化製品はどれでしょう  
か？

正解は...

1位	エアコン
2位	パソコン
3位	炊飯器(すいはんき)
4位	テレビ

事前に、校内にある複数の電化製品に装置をしかけて、当日、待機電力の多い場所の結果発表を行います。その後、電化製品の省エネ度をクイズ形式で学びます。

### 第3回

## ガスの実験

一番早く沸くのは、  
どれでしょう。

「底の平たいお鍋」「ふたつきのお鍋」のうち、早く沸くのはどれかをクイズ形式で実験し、ガスの省エネを体験します。

### 第3回

## 水の実験

地球上の飲める水は  
とても少ないのです。

歯磨き3分間のあいだに水を流したままにすると、  
どれだけの水をムダにするのか実験し、水の大切さを  
伝えました。

### 第3回

## 省エネ術

みんなができる省エネのヒントを教えます。

家庭や学校でできる省エネ術を紹介した後、3回連続の授業を通して学んだことを子どもたちが発表して、授業が終了します。

# ビン 西宮お酒とビンの物語

## <メンバー>

辰馬本家酒造株式会社  
日本山村硝子株式会社  
株式会社山一商会  
株式会社山村製壺所  
株式会社吉田製作所

## <実施校>

西宮市立山口小学校3年・保護者  
西宮市立安井小学校4年・保護者



# エコ文具 つながれエコ文具・エコ文具からはじめよう

## <メンバー>

コクヨ株式会社  
株式会社サクラクレパス  
(有)松田商店  
(株)ユアサ

## <実施校>

西宮市立深津小学校5年・保護者



# にしのみや お酒とビンの物語

環境学習支援プログラム開発プロジェクト2004

「ビン」分科会

## プログラムの目的

---

- 西宮のお酒とビンの歴史的なつながりと、その産業を支える人々の思いを伝える。
- 「酒のまち西宮」＝「ビンのまち西宮」＝「西宮は環境を学び、環境を大切にすまち」であることを伝える。
- 「ワンウェイビン」と「リターナブルビン」という2つのリサイクル方法があることを伝える。

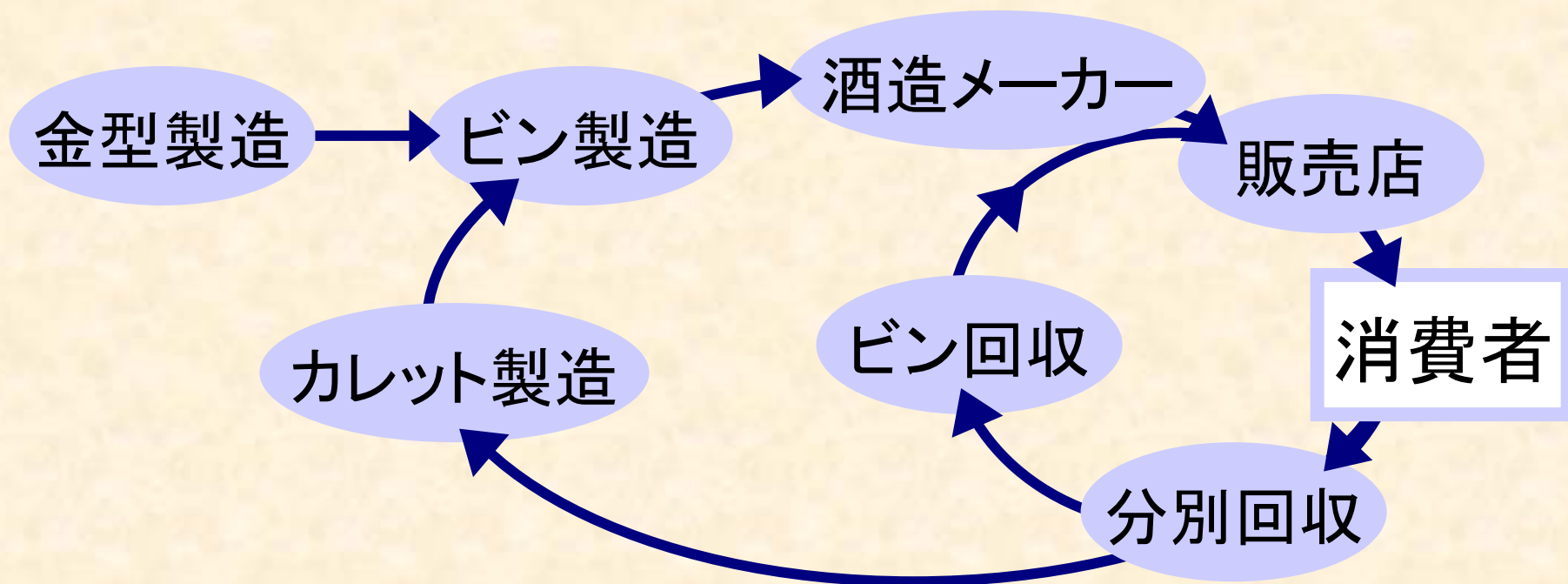


# プログラム内容

- ・時間 90分
- ・場所 体育館
- ・対象 小学生

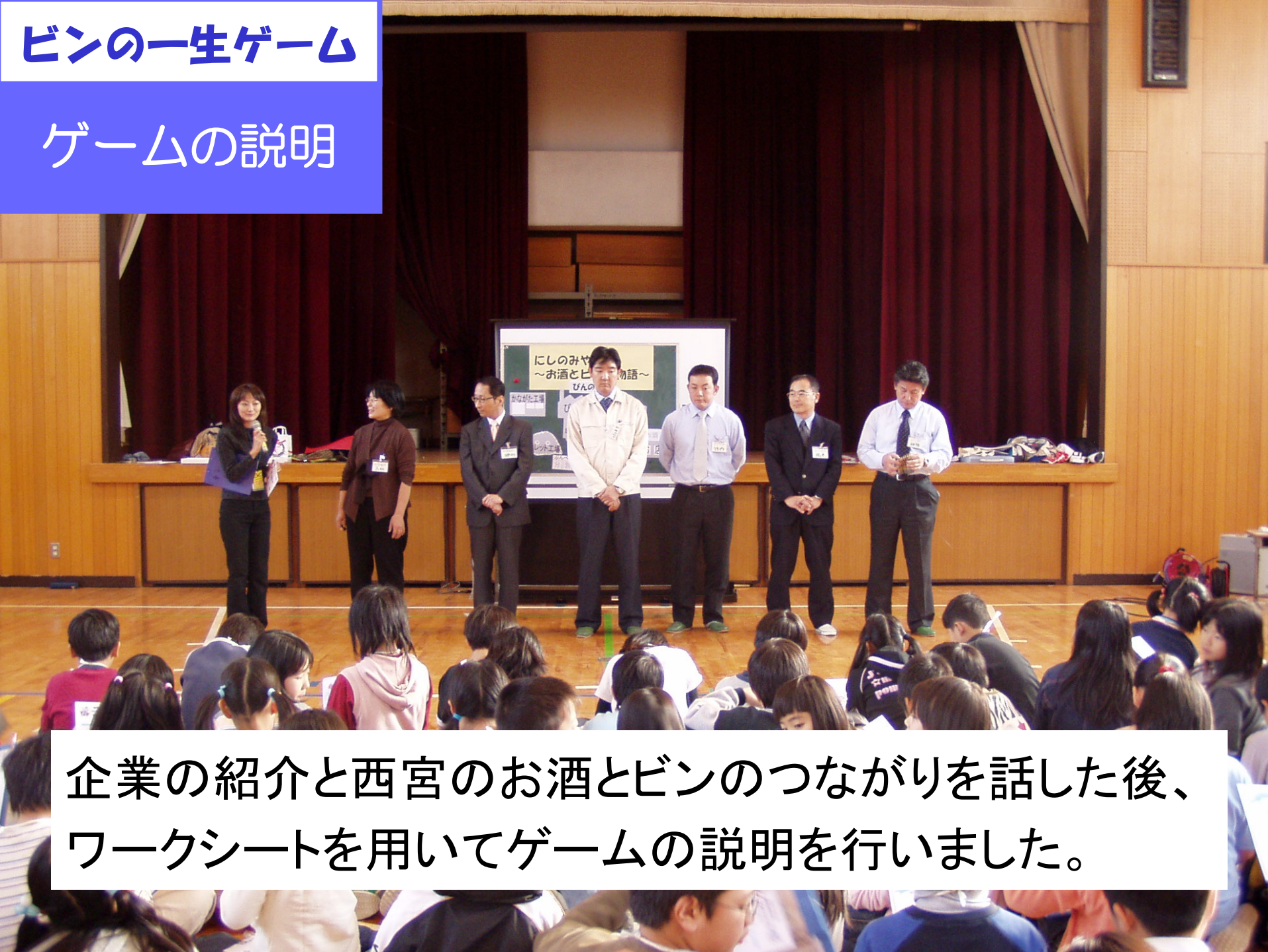
## 「ビンの一生ゲーム」

「ビンの気持ち」になり、金型製造、製ビン、ビン詰め、消費、カレット製造といった各社のブースを回り、「ビンの一生」を体験する。



# ビンの一生ゲーム

## ゲームの説明



企業の紹介と西宮のお酒とビンのつながりを話した後、ワークシートを用いてゲームの説明を行いました。

# ビンの一生ゲーム

## 金型を作る会社

「金型」はとっても精巧に作られているよ。

ビンの形をつくる「金型」の役割について説明。  
実際の金型をもちいて、「ビン当てクイズ」を行いました。

# ビンの一生ゲーム

## ビンを作る会社

熱いよ～。

ビンの製造工程をイラストで説明。  
「溶解炉」で溶けたビンの原料が「金型」に挟まれて  
ビンになる過程を、模型で体験しました。



# ビンの一生ゲーム

## お酒を作る会社



西宮のお酒は  
「宮水」から  
出来ているよ。

製造された「お酒」をビンに詰める作業を説明。  
実際のビンに水を入れたり、ラベルを貼る作業を  
行いました。

# ビンの一生ゲーム

## ビン回収の会社

きれいにゆすいでから捨ててね。

家庭でのビンの処理方法や、販売店へ返却されたビンは回収ケースで運ばれて再使用されることを伝えます。

# ビンの一生ゲーム

## 「カレット」 を作る会社

ビンを捨てるときは、  
キャップをはずして出  
してね。

回収されたビンは、細かく砕かれて「カレット」という  
ビンの原料になることを説明。  
回収されたビンから異物を取り除く作業を体験しました。

# ビンの一生ゲーム

## ゴール

ビンは何度も生まれ変わるよ。



最初に出発した会社に戻ったらゴール！  
生徒の代表者が「ビンの一生」をまとめてくれました。



# ビンの一生ゲーム

## 「修了式」

今日からあなたは、  
ビンの一生 博士です。  
よくお勉強できました！



ビンの一生ゲームの修了証を読み上げ、クラス代表の子どもに手渡ししました。

# ビンの一生ゲーム

## 「修了証」

修了証は、子どもだけでなく、各ブースを手伝って下さったPTA役員や、教員にも渡しました。


ビンの一生ゲームで学んだ環境の大切さ  
リユース、リサイクルの大切さを  
覚えておいてもらうため。

**ビンの一生体験学習**  
感謝をこめて  
**修了証**  
平本小学校 前田先生

あなたは こどもたちを 楽しく安全に  
“ビンの一生リレー授業”に引率され もの  
リサイクルとリユースの大切さを学ぶ機会を  
西宮の“酒づくり”“ビンづくり”という循環  
働くひとびとの姿にもふれていただ  
美しい郷土西宮 かけがえのない地球  
未来あるこどもたちに伝えるため 力  
環境に学び 環境を守る社会を築いてい

2004年11月9日 15日

LEAF ビン分科会




**ビンの一生体験学習**  
P T A  
**修了証**

あなたは こどもたちとともに 楽しく 体験  
“ビンの一生ゲーム”に参加され ものの循環  
リサイクルとリユースの大切さを学ばれま  
西宮の“酒づくり”“ビンづくり”という循環型産  
働くひとびとの姿にもふれていただきま  
美しい郷土西宮 かけがえのない地球の環  
未来あるこどもたちに 伝えるため  
環境に学び 環境を守る社会を築いていきま

2004.11.29  
上甲子園小学校にて

LEAF ビン分科会




**ビンの一生体験学習**  
しゅうりょうしゅう  
**修了証**  
安井小学校4年生

あなたは たのしい“ビンの一生ゲーム”で  
ビンの気持ちになって “ビンの一生”を体験し  
リサイクルとリユースの大切さを学ぶことができました。  
西宮とお酒とビンの 歴史や自然とのつながり  
はたらく人びとの思いも知ることができました。  
きょうからあなたは“ビンの一生 博士”です。  
美しい地球を 未来へつたえましょう  
環境を学び 環境を大切にしましょう。

2004.11.25

リーフ  
LEAF ビン分科会



地球をまもる  
「リサイクル・リユースの」  
王様ガラスびん

お家のビン 使ったあと持  
何もかもいっしょにすてたり  
ほりっぱなしは、ダメです！  
リターナブルビンは お店にかえしましょう  
リサイクルビンは 分別回収に出しましょう

ビンとそのほかのものにわけましょう  
透明でも おなべや食器はビンのなかまではありません



# 紙とえんぴつのたび

環境学習支援プログラム開発プロジェクト  
「エコ文具」分科会より

## プログラムの目的

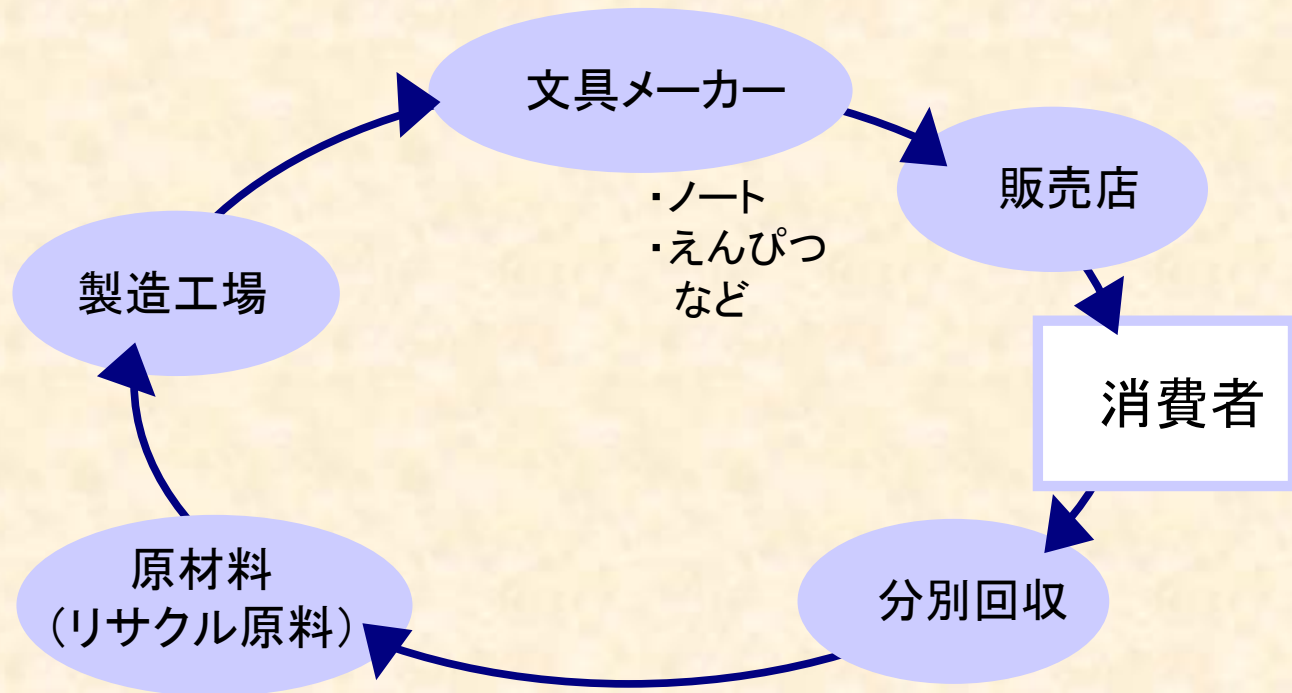
### 紙とえんぴつの旅 ～文具をたいせつにしよう！～

- 1) 紙やえんぴつ作りを通し、文具への関心を持たせる。
- 2) 紙やえんぴつの原料や製造過程を伝え、地球の限りある資源である文具を大切にすることを伝える。
- 3) 資源の再利用でつくられた商品があることを伝え、買うときにはエコマーク商品選ぶよう伝える。

# プログラム内容

## 「紙とえんぴつのたび～文具をたいせつにしよう!～」

紙やえんぴつができるまでの旅を、手作り絵本やビデオで学習したあと、実際に、紙すきやおがくずねんどのによるえんぴつ作りを通して、身近な文具を大切にすることが、地球を守ることになることを伝える。



# 第1回

## 紙のたび

紙を大切にすることは、世界の木を大切にすることにつながります。



特大版のノート型絵本をめくりながら、紙の旅について、原材料から紙製品になるまでのお話をしました。

# 第1回

## 紙をつくる



牛乳パックが、こんなになるんだね。

牛乳パックやのりをとかした液をまぜて、紙をつくるための原料をよく混ぜあわせます。

# 第1回

## ダンボール工作



工作はたのしいね！

ダンボールキットを組み合わせると、ミニチュアの机とイスが出来上がります。



# 第1回

## ふりかえり

紙のリサイクル商品は、  
グリーンマークが目印で

す！

はたらくおとなといっしょにまなぼう  
かみ  
紙とえんぴつのたび  
～ぶんぐをだいじにしよう！～



古紙回収の仕事を紹介し、紙の循環や再生紙利用の  
のマークなどを紹介して、授業が終了します。

## 第2回

### えんぴつ作り



えんぴつを削ったあとのおがくずを粘土にしたもので、  
自分たちのえんぴつ作りをします。



## 第2回

### 1回目の復習

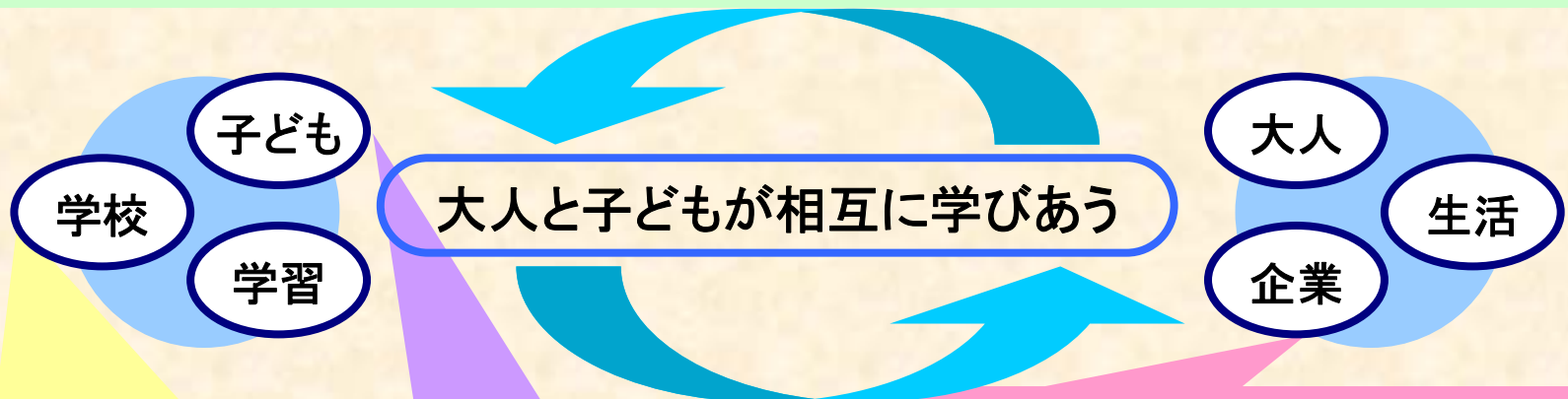
紙のやくわりを考えましょ  
う!



絵本の内容をクイズ形式でふりかえります。

# プロジェクトの効果

- ◆ 本物から学ぶ(職人・専門家の重み)
- ◆ 教えることがもっとも深い学びになる
- ◆ 生活と学習をつなぐ
- ◆ 多様な価値観を持った大人たちとの出会いが子どもたちを元気にする。



・ リアリティのある環境学習の機会を子ども達に提供することができた。

・ 将来のことを考えるきっかけとなった。

・ 異業種との交流により、仕事上での新たなつながりができた。

・ 子どもに伝えるという行為を通じて、自らの仕事を見つめ直すことができた。

# 「企業ができるこどもたちへの環境学習支援」普及啓発活動



「持続可能な社会に向けた企業の役割を考えるシンポジウム」

場所：経団連会館 参加者：100名

実施日：平成18年2月3日

## 特別スピーチ

安井 至氏（国際連合大学副学長）

ジェイミー・クラウド氏

（クラウド持続可能性教育研究所代表）

炭谷 茂氏（環境省 環境事務次官）

## パネルディスカッション

パネリスト：炭谷 茂氏（環境省 環境事務次官）

安井 至氏（国際連合大学副学長）

長谷川 公彦氏

（経団連社会貢献担当者懇談会座長）

ジェイミー・クラウド氏

（クラウド持続可能性教育研究所代表）

ジェン・シリロ（シェルバーン・ファーム

「持続可能性学校プロジェクト」ディレクター

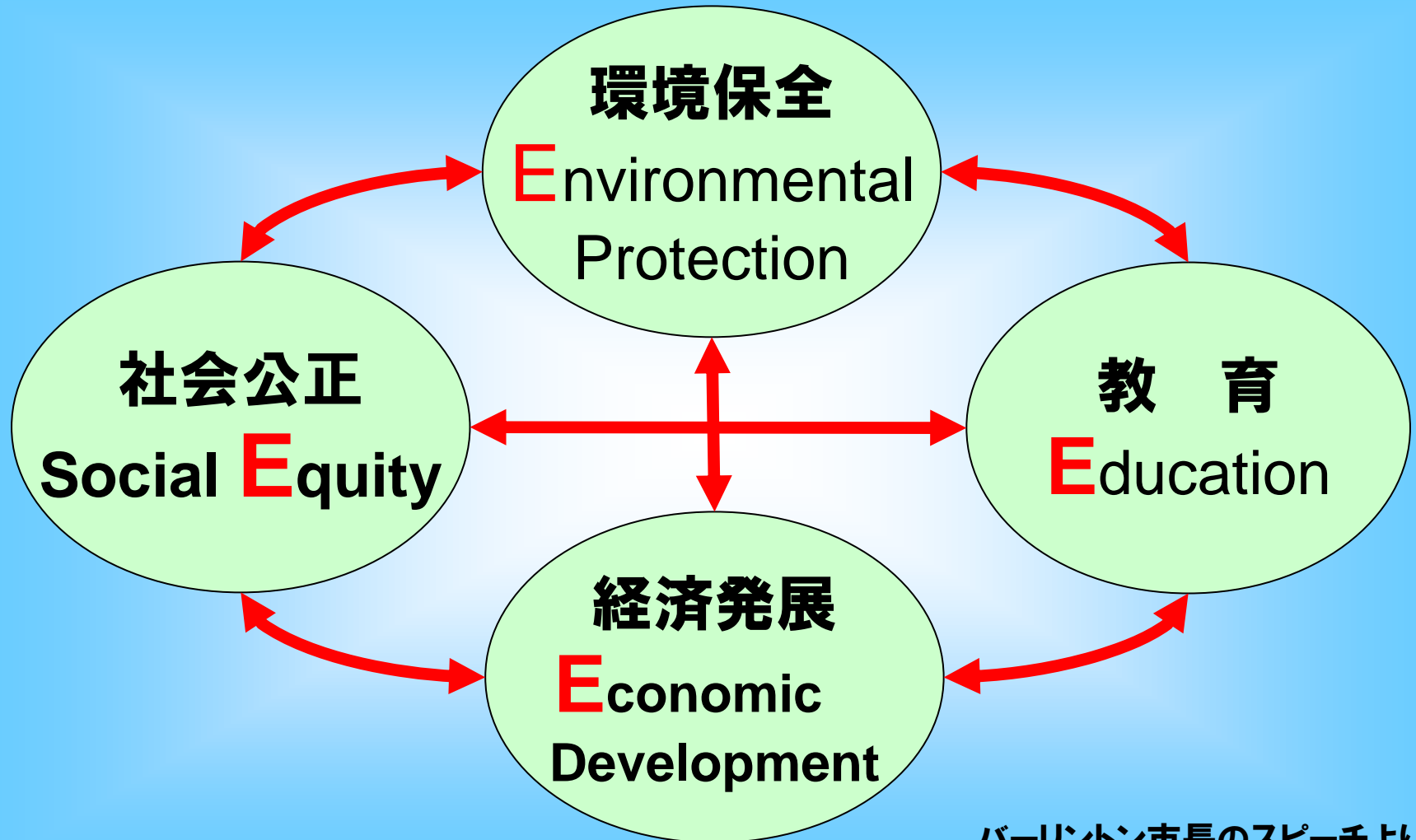
コーディネータ：小澤 紀美子氏（東京学芸大学教授）

企業ができる  
こどもたちへの  
環境学習支援

Learning and Ecological Activities  
Foundation for Children

学校での活動を紹介した  
ガイドブックの作成配布

# 持続可能な開発のための教育



バーリントン市長のスピーチより

## 企業・事業者の地域貢献・地域との協働のあり方を考えるセミナー（事例発表）

（司会）

それでは、お二方目といたしまして、ご当地でございます三重県の企業様の取り組み事例ということで、富士ゼロックス三重株式会社、松井直之様よりお話を頂戴したいと思います。

松井様、よろしくお願いいたします。

（松井）

只今ご紹介いただきました富士ゼロックス三重経営管理部の松井と申します。

私の業務は、現在、環境管理責任者をしております。4月から環境管理責任者になったのですが、それまで推進事務局という立場で社内での環境活動推進を行っておりました。また、一昨年前の6月からですが、社内で社会貢献の組織を作ろうということで、「デュエット」という組織を設立しました。活動は、給与の端数、100円以下の端数と1口100円を、個人の意思で、何口か出していただいて、それを社会貢献に使うという活動を行っています。現在その代表もしております。

今日は、当社の環境コミュニケーション活動ということで、今年度実施しております「Kids' ISOプログラム」の展開について事例発表させていただきます。

まず、当社はどのような会社なのか、まず紹介をさせていただくと、社名は富士ゼロックス三重という社名です。去年の3月までは「三重ゼロックス」という社名でしたが、去年の4月に親会社である富士ゼロックスの大きな構造改革によりまして、社名も「富士ゼロックス三重」に変更しました。当社は、地域販売会社ということで、88年3月に設立され、もうすぐ20周年を迎える、まだ若い企業でございます。株主は富士ゼロックス株式会社で、社員数は174名、一昨年の売り上げが35億2,000万ぐらいの中小企業でございます。

事業内容は、ご存知かと思いますが、富士ゼロックスの商品の販売とその保守サービスを行っておりますが、最近、大きな環境変化により、機器を活用したお客様への業務改善、経営課題改善を目標に活動を続けています。活動拠点は、北は桑名から南は尾鷲まで、6拠点で三重県内をカバーしています。

今回の「Kids' ISOプログラム」への取り組みの背景は、先ほど小川さんからのお話にもありましたが、弊社の経営理念や目指す姿で、やはりCSRというところを謳ってありまして、地域社会の発展に寄与するというのを企業活動の目標としています。

その活動の根底にあるものは、ご存知の方もおみえになるかも知れませんが、経営品質向上プログラムの基本理念がもとにあります。その基本理念は、「顧客本位」、「独自能力」「社員重視」、そして最後に「社会との調和」ということを謳っています。これが弊社の企業活動の基本的な考え方になっています。

また、「社会との調和の中」でも、社会貢献については、できる会社ができる時にできる方法ということで、先ほどの小川さんのお話にもありましたが、自社のリソースを使っ

て、決して無理せず、地道に継続してできる活動をやっという考え方が基本にあります。

ですから、今回の「Kids' ISO プログラム」も、当社が 2002 年に認証取得した ISO14001 のノウハウを活用した形で地域に貢献できないかというところから、そもその始まりがあります。

これは社会貢献という観点からですが、一方、環境活動というところでは、環境理念の中でも「私たちができる活動を通じて、生存基盤である地球環境保全と環境負荷低減の持続活動に努める」と明確に謳っており、自分たちができることを実施して、社会に還元していこうという環境活動の側面も持っています。

当社の ISO14001 の活動は、最初はユーティリティ部分、つまり自社内での紙・ごみ・電気の削減というのを重点的に取り組みました。ただ、3 年経つとだんだん苦しくなってきます。多分皆さんのところでもそのようなことはあるかと思いますが、そうするとだんだん活動が停滞してきます。

現在、ユーティリティ部分で目指しているところは、先ほどのごみゼロのところではないんですが、来年度にはうちは販売会社で一般オフィスしかないのですが、そこでゼロエミッション、つまりごみゼロを推進しようというのを目標に、社内で活動を続けています。

ISO14001 の活動は、やはり最初は社内なのですが、次はお客様先での活動です。本業部分のところで社会に対して環境貢献していこうということで、お客様先で環境負荷低減活動を行うということで、環境にやさしい商品をお客様に提供していこうとか、複写機を回収したら、すべてリサイクルラインに回そうとか、そのような活動を続けています。

この活動は、本業につながる部分がありますのでずっと継続してやっているのですが、これだけじゃ足りないよねというのが昨年からの活動になります。ここで地域コミュニティということで、地域社会に対して何か貢献することができないだろうかというような活動を始めました。

今回の「Kids' ISO プログラム」も、このコミュニティの部分に入ってくるのですが、自分たちが持っている ISO の知識を子どもたちに伝えていこうという観点から今回の取り組みが始まりました。

この、社内、お客様、地域の三つの活動を通じて、持続可能な地球環境と社会の実現への貢献を果たしていこうというのが、活動の根底にあります。

地域環境コミュニケーションの考え方なのですが、これもやはりただ単に活動するのではなく、やはり社員自ら動く、それと、地域に根付いた活動をサポートするというのと、最後の柱ですが、次世代を担う子どもたちへの教育活動をサポートするという大きな三つの柱を持っています。

そのような活動を通じて、市民の環境意識の向上につながり、地球環境保全につなげていこうということを狙いとしています。

実際、今までどのような活動を行ってきたかという、「みえグリーン購入倶楽部」に積



極的に参加し、当社の管理部長がその幹事を務めています。

また、先ほどの小川さんの話にも少しありましたが、自然観察指導員を2名養成しております。実はその1名は私なのですが、なかなか活動ができてはいないのですが、子どもたちを集めて、環境についていろんな気づきを与えることを目指しています。それは、山に行かなくてもいいのです。道路でも、どこでもできるような自然観察会というのを実施して、環境の大切さを子どもたちに伝えていくというのが自然観察指導員です。しかし、現在、当社では、養成したもののなかなか活動ができていないというのが現状でございます。

三つ目なのですが、これも県と地域の方と企業とのコラボレーションという形で実施をしているのですが、2002年から当社の社員だけで海岸清掃を毎年行なっていました。その中で、昨年、県からの呼びかけで、津市の海岸の一斉清掃をやるという計画がありましたので、そこに参画させていただいて、その運営と実際の清掃活動を行ないました。新・津市になって全長20キロの海岸を、同じ日の同じ時間に地域の方と一緒に海岸清掃をさせていただきました。この時は当社の社長を始め、社員とその家族、総勢で60名ぐらいが、汗をかきながら海岸を清掃しました。

そのような取り組みの中で、今年度はKids' ISO14000プログラムを実施しています。どのように展開しているかと言うと、行政と企業と市民という三位一体の活動で、NPO法人のArTechを中心に、企業と行政、学校、子ども達の家で活動を進めています。

当社の社内では、まず社員が実際にやってみようということで、「夏の省エネキャンペーン」というものを昨年から実施してまして、実際に社員が「Kids' ISOプログラム」を家庭で実施するという取り組みを昨年からやっていました。そこから進んで、やはり社内でやっている活動をお客様とか地域に提供していこうということで、今年度の取り組みがあります。今年度は、三重県庁の環境活動室からお声がけをいただき、それに参画するかたちで、今年度の活動になりました。

これも先ほどの社会貢献の基本的な考え方でお話ししましたが、ただ単にお金を出して協賛するだけではなくて、自分たちがこの活動を実際に行なうというところを主体としています。現在、富士ゼロックス全体では、さまざまな地域で「Kids' ISOプログラム」の支援をやっています。ほとんどが首都圏ばかりになるのですが、神戸で実施しているのですが、西日本地区で2番目で販売会社の取り組みということで、富士ゼロックスの中でも注目を浴びている状況です。

「Kids' ISOプログラム」について、実際に弊社がやっている活動は、津市（旧安濃町）の村主小学校の5年生の子どもたち34名に対して「Kids' ISOプログラム」を展開しています。

どのように展開したかと言うと、最初に学校と県の方とどのように進めるかという打ち合わせを行い、1月11日に実際に子どもたちに導入授業ということで、今の地球環境はこうなっているんだよとか、だったら自分たちはどういうふうなことができるのかというよ

うな気づき、つまり、動機づけの教育をさせていただいて、その時にこのようなワークブックを配布して、これを実際に家庭で実践していただくというプログラムを行なっています。

子どもたちは、各家庭で、電気、ガス、水道、ゴミの量を1週間何もせずに計測して、作戦を考えて、1週間、作戦を実際にやってみて、効果がどうだったのかというプログラムの流れになっています。その活動結果を回収して、今回は、提出率100%でしたが、現在、私が評価しているという段階でございます。この評価が終わった段階で、3月に再度子どもたちにまとめの授業をさせていただいて、一人ずつコメントを返してあげる予定でございます。

しかし、実際なかなか評価とかは難しいものですから、インストラクターの講習会を三重県主催で実施させていただいて、それに参加し、その後実際には、最初から村主小学校の評価を行なうのではなく、違う学校で実際に評価実習に取り組んで、私たちのインストラクターの方に、評価させていただいて、いろんなノウハウを教えていただくという流れになっています。基本的には、ISO14001を理解していれば、かなり入りやすいものなのかな、というように思います。

導入授業は、動機づけということで、地球環境の現状というところから入って行きまして、資源もうほとんど残っていないよという話をして、現在、企業はどのような活動をやっているのかという事例紹介をした後、だったら自分たちも家庭で何かできるんじゃないかという気づきを経て、「Kids' ISO」の動機づけとしました。実際は、家庭での無駄からなくして行けば大きく変わるんだよというようなお話をさせていただきました。

「Kids' ISO」も、ISO14001同様PDCAサイクルで回っています。現状を把握して、実際に作戦を考えて、作戦を実行して、その効果の確認をして、そこから気づきを得るという流れで、PDCAサイクルをきちっと回すことで「Kids' ISOプログラム」はできあがっています。

これらが、実際にやった子どものコメントなのですが、やはりいろんな貴重な体験ができたとか、一人ひとりの行動がいかに大切なのかというのが分かりましたとか、もっと地域の人とか周りの人にもこのようなことを伝えていきたいとか、いろんないい気づきを与えることができました。

家族の方のコメントも、子どもの活動の影響がかなり家族に影響を与えますので、家族が「環境」という一つのテーマで家族全員が取り組みますので、コミュニケーションがかなり必要となります。そのようなことで家族の団結力が強くなったとか、これからはずっと続けて行きますとか、「ISO」という言葉が注意し合う言葉になったとか、これはあるお父さんのコメントですが、なかなかお父さんはできなかったみたいで、「ISOキラー」と呼ばれて、みんなの足を引っ張って、反省していますというような、コメントもあり、子どもの活動が家庭にかなり影響を与えているんだなというのが分かりました。

担任の先生からも、先ほどの小川さんのお話にもありましたが、通常、総合学習とか社

会科とか理科とか、いろんな授業で子どもたちに環境について教えているらしいのですが、実際、知識だけなんですよね。この活動でそれを体験に変えることができたというような、嬉しいコメントもいただいています。

それと、やはり子どもたちの意識が一旦変わるとずっと継続しているので、これは当社も反省しないといけないのですが、節電しましょうと言うとその時はいいんですが、すぐ社員は忘れてしまうんですよね。その点やっぱ子どもたちは純粹に受け止めて、継続的な活動をやってもらっているみたいですね。

最後に、「Kids' ISO」の価値ということでもまとめてみましたが、社会的な価値としては、子どもの環境意識が高まる、次世代を担う子どもの環境意識が高くなるということがあります。その子どもの活動が大人とか家庭にも影響を及ぼして、最終的には環境意識の高い市民が醸成することにつながるのではないかとというのが一つのポイントです。

もう一つが、実際このプログラムで電気・ガス・ごみ・水のかなりの削減をすることができますので、地域での環境負荷が低減するということにつながって行きます。

それと、先ほど少しお話をしますが、家族の協力が重要となってきますので、家族の中で、環境についてのコミュニケーションができますので、コミュニケーションができることによって、今いろんな社会的な問題の解決にもつながっていくんじゃないかなという、大きな三つの価値ということを考えています。

また、当社にとっての価値ですが、地域の信頼感につながるのかどうかは分かりませんが、ある意味、富士ゼロックス三重という会社が環境に取り組んでいるんだということの認知度の向上につながっています。

もう1点は、実際に家族、社員も活動を行ないましたので、社員の家族も環境の意識の向上にもつながっています。さらに社員の環境意識が向上することで、企業内の環境経営の基盤強化にもつながるといえることが言えます。

また、この事業が中日新聞とか三重タイムズなどの新聞に掲載されたことによって、社員の反響がありました。どういうことをやっているのかとか、いう質問もあり、具体的な内容を社員に伝えることにより、社員の意識向上につながっています。

最後になりますが、先ほどの小川さんの話で、CSRという活動は、どのような観点で実施していけばいいのかということがいろんな企業の課題になっているかと思います。今回の活動は、決して本当に難しい活動ではなく、日常、ISOに取り組んでいる企業であれば、それをそのまま子どもたちの環境教育につなげるということができますので、ぜひともより多くの企業の方に参加していただければと思います。

今日は代表して私どもが発表させていただきましたが、四日市では東芝の四日市工場さん、玉城町では京セラ三田様が同様な活動をされています。今年度初めて三重県の中でこのような活動が始まりましたので、今後より多くの企業の方にご参加いただければと思います。皆さんに、このような資料とか、あと平成19年度の事業概要とかの資料が配布されていると思いますので、またお読みいただいて、分からないところは三重県

環境活動室の方とか私に直接聞いていただければと思います。ぜひとも企業が子どもたちに自分たちの持っているノウハウを伝えることによって環境意識の向上につながり、最終的には地域の環境負荷低減ということにつながっていけばと思います。

ご清聴ありがとうございました。

(司会)

松井様、ありがとうございました。

「Kids' ISO」という形では県内で初の取り組みでございまして、企業さんが県と協働いただく中で実施される、地域社会の中で実施される環境学習のお取り組み事例ということで、大変有益なお話を頂戴いたしました。ありがとうございました。

2007年2月27日

企業・事業者の地域貢献

地域との協働のあり方を考えるセミナー

# 富士ゼロックス三重の 環境コミュニケーション

## Kids'ISO14000プログラムの展開について

---



富士ゼロックス三重株式会社

THE DOCUMENT COMPANY

FUJI XEROX

# 事業概要

**設立:**1988年3月22日

**資本金:**3千万円

**株主:**富士ゼロックス株式会社

**代表者:**代表取締役社長 濱倉 茂

**従業員数:**174名(2007年1月現在)

**売上高:**35億1950万円(2005年3月度実績)

**事業内容:**ドキュメントサービス事業

富士ゼロックス商品を中心とした各種情報機器の販売  
と保守サービスの提供

**活動エリア:**三重県内の各事業所

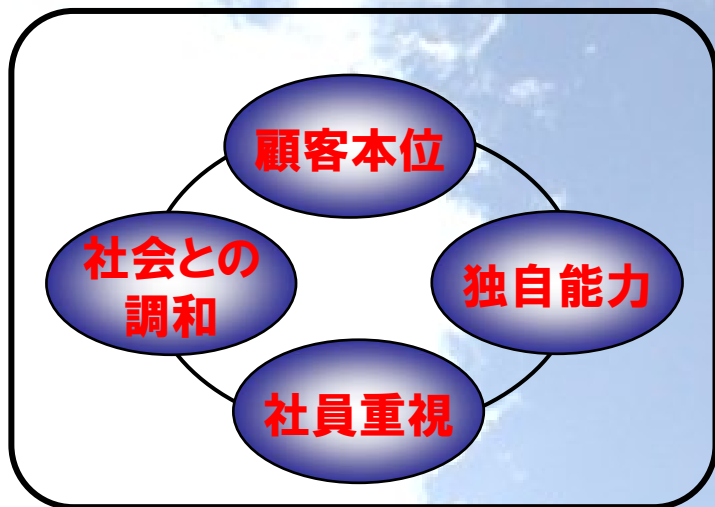
**営業拠点:**津・北勢・四日市・伊勢・伊賀・尾鷲

# 経営理念と社会貢献

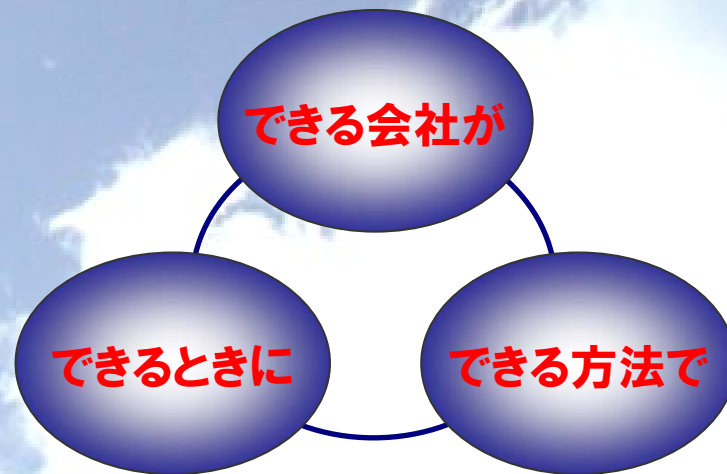
## <経営理念>

富士ゼロックス三重株式会社は、社員一人ひとりのたゆまざる努力と進歩によって、お客様に喜びを与えられる、高付加価値商品とサービスを提供し、社員の幸福を図ると共に、**地域社会の発展に寄与する**

### 基本理念<経営品質>



### 社会貢献の基本的な考え方



# 環境理念と環境活動

## <環境理念>

富士ゼロックス三重は、「環境と人に優しく」を合言葉に、わたしたちが関与できるあらゆる活動を通して、生存基盤である地球の環境保全と環境負荷低減の持続活動に努めます。

2002年6月 ISO14001認証取得

ユーティリティ  
(生活部分)

+

ビジネス  
(本業部分)

+

コミュニティ  
(地域社会)

社内における

- ①電気使用量の削減
- ②紙の使用量の削減
- ③廃棄物の削減  
(ゼロエミッション)

お客様先における

- ①環境配慮型商品の提供  
ハードウェア・ソフトウェア
- ②使用済機械・部品の回収
- ③環境情報提供
- ④ロジスティクス

地域社会における

- ①環境保全活動
- ②地域活動支援
- ③環境情報提供

THE DOCUMENT COMPANY

持続可能な地球環境と社会の実現への貢献 XEROX



# 地域環境コミュニケーションの考え方

狙い・目標

社会全体で、環境保全活動が自然に行なわれる環境づくりをサポートする

⇒市民が自発的に、環境負荷低減や自然保護活動に参加する環境を作る

社員参加型

社員自らが実際の活動に参加

地域密着型

地域に根付いた活動をサポート

子供への教育

次世代を担う子供への教育活動をサポート

# 地域コミュニケーション取組み①

## ＜みえグリーン購入倶楽部に参画＞

県内でグリーン購入に関する身近な情報の収集・発信、グリーン購入実践ノウハウの交換、地域の消費者と流通業者・製造者の連携などを進め、環境負荷の少ない商品やサービスの地域市場形成を促進のため設立された「みえグリーン購入倶楽部」に参画。代表幹事に当社経営管理部長が就任しました。



## ＜地域ボランティア自然観察指導員を養成＞

豊かな自然や生態系を継承・尊重できる社会システムや心づくりを目指して、自然観察指導員を2名養成しました。地域ごとに自然観察会などを開催し、豊かな自然を継承できる社会システムや心づくりに結び付けていきたいと考えています。



# 地域コミュニケーション取組み②

## <津市の美しい海づくり活動>

2002年度から毎年7月に社内行事として、津市（御殿場海岸）の清掃を実施しています。

2006年度は、7月1日に開催された「～津の美しい海づくり～ 海岸一斉清掃」に経営幹部をはじめ社員とその家族が参加。（約60名）  
私たちの大切な地域の宝を保全する活動を通じて地域の方との環境交流をはかっています。

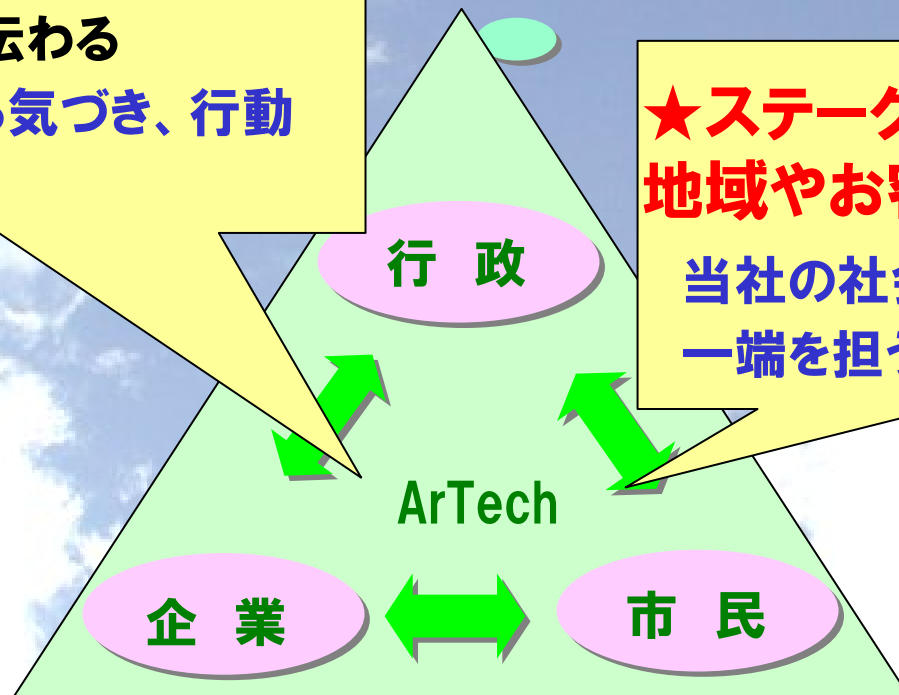


# キッズISO14000<展開状況>

★市民でもある  
社員の家庭で「夏の省エネ  
キャンペーン」を実践。  
子供が気づく→親に伝わる  
環境意識が高く、自ら気づき、行動  
する社員の醸成

環境教育推進基本法  
2003年10月

★ステークホルダーである  
地域やお客様に展開  
当社の社会に対する責任の  
一端を担う



協賛のみならず、家庭や地域で自ら実施する

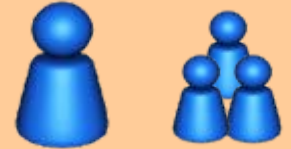
THE DOCUMENT COMPANY  
FUJI XEROX

# キッズISO14000 <FX全体の実施状況>

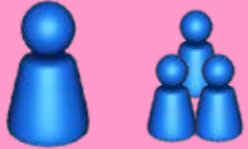
FXおよび関連会社社内・・・45名  
「省エネ・節電キャンペーン」の中で実施

神戸市・・・3名  
地域住民と実施

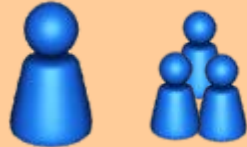
富士ゼロックス多摩



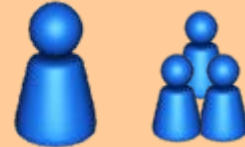
富士ゼロックス三重



スペースα神戸



岩槻事業所

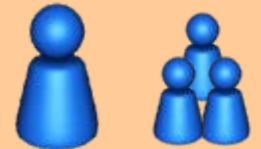


多摩地区(小平・八王子)  
・・・130名  
東京都環境局との協業

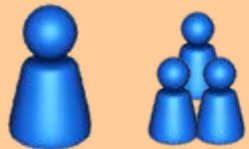
さいたま市  
実施サポート・・・114名

津市の実施サポート  
・・・34名(実施中)  
三重県環境活動室との協業

FXSS



竹松事業所



事業所のある板橋区で実施・・・72名

南足柄環境遵守協定  
14社と共にサポート  
・・・430名(実施中)

海老名事業所



豊島区:FX本社がサポート・・・121名

海老名市:FX海老名事業所がサポート  
・・・121名

# キッズISO14000 < 当社のサポート状況 >

津市立村主小学校 5年生 34名

提出率100%

11月9日 実施校・県環境活動室との打合せ  
プログラムの内容と、展開ポイント

インストラクター講習会

12月25日 実施校との打合せ  
担任の先生から指導案の提案

1月9日 実施校との打合せ  
導入授業の提案

1月11日 子供への導入授業、ワークブック配布

評価実習

プログラム実施

ワークブック回収

チェック、集計、コメント作成

3月 子供へのまとめ授業、フィードバック

The image shows two sample documents. The left document is a worksheet titled 'マシメント能力評価' (Machine Operation Ability Evaluation) for '環境立地小学校 5年1組' (Environmental Location Elementary School 5th Grade Class 1). It includes a 'Sample' label and a table with columns for '実施日' (Implementation Date), '実施校' (Implementation School), and '実施者' (Implementer). The right document is an evaluation form titled '環境立地小学校 5年1組' (Environmental Location Elementary School 5th Grade Class 1) and includes a 'sample' label. It contains a table with columns for '実施日' (Implementation Date), '実施校' (Implementation School), and '実施者' (Implementer).

評価

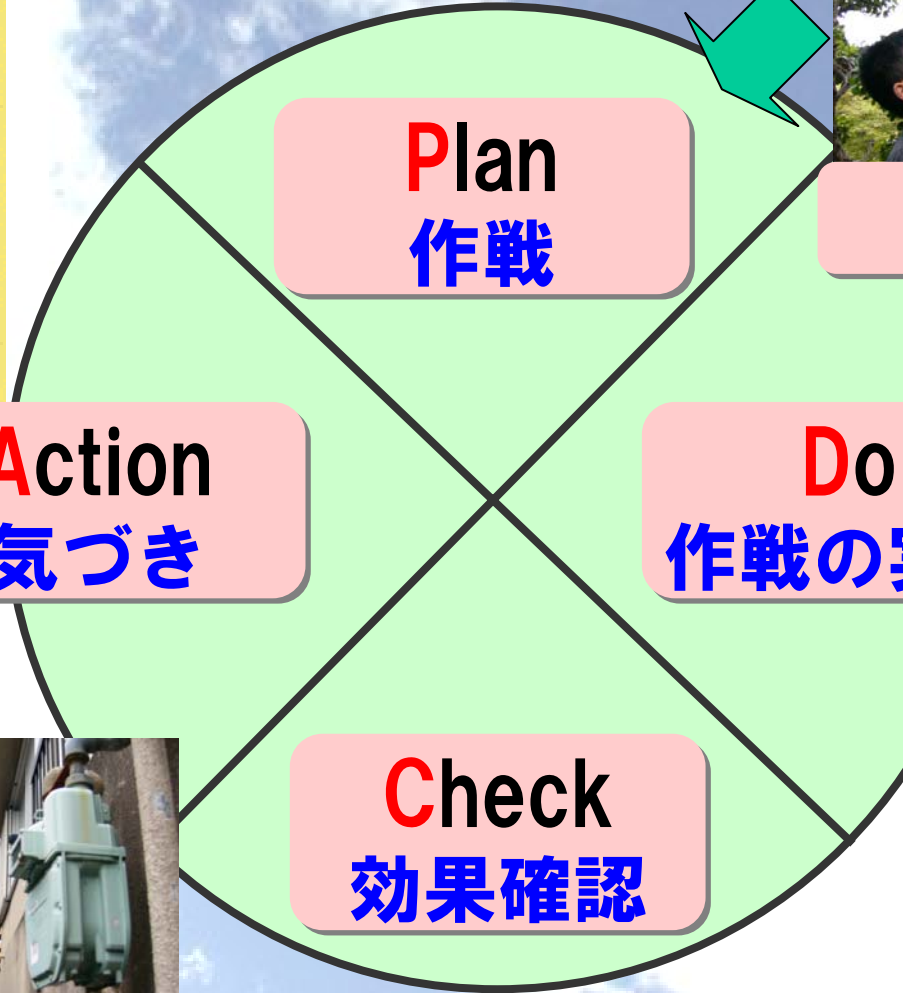
# キッズISO14000<導入授業>

「どうしてKids'ISOに取り組むのか」への動機付け

- 「地球環境の現状」
- 「残り少ない資源」
- 「企業の取組みとISO14001」
- 「私たちにできること」<まず無駄から無くそう>



# キッズISO14000 <PDCA>



現状分析





# 子どものコメント

- ・初めてこのような活動に取り組みました。貴重な体験ができました。これからも、この体験をいかして、この取り組みを続けていきたい。
- ・むずかしかったけど、とても楽しかったです。地球を守るために、一人ひとりの行動がいかに大切なのがわかりました。
- ・身近なことだけど、普段あまりしていなかったもので、こういう事も大切だということを知りました。
- ・私は、今回の活動以外にも省エネになることを見つけて、地球温暖化を防ぎたいです。また、他の人にも地球温暖化のことを知ってもらって、色々和省エネについて考えてもらいたいです。

# 家族の方のコメント

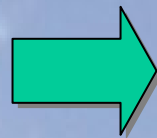
- ・子どもなりに考えて、出来ることから実際に行い、家族にも協力を訴え、行なってもらうことで、少し**家族の団結力も強くなった**ではないかと思います。
- ・チェック期間は終わりましたが、みんなの地球のために**一人ひとり**ができることから**続けていけばよい**と思いました。
- ・我が家では「**ISO**」が**注意し合う言葉**として定着しました。
- ・電気を点けっぱなしにして、**家族から色々**と指導を受け、「**ISOキラー！**」と呼ばれて皆の足を引っ張ってしまいました。**大変反省しております。**(父より)

# 担当の先生のコメント

- ・日頃から環境活動を実施しており、**その成果を確認できた。**
- ・外部の方との関わり会いの中で**意欲向上につながった。**
- ・総合学習の時間で環境問題を取りあげても、自分の身近な所で何ができるかというところを教えることが難しい。Kids'ISOに取り組みすることで、**「知識」を「体験」に変えることができる。**
- ・生徒同士が、わからないところを教えあったり、**それぞれの取り組みの様子を自然に話し合っていた。**
- ・実施後も、子どもたちが環境についての意識が高く、**環境を意識した発言や行動がみられる。**

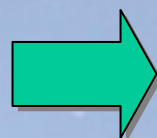
# キッズISOの価値 <社会的な価値>

- 子供の環境意識が高くなる
- 大人にも影響し、家庭全体の環境意識が高くなる



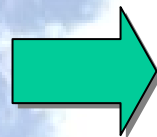
環境意識の高い  
市民の醸成

- 家庭で使用する電気、ガス、水が削減する
- 家庭で発生するゴミが削減する



地域での環境負荷が  
低減する

- 家族の協力が必要なため、家庭内コミュニケーションが向上する



非行問題など社会  
問題解決のサポート

# キッズISOの価値<企業における価値>

当社の事業所、関連会社が  
地域でイニシアティブをとって  
積極展開することで、地域での  
プレゼンスが向上



地域での信頼感の獲得

家庭で社員が実施することで、  
自ら環境問題を実感できる  
社員の家庭に環境を大事にする  
気持ちが根付く



社員の環境意識が向上、  
環境経営の基盤が強化

この活動をサポートする当社  
インストラクターや社員のモラル  
が向上



会社の環境経営に貢献  
社員の自己実現に寄与

THE DOCUMENT COMPANY

FUJI XEROX

ご清聴ありがとうございました。



THE DOCUMENT COMPANY  
FUJI XEROX

## 企業・事業者の地域貢献・地域との協働のあり方を考えるセミナー（事例発表）

（司会）

それでは、最後、お三方目といたしまして、最初にお話をいただきました小川様とともに環境学習のお取り組み等を進めていらっしゃいます、兵庫県西宮市の大栄グループ代表、赤澤健一様にお話を頂戴します。

赤澤様、よろしくお願ひいたします。

（赤澤）

只今ご紹介いただきました、大栄サービス、有限会社大栄衛生の両方代表を務めさせていただきます赤澤と申します。よろしくお願ひいたします。

本日は、私ども廃棄物処理業者なのですが、先ほど小川さん、LEAFさんと協働して進めさせていただいている事業を事業者側、先ほど小川さんはNPO側の視点でお話をされたんですが、事業者としてなぜあんな取り組みをしているのかというところを少しお話をさせていただきたいと思います。

廃棄物処理業者の社会貢献ということで、ちょっと極端な事例、右と左というような感じだと思います。そういった極端な話ですが、少しお聞きいただければと思います。

そして、何をしているかということだけではなく、なぜ我々がLEAFさんと一緒に取り組んでいるか、みたいところを少しご理解いただければなと思っています。

まず会社の概要なのですが、設立が1974年、約30数年ほど前です。産業廃棄物の収集運搬、中間処理を兵庫県西宮市でやっております。阪神タイガースの本拠地、甲子園球場から車で約10分ぐらいのところで作らせていただいております。

活動内容としましては、阪神間を中心に近畿圏で活動しています。そして、お取引いただいている工場は岡山から三重県までございます。1,600工場。産業廃棄物の取り扱い量は年間約26,000トンです。そして、2000年9月にISO14001を認証取得いたしました。

もう一つの会社なのですが、大栄衛生と言いまして、これは社歴で40数年になります。西宮市の家庭ごみの回収の委託を受けているのと、あと西宮市内から排出される事業系ごみ、例えば飲食店とかこういった民間、民間と言うとちょっと語弊があるかも知れませんが、事業をしている、商売をしているところから出てくるごみを回収させていただいております。2006年12月、去年の12月にエコアクション（EA）21に認証・登録させていただいております。

全体のお話から行きますと、まずなぜこんな取り組みをしているのか、そして、どのようにしているのか、さらに、その活動をどう伝えているのかという、大きく三つに分けた形で少しお話をさせていただきます。

まず、なぜしているのか。先ほど申し上げましたとおり、私ども一般廃棄物・産業廃棄物の廃棄物処理業者です。一般廃棄物処理業は、やはりその地元に根付いて、各市町単位の許認可事業ということで、当然地元に着した事業であるということ。そして、地域社

会生活の社会基盤であるというのを認識しております。そして、大栄サービス、産業廃棄物処理業は、産業社会の社会基盤という自負はあるんですが、やはり一般の方々から見ると、廃棄物処理業者というのは非常に分かりにくいというのがよく言われています。新規でお話をしている時に、よく分からないとか、どういう活動をしているとか、ちょっと穿った見方をされてしまいます。

そこでやっぱり安心・信用できる事業者って、我々どういう業者なんだと。廃棄物処理業者が安心・信用できる業者というのはどういうことなのかと言った時に、我々はこの四つの取り組みを考えております。

まず一つは、当然遵法性、コンプライアンスですね。法を守る。そして環境保全の取り組み。我々は廃棄物処理業者ですから、廃棄物そのもの、環境そのものがビジネスである。ということであれば、環境保全をちゃんとしておく。そして、それをちゃんと情報公開する、皆さんに説明するということが重要だと思います。そして、この三つは一昨年、環境省が廃棄物処理業者のいわゆる優良性の基準であるということを確認に打ち出しました。遵法性と環境保全の取り組み、そして情報公開、とりあえずこの三つにおいては、廃棄物処理業者が優良であるという一つのポイントなんですが、我々はそれに対してもう一つ、先ほどからもお話がいっぱいありましたが、ISOに取り組んできました。その中でやはり社会貢献、社会性だろうと。社会貢献にちゃんと取り組まなければいけないだろうと思います。そういったことを取り組むことによって、我々は信用してもらおうと。ただ、この四つの取り組みというのは、結果的にはCSRだというのが我々の認識です。

そして、ちょっとCSRというのを確認していきたいと思います。企業の社会的責任。先ほどからずっと言われています。じゃあ、企業の社会的責任というのはどういうことかということと、何を目的にすることなのかということですね。

まずどういうことなのかと言いますと、社会に積極的に貢献していくために、企業内外に働きかける制度的義務と責任。その他に、社会的、経済的、環境的パフォーマンスの向上を目指すこと。そして、海外の定義で行きますと、やはり持続可能なビジネスの成長につながるステークホルダーとの関係を自主的に取り入れていく。そして、社会が企業に対して抱く倫理的、法律的、商業的、かつ公共的な期待に応える。そして、企業と社会の相乗的發展を図る経営。基本的には、事業そのものを成功に導くために社会とどう係わるかということがCSRとっております。

そして、そのさまざまな利害関係者というのがあるんですが、たくさんあります。これ以外にステークホルダーというののもっともっとたくさんあります。企業に係わる、単に西宮にありながらもどこかで環境負荷をかけているということであれば、それは当然ステークホルダーであるという認識はあります。

ただ、廃棄物処理業者が一番ステークホルダーとして考えなければいけないのは、地域住民、行政。よく廃棄物処理業者はお客様とかそういうところを大事にしていこうというのは当たり前と言われるんですが、やっぱり一番廃棄物処理というのは地域に対してイン



パクトを非常に与えます。そういったことを認識すれば、やはり地域住民とか行政、そういったところに対する関係というのを常に考えていかなければいけない。それともう一つ、働く従業員、社員との関係というのも十分考えていかなければいけないと思っております。

そういった中で、我々は社会貢献をどのようにしているのかというところなんですが、先ほど申し上げましたとおり、小規模事業者です。大栄サービスは 33 名、大栄衛生は 80 数名おりましたも、運転手と作業する人間がほとんどになっていますので、零細とは言わないまでも小規模事業者ということで、やはりそれが社会貢献していく中で、人的な制約、これが一番大きなことだと思っています。そして、かけられるお金にも限りがあります。またノウハウ、環境問題とか、多少廃棄物リサイクルに関しては知識はありますが、それ以外に関してはノウハウを持っていない。そしてもう一つは、じゃあどこに対して貢献すればいいのかということがあります。チャンネルの問題ですね。それがあります。やはり廃棄物処理業者が社会貢献したいと言っても、なかなか受けてもらえるところがない。よく分からないところがありますよね。

そういったところを解決していただくということで、NPOとの連携を求めた。ここに LEAF さんとの協働関係を求めていったというところですね。そしてその中でさまざまな制約を、地域のさまざまな規模・業態の企業と協働による取り組みで解決していったというところですね。

ごみリサイクルだけの授業でしたらなかなか持っていけないし、子どもたちに理解してもらえない。先ほどのような企業との連携によって循環型を見せることによって、我々の位置関係、その事業の位置とか社会における位置なんか子どもたちに十分理解してもらえ、そういったことを行えるというのが現実にあります。

具体的な例としましては、先ほど小川さんのほうが飛ばされた「食の分科会」ですね。ここをちょっと説明させていただきます。

参加メンバーは、ケーキを作っている会社、ハムを作っている会社、そして販売している会社、JA さん、生産していると言うか、農業ですね。そしてお米を精製している会社、私ども、それを小学校 5 年生の授業としてやらせていただきました。

プログラムの目的は、自然の恵みと食べ物ができるまで、そして食べ物がみんなの食卓に届けられるまで、これが製造とか流通過程ですね。そして、みんなが食べるご飯、食べた後、どこに行ってどうなるのか、そういったことを単に一方通行ではなく、いろんな視点でお話をさせてもらうこと、また体験してもらうことによって、自分たちで考える力を付けてもらうと考えています。

農家で生産された物が製造・加工され、流通、販売されて消費者に届く。そして、廃棄されて、私もコンポストとか肥料化、堆肥化をやっていますので、堆肥化されてそれがまた農業に戻るというふうな、これは直線では必ずしもないですが、子どもたちに理解してもらうということで、こういったそれぞれの位置付けで授業をさせていただいております。

まず授業の特徴なんですが、単発ではないんです。1 日だけで終わらせるのではなくて、

何回ものシリーズに分けて、時間的に理解してもらおうというふうな工夫も取り入れております。そして、先ほどのお話にもありましたように、企業が自分たちでプログラムを作るために会議をしています。

初年度、2003年か2004年でしたか、その時は実際に1回授業するまでにだいたい3、4回会議をします。まったくのボランティアで皆さんに集まっていただいて、ワイワイガヤガヤ、作っていただいています。当然、途中で学校の先生なんかも入ってきます。というのも、なかなか小学校で教えた経験がないということで、どんな話をしているのか、どんな話の仕方を持っていったのかとか、例えば言葉の使い方、用語の使い方、会社先で言いますと、その会社の要望に縛られて、その専門用語ばかり発してしまうとか、今度は小学校2年生に赤ちゃん言葉を使うとか、そういう変なことが起こってしまうので、そういったことも含めて先生にいろいろと教えてもらう。これも結構皆さん真剣に取り組んでいますし、瓶なんかおそらく7、8回はやっていたと思います。だいたい普通で3、4回です。

そして、具体的な授業は各パート、パートに分かれて、ご自身のやられているところを説明されます。これはハムですね。ハムの製造過程で無駄をしない企業の努力を伝えます。基本的には、企業は社会的責任を負っているということで、非常に頑張っている、みたいなところも皆さん積極的に子どもたちに伝えようと努力をしております。

あと、ケーキですね。ケーキ一つ作るのにもいろんな素材、それも世界中から素材が集まってきます。そういったことのお話もします。冬にイチゴのショートケーキがなぜあるか、みたいなところですね。そういったことによって世界との係わりとか、国際社会との係わりなんかも理解することができるようになります。

お米ですね。洗ったり、作ったりするところを少し説明して、そして堆肥、リサイクルですね、そういったお話をさせていただいています。

あと、実際にお店に行って、バックヤードみたいなお話とか、いろんなお話を聞くということがありますが、全体的に流れていますのは、聞くということと、次は実際に体を動かしてみる、そして子どもたちが楽しむことで、いわゆる体験みたいなものが根づくとか、知識が根づく、気づきにつながるというような感じです。

実際に企業さんの感想としては、皆さん非常に楽しんでくれています。先ほど言いましたように、30社あるんですが、どこも止めたいとは言わなくて、来年どうするかとか、今年もちゃんとやるのかとか、そういったお話をよく聞きますし、大手の企業さんでしたら異動があつて、非常に皆さん残念がりますね。どうしても昼間、ウィークデーの昼に授業をしますから、企業から派遣されないと、と言うか、会社が認めてくれないとなかなかできない、なかなか入れないという問題があります。そういったことで、大手さんは移動があつて非常に悲しんでおられますが、地元で事業者さんはそういったところはもう本当に積極的に係わっていただいております。

保護者も非常に喜んだお話をいただいております。

あと、これが私どもがいくつか単発も含めてやらせていただいている小学校、中学校、高校の授業風景なのですが、これ、私立女子高校の授業なのですが、実は私の娘の行っている高校でして、今年、娘のクラスに行く予定になっていたんですが、娘に行ってもいいか聞いたところ、「来てもいいよ」と言ってくれましたので、「絶対来ちゃ嫌！」と言われなくてよかったなというのが私の本音です。ただ残念なことに、環境学習に行くはずだったのが国際学習に行ってしまうして、授業が実際にできなかったということで、娘のほうも残念がってくれましたので、このへんは親子のコミュニケーションがちゃんと取れていたかなと、改めて自分なりに胸をなで下ろしております。

あと、私どもが出向くばかりではなくて、やはりその廃棄物の処理施設を都市部で運営しておりますので、当然その地域の方も含めて受け入れておりますし、小学校の先生もこういった施設はなかなか見ることがないということで、こういったことも積極的に行っております。

そして、こういった取り組みなのですが、どうしても担当者だけが参加していると、なかなか感動が会社に伝わらない、上司に伝わらないという問題がありますし、何か形として担当の方が会社の中で安心してこういった活動が続けられるという配慮を、LEAFさんにもいただきまして、西宮市を巻き込んで、参加した企業、社長名もしくは上司名に対し感謝状を授与していただきました。これによってNPOで勝手にやっているのではなく、ちゃんと西宮市で活動している、行政と手を組んで活動している、そしてそれが行政から認められているということによって、それぞれの活動がまたしやすくなる。本人たちも参加しやすくなるという、そういったシステムも実は積極的に取り組んでいます。こういったところは、一方的に参加してくださいではなく、参加していただいた人たちに対する配慮とか感謝、そういったものを十分持っていていただきまして、そういったことでも我々は非常に参加、協力しやすいというところがあります。

実は昨年ですが、名古屋にありますNPO法人パートナーシップ・サポートセンター、で、さわやか福祉財団が後援となっているパートナーシップ大賞というのがあります。

去年は第4回ですが、私どもが協力、参加させていただいております、このプログラム事業がグランプリをいただきました。そういった意味では社会的に認められつつある活動なのかなと思っています。

あと、地域の方にもということで、ちゃんと地域の周りを掃除しています。そして、ソフトボール大会の幹事なんかもしながら、できるだけ地域に、企業組合がたくさんありますので、そこでの融和なんかも考えております。

そして、このような取り組みなのですが、放っておいてはやっぱり理解してもらえない。ここでちゃんと伝える努力を我々がするべきであると。外部の人たちの要求は透明性ですね。そして、会社や商品サービスの価値を決めるのは外部の人たちなんです。我々がどんなにいいものだと言っても、外部の人にちゃんとそれが伝わらないと意味がない。だから、ディスクローズ（情報公開）から我々はアカウンタビリティ（説明責任）、理解してもらう

努力をしなければならない。「分かってくれない」じゃなくて、「分かってくれる」努力をし続けることが事業者としての責任だと思っています。

まずお客様へのアカウントビリティ、当然事業者ですから。そして、先ほどありましたように地域住民や行政へのアカウントビリティ、その他たくさんの利害関係者（ステークホルダー）へのアカウントビリティがあるんですが、やはりその中でも大きなものが社員へのアカウントビリティですね。社員に対して会社が何をしているのか、どういうことをしているのか、そういうことをちゃんと伝えることによって、社員も今度は会社への信頼、満足につながる。そういったものがいわゆる会社を発展させる力になるんだろうなと思っています。

具体的な例としましては、ホームページを使いまして、さまざまな情報を提供しております。一つの例としまして、私ども、去年4月から廃棄物の中間処理施設の状況をリアルタイムで24時間配信しています。そのサンプル画像ですが、こういった状態でホームページを見ていただければ、必ずこれが出てきます。8時から5時の間の稼働で、それ以外は電気が切れて真っ暗なんですけど、こういったふうに私どもがどんな活動をしているか、どういうふうに事業をしているかということをいつでも見てもらおうということで、WEBカメラで公開しています。ぜひ一度ホームページでご覧いただきたいと思います。ブロードバンドならばほぼ1秒ごとに画像が変わるので、切れ目なく動くようにはなっていると思います。

その他に、環境省が定めます優良な産業廃棄物処理業者の定義、優良性評価制度へ登録しておりまして、去年12月、西宮市からも優良性評価をいただいております。

そして、環境報告書ですね。2000年にISO14001の認証取得をしました。そして、2002年から毎年環境報告書を作成して出しております。そして、本日、皆さんのお手元のほうに配付させていただいております。今年度は「環境・社会報告書」になっております。今までは「環境報告書」だったんですが、今年から「環境・社会報告書」に改めました。これは先ほどの皆さんの話と同じように、今まで環境教育に取り組んでいた、そして社会活動、社会貢献活動を取り入れて、それをちゃんと報告しようと思えば、もう必然的に「環境・社会報告書」になったと。そして、その財務の健全性とか、働く社員のことを考えれば経済性みたいなものをちゃんと入れなければならないだろうということで、環境・社会経済、来年は「環境・社会・経済」になるので、すでにCSR報告書になっていると考えております。

そして2007年、本年2月にこの「環境・社会報告書」が第10回環境コミュニケーション大賞奨励賞を受賞いたしました。第8回で三重県の環境報告書が奨励賞を受賞されて、本年第10回は三重県さんは優秀賞を受賞されておることをホームページで確認しております。そういったことで、私どももようやく皆さんが見るに耐える報告書を作らせていただいたかなと思っています。

今までの取り組み、環境保全、遵法性、社会貢献、そしてそれをちゃんと説明していく

姿勢、それを環境報告書やホームページ、さまざまな制度、そして業界紙、マスコミ、そうしたところを通じて外部に積極的に発信するという事で、ならばいわゆる地域も安心する、お客様も安心する。私ども、C&CS（カスタマー&コミュニティ・サティスファクション）というような言い方をしています。CSと言うんですが、私はもう一つCを付けたい。これは地域(Community)というCです。そして、従業員の満足を獲得する。こうすることによって社内外からの安心・信用の獲得を目指しているところです。

これで一通りのご説明と言いますか、なぜ取り組んでいるのか、どのように取り組んでいるのか、そしてちゃんと伝える、それはこういった事業者として皆様に安心・信頼いただく、信用いただくためのさまざまな取り組みだということでございます。

CSRなんですが、非常に大手さんは積極的にお取り組みになっていますが、私は、やはり地域貢献とかCSRはもっともっと地域に根ざした小規模事業者が取り組んでもいいんじゃないかと思っております。そういった取り組みによって、地域に認知される事業者。だったら、同じお店ならあの店で買っていこう、まさにこれが持続可能な事業だと思えますし、そういう意味で社会、事業者、そして市民、行政も含めて、互いに関係し合う、満足し合える形になっていくのかなと思っております。以上でございます。

(司会)

赤澤様、ありがとうございました。

LEAFさんとご一緒の取り組みということで、事業者様からの視点と言いますか、気づき、発想に基づいたCSRのとらえ方とか、あるいは環境学習の取り組みの先進・先駆事例という形で貴重なお話をいただきました。ありがとうございました。



# 企業・事業者の地域貢献・地域との協働のあり方を考えるセミナー ～環境教育の視点からのアプローチ～

大栄サービス株式会社  
有限会社 大栄衛生

2007年02月27日



## 大栄サービス・大栄衛生の活動

「何をしている？」だけではなく、「“何故”しているのか」

皆さんが「何故するのか」を考える時の参考に！





## 会社概要

平成19年2月現在

会社名	:	大栄サービス株式会社
所在地	:	兵庫県西宮市鳴尾浜二丁目1番16号
設立	:	1974年(昭和49年)3月26日
代表者	:	代表取締役社長 赤澤 健一
資本金	:	7,000万円
従業員	:	30名
事業内容	:	産業廃棄物の収集運搬・積替保管・中間処理 (破碎・乾燥)
グループ会社	:	(有)大栄衛生、(株)大協、(株)RMT
事業概要	:	阪神間を中心に近畿圏を活動エリア クライアント数は約1,600サイト(工場) 環境機器の販売は全国に実績(約250台) (2005年3月末を持って自社販売を終了、事業を他社へ譲渡) 産業廃棄物の取扱量は約26,000t/年 2000年9月にISO14001認証取得





## 会社概要

平成19年2月現在

会社名	:	有限会社 大栄衛生
所在地	:	兵庫県西宮市西宮浜4丁目1番27号
創業	:	1959年(昭和34年)11月(1968年法人登記)
代表者	:	代表取締役社長 赤澤 健一
資本金	:	500万円
従業員	:	89名

事業概要 : 一般廃棄物の収集運搬  
西宮市内可燃性家庭ゴミの回収(西宮市委託事業)  
不燃性家庭ゴミの回収(西宮市委託事業)  
資源ゴミの回収(西宮市委託事業)  
事業系一般廃棄物(許可業務) 西宮市指令美2第1号  
産業廃棄物の収集運搬  
(兵庫県・西宮市・尼崎市・神戸市・大阪府・大阪市)  
特別管理産業廃棄物の収集運搬(西宮市・兵庫県・大阪市)  
2006年12月にエコアクション(EA)21に認証・登録



## 大栄サービス・大栄衛生の取り組み

- 何故しているのか？
- どのようにしているのか？
- ちゃんと伝える！



## 何故しているのか？

- ・ 大栄衛生  
一般廃棄物処理業は地元中小事業者、地域生活の社会基盤
- ・ 大栄サービス  
産業廃棄物処理業は産業界の社会基盤

安心・信用できる事業者とは

### 弊社の取り組み

- ・ 遵法性
- ・ 環境保全の取り組み
- ・ 社会(貢献)性
- ・ 情報公開(説明責任)

CSR?



# CSR: 企業の社会的責任

Corporate Social Responsibility

Corporate

Social

Responsibility

『企業組織と社会の健全な成長を保護し、促進することを目的として、不祥事の発生を未然に防ぐとともに、社会に積極的に貢献していくために企業の内外に働きかける制度的義務と責任』

(「CSRマネジメント」編著・水尾順一・田中宏司)

『企業活動のプロセスに社会的公正性や環境への配慮などを組み込み、ステークホルダー(株主、従業員、顧客、環境、コミュニティーなど)に対しアカウンタビリティを果たしてゆくこと。その結果、経済的・社会的・環境的パフォーマンスの向上を目指すこと。』

(「CSR経営」編著・谷本寛治教授)

三方よしー売り手よし、買い手よし、世間よし (近江商人)



# CSRの様々な定義

## ・欧州委員会ホワイトペーパー(2002年)

責任ある行動が**持続可能なビジネス**の成功につながるという認識を企業が持ち、**社会や環境**に関する問題意識を、その事業活動や**ステークホルダーとの関係**のなかに、**自主的に**取り入れていくための概念。

## ・BSR(Business for Social Responsibility):アメリカ

CSRとは、社会が企業に対して抱く、**倫理的、法律的、商業的、かつ公共的な期待**に応え、あるいはそれを上回る方法で、事業を展開していくこと。

## ・経産省産業技術環境局

法律遵守にとどまらず、企業自ら、市民、地域及び社会を利するような形で、**経済、環境、社会問題**において、**バランスのとれたアプローチ**を行うことにより事業を成功させること。

## ・経済同友会

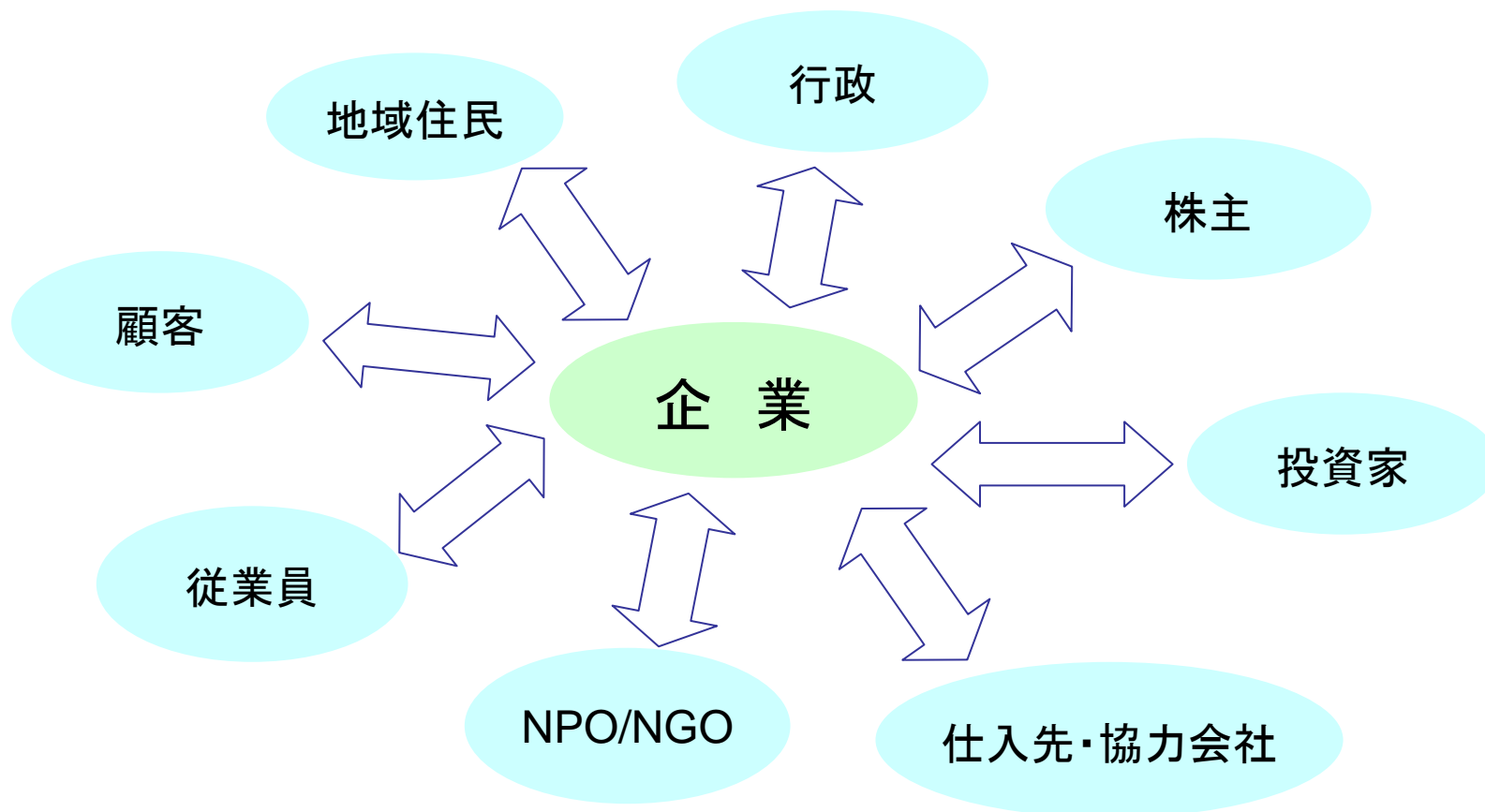
「社会的責任経営」とは、**さまざまなステークホルダー**を視野に入れながら、企業と社会の利益を高い次元で調和させ、**企業と社会の相乗発展**をはかる経営のあり方。

CSRは単に社会貢献やコンプライアンスのレベルにとどまらず、事業の中核に位置づけるべき投資であり、将来の競争優位を獲得しようという能動的な挑戦。



# ステークホルダー(利害関係者)

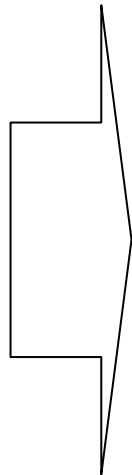
Stakeholder





## どのようにしているのか？

- ・人的な制約
- ・財政的な制約
- ・チャネルの制約
- ・ノウハウの制約
- ・その他の制約



### NPO(LEAF)との連携

地域の様々な規模・業態の  
企業との協働による取り組み

# 食は生命の輝き

環境学習支援プログラム開発プロジェクト  
「食」分科会より



## 参加メンバー

- 株式会社アンリ・シャルパンティエ 山本 純子
- 伊藤ハム株式会社 原 満信 又野 幸次
- 生活協同組合コープこうべ 斎藤 優子
- JA兵庫六甲 佐藤 亮子
- 東洋精米機製作所株式会社 福永 和弘
- 大栄サービス株式会社 向井 徳子

## 実施学校

- 西宮市立平木小学校5年生(46名)

## プログラムの目的

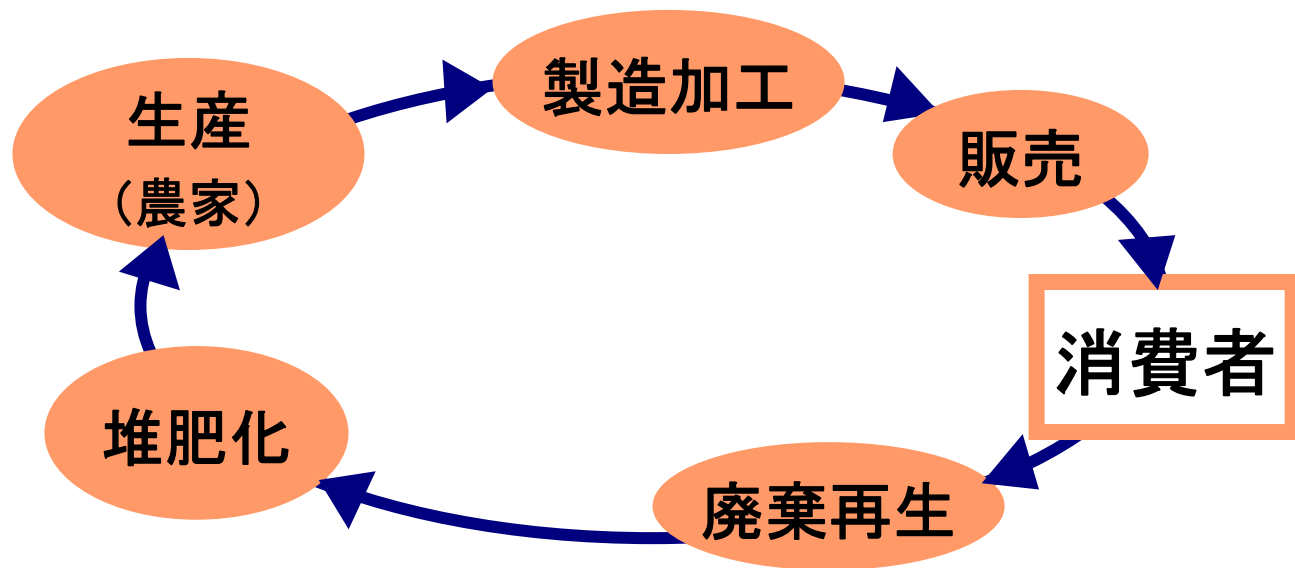
～食べものをムダにしない工夫を知ろう～

- 自然の恵みと食べものができるまで
- 食べものがみんなの食卓に届けられるまで
- みんなが食べるごはんのゆくえ
- 自分にできるムダをなくす工夫を考えよう！

# プログラム内容

## 「食べものは生命の輝き～ムダにしない工夫を知ろう～」

自然のめぐみからできた作物は、様々な人々の仕事を通して、わたしたちの食卓に届けられます。企業の人たちの食べものをムダにしない努力を知ることで、自分達にできる工夫を考えます。



### 第1回 自然の恵みと食べものができるまで

日時 10月19日(火)3~4時間目 / 場所 多目的室

企業 JA兵庫六甲

### 第2回 食べものがみんなの食卓に届けられるまで

日時 10月22日(金)5~6時間目 / 場所 家庭科室

企業 (株)アンリ・シャルパンティエ、伊藤ハム(株)

### 第3回 みんなの食卓と食べものゴミのゆくえ

日時 10月26日(火)3~4時間目 / 場所 家庭科室

企業 (株)東洋精米機製作所、大栄サービス(株)

### 第4回 自分にできる工夫はなんだろう？

日時 11月2日(火)2~4時間目 / 場所 コープ北口食彩館

# 食は生命の輝き

## 会議の様子

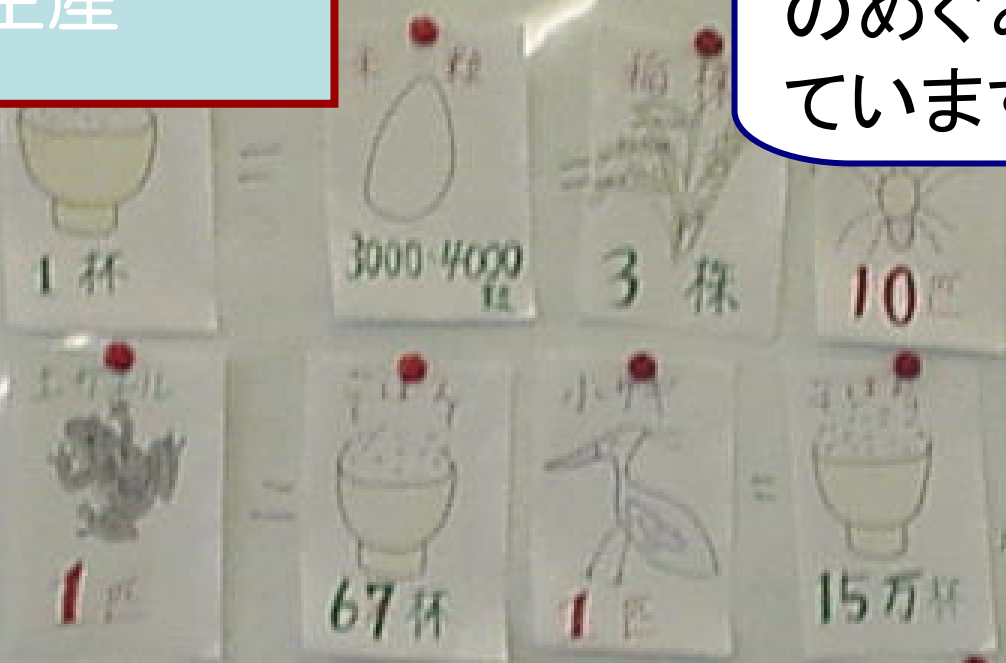
各社の共通点は、  
「ムダを出さない工夫」  
ですね。

食べ物をめぐる各社のつながり探しや、学習プログラムの内容について、学校教員を交えて相談しました。

# 第1回

## 生産

食べものは、自然のめぐみで作られています。



自然のめぐみや、食べものを生産する農家のお仕事を紹介しました。

## 第2回

## 食品製造

よぶんな油脂は、  
石けんなどにリサ  
イクルしてます。

ハムが作られるまでの製造工程や、その中でムダを  
しない企業の努力を伝えました。

## 第2回

### 食品製造

ケーキひとつを作るのに、いろんな努力をしています。

働くおとまと一緒に学ぼう！

食は生命のかがやき

～食べものをムダにしない工夫～

食べものがみんなの食卓に届けられるまで

アンリ・シャルパンティエ

ショートケーキの製造工程や、その中でムダをしない企業の努力を伝えました。



# 第3回

## 家庭

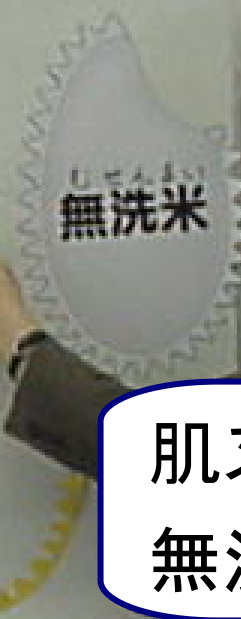
食べものの行方を考えよう



精米



無洗米



肌又力を取ると、  
無洗米ができます。

普段食べている米の構造や、食卓と自然のつながりを伝え、ぬかを取り除いた無洗米のことを紹介します。

# 第3回

## 廃棄再生

みんなの家庭から、  
どれだけのゴミが  
出ているのかな？

と食べものの行方を考



24h



加工食品



肉にあふら

家庭から出るゴミの量が多いことを伝え、ムダを出さない  
ためにどうすればいいのか考えてもらいます。

## 第4回

### お店



お店のバックヤード見学

みんなの家庭から、  
どれだけのゴミが  
出るんだろう？

買物をするときにエコ商品を選んだり、リサイクルする  
など、自分にできるヒントを伝えます。

## 第4回

# エコクッキング



工夫次第で、ゴミを出さなくても料理ができるんですよ！

ムダなゴミを出さないエコクッキングのポイントを伝えたり、子どもたち自身でレシピを考えてもらいました。

- 子どもが会社名や仕事内容をきちんと覚えてくれていたことが、とても印象的に残った。
- 自分たちが住む地域に、環境のことを考えている会社があることを伝えることができてよかった。
- 分かりやすいように作ったツールに、予想以上に子どもが喜んでくれて報われた感じがした。
- 季節のわかる大人になってほしいと思った。
- 各回に参加はしていないが、全体として、各企業の役割が自然にうまくつながっていると思った。

- 学校や親が教えてやれないことを教えてもらっているので、とてもいい機会だとおもいます。
- これからの時代を担う子供たちが、本物を見せてもらうというのはとてもいいことだと思います。
- 子どもたちの様子もよく分かるし、親子のコミュニケーションもとれ、とてもいい授業だと思います。
- この年齢になるまで、知らないことがたくさんあるので、今後もできるだけ参加したいです。



# 公立小学校授業





# 公立小学校授業







## 公立中学校授業





# 私立女子高校授業





## 小学校教員受け入れ(処理施設の公開)





## 西宮市より感謝状の授与





## 第4回パートナーシップ大賞 グランプリを受賞！

NPO法人パートナーシップ・サポートセンター主催「第4回パートナーシップ大賞」の最終選考及び授賞式が2006年11月11日に名古屋国際センターで開催され、当社がNPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）、西宮市内の企業の皆様と協働でおこなっています企業プロジェクト「企業ができるこどもたちへの環境学習支援事業」がグランプリを受賞しました。

関連記事は神戸新聞2006年11月15日に掲載されました。



パートナーシップ大賞・NPOと企業が協働を通じて社会にインパクトを与えた特色ある事業を表彰するものです。





## 地域合同清掃の参加





## バス停ゴミ回収





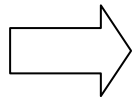
# ソフトボール大会







## ちゃんと伝える！



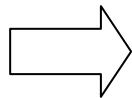
外部の人たちの要求は透明性

更に企業は外部にその活動を理解してもらう努力が必要！

→会社や商品(サービス)の価値を決めるのは外部の人

→ディスクロージャー(情報公開)からアカウントビリティ(説明責任)へ

- お客様(排出事業者)へのアカウントビリティ
- 地域住民や行政へのアカウントビリティ
- 金融機関へのアカウントビリティ
- その他ステークホルダー(利害関係者)へのアカウントビリティ
- 社員へのアカウントビリティ



様々な反応は社員の会社への信頼と満足に！



# ホームページ

産業廃棄物処理・パソコンの廃棄・リサイクル【大阪・兵庫・西宮】 - Microsoft Internet Explorer

ファイル(F) 編集(E) 表示(V) お気に入り(A) ツール(T) ヘルプ(H)

戻る 検索 お気に入り

アドレス http://www.daieiservice.co.jp/

Google 検索 7をブロックしました チェック オプション 移動

産業廃棄物処理・パソコンの廃棄・リサイクル【大阪・兵庫・西宮】

ISO 14001 認証取得

**大栄サービス株式会社**

**【お問合せ】**  
TEL:06-6243-7781

**環境省**  
環境省大臣官房政策評価広報室長よりロゴマーク使用許可を頂いております

産業廃棄物やパソコンの  
収集運搬・処理・リサイクル

プレスリリース 会社概要 事業内容 リクルート情報 環境活動 F A Q 問い合わせ

ENGLISH

**TOPICS** 更新日 2006.11.11

2006.11.1  
●プレスリリースに記事を2つ追加いたしました。  
循環経済新聞と強道新聞に大栄サービスの記事が掲載  
されました。環境報告書発行に関する記事内容となっております。  
是非一度ご覧下さい。

2006.10.3  
●無機汚泥を100%リサイクルいたします！！  
現在、無機汚泥を埋立処理されているお客様。ぜひ一度お問い合わせ  
ください。100%リサイクルを提案させていただきます。

**事業内容**

- 産業廃棄物処理・リサイクル
- パソコン廃棄・リサイクル
- リサイクル・処理センター

**News**

環境学習実施！！西宮市立 北六甲台小学校にて

**お役立ちコンテンツ**

- 収集運搬業許可書一覧 ● 許可番号一覧 ● 車両一覧

**大栄サービスの社会貢献**  
(CSR:Corporate Social Responsibility)

大栄サービスはISO14001を取得しCSR(企業の社会的責任)の一貫として環境教育にも取り組んでおります。

● 環境活動のページへ

環境報告書 (2006年度)

>> サイトのご利用について >> プライバシーポリシー

| 会社概要 | 産業廃棄物処理 | パソコン廃棄・リサイクル | リサイクル・処理センター | リクルート情報 | 環境活動 | FAQ | 問い合わせ |

ページが表示されました

スタート 受信トレイ - Outlook ... 産業廃棄物処理・パソ... インターネット

10:38



# WEBカメラ

当社HPで昨年4月から計量、破碎の様様を公開し、処理の様様をリアルタイムで確認して頂けます。  
お客様からは処理の様様がわかり安心できると好評を頂いています。  
また、順次WEBカメラを増設いたします。

HPIにてWEBカメラ画像配信：  
<http://www.daieiservice.co.jp/>



荷卸ろしから選別・破碎までの、処理センター場内での作業風景をご確認頂けます。

※ パナソニックの専用プラグインが必要です。ブラウザの指示に従ってインストールして下さい。  
(インストール画面が出ない場合は、Internet Explorerのセキュリティレベル設定変更等が必要です。別途ご相談下さい。)





# 優良性評価制度

国(環境省)による優良な産業廃棄物処理業者の定義が「遵法性」「情報公開」「環境保全への取り組み」とされ、2005年4月「産業廃棄物処理業者の優良性の判断に係る評価制度(優良性評価制度)」がスタートしました。

当社ではこの制度に基づき「産廃情報ネット」で処理実績や財務状況等各種情報を公開しています。

産廃情報ネット：  
<http://www.sanpainet.or.jp/>

開示項目セットの多寡

■産業廃棄物処理業者の優良性の判断に係る情報開示

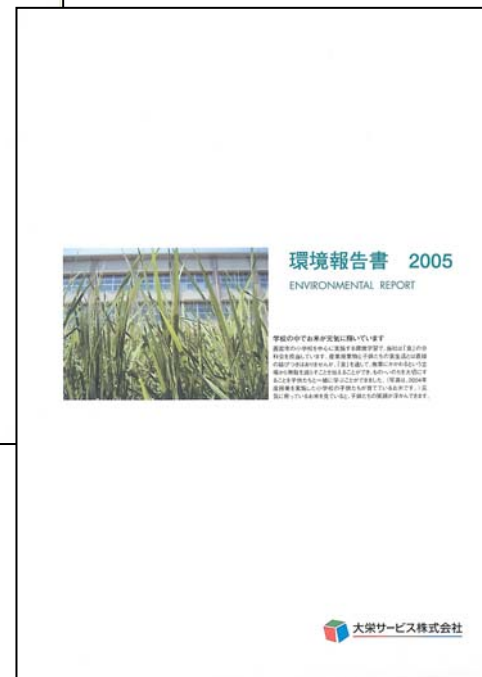
産業廃棄物処理業者氏名 (法人にあっては名称)	大栄サービス株式会社
業者番号	001331
会社情報	
産廃業者名称	大栄サービス株式会社
住所	本社 兵庫県西宮市明屋浜2丁目1番18号
代表者氏名(法人の場合)	代表取締役 斎藤 健一 (平成11年1月26日就任)
役員の名前および役員就任年月日(法人の場合)	取締役 斎藤 健一 (平成2年2月6日就任)
	取締役 斎藤 正人 (平成16年4月1日就任)
	代表取締役 斎藤 健一 (平成11年1月26日就任) 監事 斎藤 登子 (平成9年10月27日就任)
法人設立年月日	昭和49年3月26日
名称、資本金及び事業の内容の変更履歴	昭和49年3月 資本金1,000万円で大栄サービス株式会社設立
	昭和52年2月 大阪府の産業廃棄物収集運搬業の許可を取得
	昭和52年3月 兵庫県の産業廃棄物収集運搬業の許可を取得
	昭和52年5月 大政市の産業廃棄物収集運搬業の許可を取得
	昭和54年12月 堺市の産業廃棄物収集運搬業の許可を取得
	昭和58年4月 東大阪市の産業廃棄物収集運搬業の許可を取得
	昭和58年9月 堺市の産業廃棄物収集運搬業の許可を取得
	昭和59年3月 神戸市の産業廃棄物収集運搬業の許可を取得
	昭和59年5月 処理センター(岡尾浜)移転
	昭和59年9月 奈良県の産業廃棄物処分業の許可を取得
	平成1年11月 奈良県の産業廃棄物収集運搬業の許可を取得
	平成4年12月 和歌山県の産業廃棄物収集運搬業の許可を取得
	平成5年4月 和歌山県の産業廃棄物収集運搬業の許可を取得
	平成5年6月 大阪府の特別管理産業廃棄物収集運搬業の許可を取得
	平成5年7月 大阪府の特別管理産業廃棄物収集運搬業の許可を取得
	平成5年8月 処理センター(設楽坂)大
	平成5年10月 和歌山県の特別管理産業廃棄物収集運搬業/特別管理産業廃棄物処分業の許可を取得
	平成5年10月 京都府の産業廃棄物収集運搬業の許可を取得
	平成5年10月 堺市の特別管理産業廃棄物収集運搬業の許可を取得
	平成5年11月 和歌山県の特別管理産業廃棄物収集運搬業の許可を取得
	平成6年2月 滋賀県の産業廃棄物収集運搬業の許可を取得
平成6年2月 尼崎市の特別管理産業廃棄物収集運搬業の許可を取得	
平成6年4月 堺市の特別管理産業廃棄物収集運搬業の許可を取得	
平成6年4月 大阪府の特別管理産業廃棄物収集運搬業の許可を取得	
平成7年3月 大阪府中央区に大阪オフィス移転(営業及び管理部門を大阪に集約)	
平成8年 処理センター(岡尾浜)新社屋完成	
平成8年5年 奈良県の産業廃棄物収集運搬業の許可を取得	
平成8年6月 京都府の産業廃棄物収集運搬業の許可を取得	
平成8年7月 北九州市の産業廃棄物収集運搬業の許可を取得	
平成8年7月 北九州市の特別管理産業廃棄物収集運搬業の許可を取得	
平成9年1月 滋賀県の特別管理産業廃棄物収集運搬業の許可を取得	

<http://www2.sanpainet.or.jp/youhou/preview.php?Painid=6&Painid=00978&Painid=001331> (1/9)2006/09/17 23:47:26



# 環境報告書

2002年より環境報告書を作成し、当社の取り組みを広く公開しています。





# 環境報告書

2006年度は社会的側面の充実を図り、タイトルを「**環境・社会報告書**」と改めました。

- その他
- 1 国際化する社会情勢に対応すべく、英文を併記
  - 2 「人材育成」「CSR(企業の社会的責任)」をテーマにおこなった対談を掲載



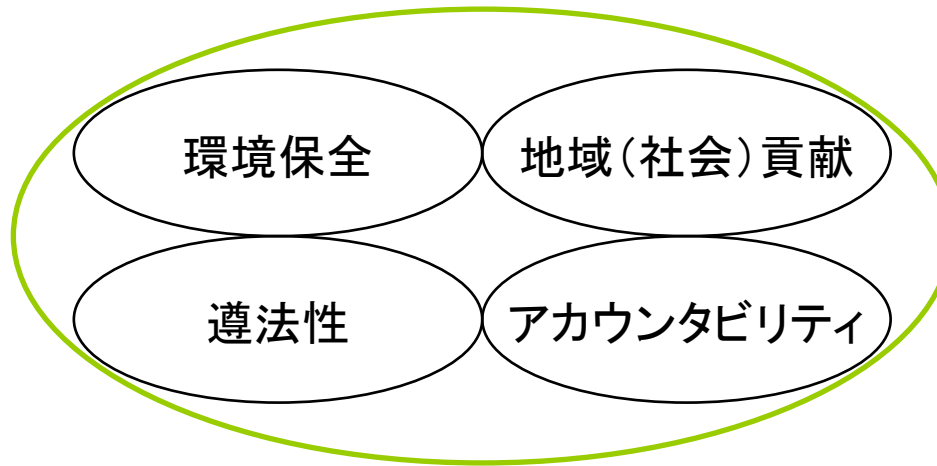
環境報告書以外にも、当社の活動をリアルタイムに報告するものとして、E. NEWSを年2回発行しています



**2007年2月『第10回環境コミュニケーション大賞』奨励賞を受賞しました！**

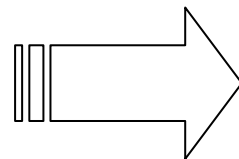


これらの取り組みで……



環境報告書、HP、優良性評価制度への参加、その他の  
媒体(業界紙等)やツールを通じて外部に積極的に発信

“C&CS(顧客と地域の満足)”と“ES(従業員の満足)”の獲得



安心・信用の獲得

## 企業・事業者の地域貢献・地域との協働のあり方を考えるセミナー（質疑応答）

それでは、只今より質疑応答の時間を設けさせていただきたいと思いますが、ちょっと座席の設定の間、お待ちください。

ちょっと時間が押しておりますが、せっかくの機会でございますので、只今から 30 分程度を目処にどなた様への質問でも結構ですので、せっかくの機会でございますので、時間の許す限りお一人でも多くの方からご質問いただければと思っております。

ご質問等がおありの方は、挙手いただければマイクがまいます。どなた様からでも、よろしくお願いいたします。

（質問者 1）

大栄サービスさんにお聞きしたいのですが、「環境・社会報告書」を見ますと、会社は 30 名ぐらいで大きくないと思うんですが、それでこのような環境報告書とかいろんな活動をよくやられておると、私は非常に感心しているんですが、どうやったらこういった活動が、こう言うのは失礼ですが、小規模のところでもうまくできるのか、コツがあったら教えていただきたいと思いますが。

（赤澤）

ちょっと説明が足りなかったんですが、環境報告書は全部社員の手づくりなんです。まったく外部に出しておりません。英文も含めてすべて社員でやらせておりますし、データの取りまとめも社内でやっております。単に印刷のみを外部に発注しているだけなんです。

ただ、やはり一つには、これは 5 冊目なんですけど、3、4 冊目ぐらいからようやく形になってきたんです。やっぱり 1 冊目、2 冊目というのはなかなか納得できないというところがあったんですが、4 冊目からそういうふうな形になったというのが一つあります。

あとは、私ども、環境委員会をちゃんと真面目に毎月 1 回やっていますし、ちゃんと確認をしております。そして、いわゆる事実をちゃんと事実としてとらえていこうと。それに基づいてどういうアクションを起こすんだという PDCA、そういったものもわりあい真面目に、私が個人的に見ても真面目にやっているとと思っています。そして、環境委員会も私は毎回ちゃんと参加していますし、ミーティングにもちゃんと参加するようにして、全体像を把握しながら進めていっているということなので、どうなんでしょうか、ただそれだけのことしかやっていなくて、事実をちゃんと伝えようと。そういったことがその外部の評価につながるんだろうと、いつも口を酸っぱくして言っているということで、特



段気負ってやっていることもないものですから、答えになったかどうか分からないんですが、ちゃんと真面目にやれば、このぐらいにはなるのかなというところでご勘弁いただきたいと思います。

(質問者2)

小川さんにお伺いしたいのですが、私は地元でまちづくりをやっていまして、今言われたような企業さんとのまとまり、最初そのきっかけをどのようにされたか、それから今度は学校への持って行き方、それも私もちょっとやりつつあるんですが、そのへんの雰囲気をもう一度お聞かせ願えたらなと思います。すみませんが、お願いします。

(小川)

まず、企業さんとの関わり合いですが、先ほど斜めの線があって、順次年次的にやっていくという資料の絵がありましたが、いっぺんにドンと集まっているわけではなくて、とりあえず最初は環境の切り口ということから、リサイクルの関係業者さんに集まっていたいて、それからそれを少し広げて、いろんなジャンルの方々の話を聞くようにして、そこから今度は具体的な事業に展開するようなところで、文具メーカーさんなんかと連携して、少しずつ発展型で具体事業を入れながら、学校教育の中に入っていきような形で広がってきたと思っています。

このLEAFの会員企業さんがまったく当初からそのままかと言うと、そうではなくて、半分ぐらい入れ替わっています。これは仕方がないと思うんですよ。やっぱり行政も呼びかけて作っている団体ですから、最初はやっぱり付き合いで入っていただいたところも当然あるわけですね。順次1割は毎年入れ替わると僕は思っていたんですね。それでもいいと。

但し、減っていくのは困るので、新しい企業さんに入ってもらわないといけないんですが、その新しい企業さんが仮に子どもの環境活動支援ということで手を挙げてくれて、LEAFに会費を払ってくれるようになるのかとなってくると、やっぱり彼らにもメリットがないとダメなんですね。

ですからそのメリットをどう作るかということで、例えば文具メーカーさんと事業を組んだ時は、文具メーカーさんの中では1社だけが会員でしたが、十数社は入ってなかったんですね。それを全部口説いて入ってもらって、その代わり、彼らの商品をエコ文具セットとして教材販売するような、そういう事業も入れて、当然彼らの商品も売れますから、それとNPOがそういうお金を使って会社の宣伝をしてくれるわけですから、当然それも

彼らのメリットになる。かつ、我々としては、環境教育の取っ掛かりとして文具というものを通じて社会に発信できるという、常にそういうお互いのメリットをちゃんと整理しながら提案して、その活動をしていただいた時には常に会員企業として活動していただくということで会員を確保していく。そのずうっと繰り返しです。ですから、基本的にはやっぱり相手のニーズとこっちの考えていることをどこで接点を持たせていくかということ調整しないと、放っておいては絶対お客さんは来ません。

あと、学校との関係で言いますと、これはLEAFでという以前に、西宮市で子どもの環境教育を推進するために、私はヒラの時から環境啓発の担当でしたから、一つ心がけたのは、市内に小学校42校と中学校が20校あるんですが、毎年何かいろんなイベントをする時にチラシを配ったり副読本を配ったりするんですが、絶対郵送しなかったんです。毎回学校を全部回ったんです。そうすると学校の先生方と顔見知りになりますし、少しずつ話ができる。その話し合いをやっぱり年に4回顔を合わせれば、当然その中でだんだん関係もできてきますので、そういうことを繰り返しやる中で、一定程度西宮市の環境局と教育委員会、学校現場というのが少し壁が取り除かれるようになってくる。まだ当時「環境教育」という言葉も学校現場にはなかったもので、環境教育に関する資料が入れば教育委員会の担当者に渡すとか、そういうお互いの情報交換はかなり環境のほうから入りました。

最終的にLEAFを作った時に、それまでに学校教育の中にいろいろ先ほどのキリンの社員も含めて入っていたんですが、教育委員会からLEAFを作る直前に、もしこれでLEAFができたなら学校教育に入ってもらえないという話になったんです。なぜかと言うと、行政のメンバーは入っているけれども、やっぱり任意団体というところでは他の任意団体と同じ土俵になってしまう。そうすると、宗教の問題とか政治の問題とか、いろんな壁が出るので、そここのところを考えないと難しいという話になりまして、それで、直前だったんですが、具体策としてLEAFの理事の中に教育次長に入ってもらうことにしました。ですから、今も学校教育担当の次長が理事をしています。そういう点では教育委員会の基本方針とLEAFの活動とは同じラインを走っているということで、今現在では、各小学校にはすべて地球ウォッチングクラブ（EWC）もしくは環境教育の担当教員というのがあって、そこを通じていろんな物流が全部できるようになっています。

ですから、年間通じて10回ぐらいはこちらの発行物が学校へ行行って、学校から各クラスへ配られて、クラスから子どもの手へ渡って家に届くというのが、もうずうっと定着していますので、そういう意味ではある程度仕組みができていますが、最初はやはりそれぐら

い時間をかけて少しずつ学校との調整をやってきました。

(質問者2)

どうもありがとうございました。

私らのところは、町が小さいものですから、やっぱり町づくりが基本になってやっ  
てい  
かないといけないのかなと考えています。西宮さんを縮小した形で、それを何回も何回も  
続けることかなど。起点はそこかなとは思いましたが、それでよろしいんですね。

(小川)

はい、そうですね。当然もうこれは理屈抜きにまず人間関係です。やはり足繁く通って、  
お互いの考えていることがやっぱりちゃんと伝えられ、ある程度のことをやる時には責任  
を持ったことをやるという、その信頼関係でしかないと思うんですね。

今、企業さんが学校に入っていますが、通常であればなかなかそれは認められないんで  
すよ。けれども、LEAF、その前にある市の事業としての地球ウォッチングクラブ (E  
WC)、ここに対する先生方の信頼度がありますから、そこに企業が来ようが来まいが、こ  
れはもう環境学習への支援ということで一括で受け止めてもらえることになります。

町づくりということになってくると、ちょっと視点が変わると思うんですが、ただ、先  
ほどエコカードのシステムのお話をしましたけれども、西宮のようは47万都市であれ、シ  
ステムが全市に回っているんですね。ということは、それ以下の町であれば何らかの形で  
ああいうツールを使っているんな主体をつないでいくということはできると思うんですよ。  
やっぱり頑張って誰かが引っ張っていく町づくりは、その人が消えるとポシャってしまう  
ので、そういう力も要りますが、一方では、普通に生活する中でなるべく関係性がつなが  
るような仕組みを作っておかないと、なかなか今、日本社会はそこまで土壌ができていま  
せんから、やっぱり土壌ができるまでの間はそういうツールが必要になってくると思うん  
ですね。だから、そういうこともその地域に合わせた方法論が要るのかなと思います。

(質問者3)

小川さんに質問いたします。

子どもたちがいろいろな価値観とめぐり合うと言うか、接することができるというお話  
でしたが、なかなかこのいろんな価値観というのは難しいところがありまして、例えば三  
重県にはすごい大きな「地球にやさしい原子力」という看板がありますが、そう思う人も  
あれば、またあれはジョークじゃないかという人もいるように、非常に価値観と言うか考  
え方の違いもあると思うんですが、企業さんが入ってくる場合には、そういったことにも

かなり留意しなければいけないのではないかと思います。その点はいかがでしょうか。

(小川)

基本的に、考え方が対立するような課題を子どもの前で出すかどうかについては、その学年とかその子どもたちの判断できる状態を見て提案する必要があると思います。ただ、先ほど循環の絵がありましたが、世の中あんなにうまく行っていないんですね。あれは原則です。あの循環が例えば国際的な経済競争の中で崩れたりとか、政治的なバランスで崩れたりとか、いろんなことで必ずしも○にはなっていないという状況があります。

小学生なんかには、あまり複雑なことを言ってもそこまで考える力はありませんから、自分で考えられる、例えば中学生とか高校生になったら、あの循環をベースにしながら、そこから矛盾を考え出してもらうことが大事なんです。その段階では、先ほどの原子力発電の問題にしても、それ以外の意見が対立するような課題についても、議論することが大切なので、その議論をしてその中からお互いの解決策を一緒に考えていき、そして一緒にそれを決定していくというようなことが社会のルールとして必要になってきますから、そういう力を身に付けるために、一つの価値観だけではない、多様な価値観での議論をできる力量を付けていくための授業だと思っていただければいいのかなと思います。

(質問者3)

中学生のそういう疑問などを出すための取り上げ方という意味ですか。

(小川)

ただ、それはそのあとの先生方が授業でどうそれをフォローしていくのかということとつながるんですよ。ですから、企業さんが行ってそこで話題を提供するまでに、先生方が一体どこまでのスパンの中でその授業設定を考えておられるのかということ整理しておかないと、単に企業さんが「こんなことをやっています」で終わるかも知れませんし、そのあとに先生たちがどういう方向性で子どもたちの議論を作っていきたいのかというようなフォロー、話し合いがすごく大事になってくるわけです。

けれども、まだそのところをしっかりと学校教育の中で議論をするような方向で、学校の先生たちがカリキュラム設定をされるケースがまだまだ少ないので、できるだけ我々が事前相談を受ける時は、そういうことの可能性を広げて、その上でその学校の現状に応じたプログラム提案をするというふうにしています。

(質問者3)

一度見せてもらいに行きたいものだと思っております。ありがとうございました。

(司会)

他にいかがでしょうか。

よろしいでしょうか。なければ私のほうから1点、お三方にお伺いしたいんですが、実際に学習で使っているプログラムがございましたが、あれは具体的にどういうプロセスで開発されているか、富士ゼロックスさんでしたら社内だけということになるんでしょうけれども、赤澤社長さんのところだと、何社かでチームを組まれて「食」をお考えみたいな、ああいう教材とかはどういうふうな形で、どのようなプロセスを経て具体的にもんでいったと言うか、そのへんをご紹介いただけるとありがたいのですが。

(赤澤)

基本的には集まったメンバーで、やはり1人が持っている知識、ノウハウ、スキルみたいなものは多分すごく小さいですから、みんなで時間をかけて議論することで完成度が高まったと思います。

それともう一つは、例えば我々が集まっただけでは足りない場合は、ファシリテーターとしてLEAFさんがおられるというのは重要な要件だと思います。そのチャンネルも持っているし、過去の経験もある。ただ、知識は我々にあるわけですから、そこをうまく引き出してもらえる第三者が、どうしても、協働、NPO、LEAFさんとの協働というふうなところかなと思います。

(小川)

今回のそのプログラムづくりについては、1年目に検討委員会を作っているんですよ。この検討委員会の中で経団連の関係の方とか松下電器の方とか、あと大学の先生、教育委員会、グリーン購入ネットワークの方、あとISO14001の関係の方とか、そういう教育と環境マネジメントとか環境とか社会貢献に関係するような関係者の方で検討委員会を作りまして、そこでこの基本的な循環型産業の構造とか、子どもたちに使ってもらいたい力とかいうことの話をした上で、その話し合いを企業の方にも聞いておいていただいて、それぞれテーマに分かれた分科会を設けました。

分科会で議論されたことをもう一回その検討委員会に投げてもらって、そこでまた検討委員会が意見を言うと。それで可能なのかどうかというようなことももう一度返して授業をやってもらって、授業をやった結果をまた発表してもらって感想を述べてという、このやり取りを3往復ぐらいやっているんですね。ですから、学校の先生からの意見だけでは

なくて、経済界の大御所の方からの意見もありますし、そういうことを企業の方々が、やっぱり自分たちが練り上げてきたプロセスがまた評価をされながら成長していくという1年目の過程があったので、比較的そのプログラムづくりそのものに意欲を燃やされたこともあるんじゃないかなと思います。

(松井)

「Kids' ISO プログラム」自体は、先ほど少しお話ししましたが、ArTech という組織がプログラムを作成しています。このプログラムの作成時期に富士ゼロックスが関わりを持っていたのが、そもそも富士ゼロックスと「Kids' ISO」の関わり合いの始まりです。

ただ、プログラムの展開の中で、この冊子を子どもたちに配るだけでは、実際のところ子どもは何もやってくれませんので、今回、村主小学校では、動機付け教育という形できっかけづくりをさせていただきました。

その動機付け教育については、担任の先生とすり合わせを行って、実際には私の子どもが6年生なものですから、実際に私が子どもの前でやってみて、「これ、理解できるか？」という話をしながら作成をしました。

「Kids' ISO」も、ただ単にワークブックを配るだけでは子どもはなかなかやってくれないと思いますので、活動の動機付けについては注意して取り組みました。

(司会)

ありがとうございました。

他にいかがでしょうか。あとお一方ないしお二方ぐらいもしございましたら。

よろしいでしょうか。

それでは、本日は1時半より開催させていただきましたセミナーもこれにてお開きとさせていただきますと思います。

皆様、本日、講師をお務めいただきました小川様、松井様、赤澤様のお三方に対しまして、今一度お礼の拍手を頂戴できればと思います。

どうも本日はありがとうございました。

ご来場の皆様、最後までご清聴ありがとうございました。

(終)